
心に歌を刻む武人

笑い顔の猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心に歌を刻む武人

【Nコード】

N4804P

【作者名】

笑い顔の猫

【あらすじ】

子供の身代わりで死んでしまった主人公・・・
しかし、その死は無駄死にだった！！だが神暇つぶしで「恋姫」の世界に飛ばされる・・・主人公に待ち受ける未来はいかに！！！！

注・主人公はチートなので嫌だったら戻るを押してください

プロローグ（前書き）

どうも！笑い顔の猫です。

初投稿ですがよろしくお願ひします！！！

プロローグ

．．．．．目が覚めると．．．．．

刹那「んう．．．んう．．．？．．．こじはどじだ？．．．
確か．．．車にひかれて？」

？？？「目が覚めた用やな」

刹那「んあ．．．？あんただれだ．．．？」

．．．．．目の前に幼女が現れた！！！！

？？？「誰が幼女やああああああ！！！！！！！！」

スパツアアアアアンツツ！！！！

刹那「ぐつはあああ！？」

心を読まれた．．．ハリセンだとお！？．．．この幼女．．．できる！！

？？？「．．．幼女でもう定位置なんやね．．．はあゝゝ
まあええわ．．．うちはあんたらの言う所の神様や」

紙さm「それはもうええからね」．．．また読まれた．．．チツ．．．

刹那「まあふざけるのはこのぐらいにしてその神様が一体
なんのようだ？」

神「あんま驚かんのやね・・・おもしろーもないな・・・」

刹那「そらー俺が死んでしまったんやし・・・
何よりあんた俺の心読んどったしなあ」

神「ほお~~~~意外と冷静やなあ・・・」

刹那「まあそれはいいとして・・・俺が突き飛ばした
子供はどうなった？」

神「ん？すり傷はあるみたいやけどぶじやで〜」

刹那「そつか・・・ならいい・・・」

〜回想〜

―――
見せつけるまで私眠らない~~~~~

刹那「はぁぁー【マクロス】シリーズの曲はやっぱりいいねーw
w」

俺はマクロスFの【ライオン】の曲を聴きながら家に帰る途中だっ
た・・・

刹那「また別のやつで今度は【Angel beats!】のCr
ow Songでも

聞こつかな?・・・ん?」

道路沿いに子供がボール遊び・・・おいおいなとこで遊んでるとあぶねーぞ・・・つて!!!?

刹那「んなぁ!?ボールを追っかけ道路に!?おいガキ!!!ツクソ
!!!!」

・・・キツキイイイイイイイ!!!
ドオツツン!!!

～回想終了～

刹那「しかし・・・車にひかれたくらいで死ぬとは・・・
ちくせう・・・」

神「まあまあwwさらに追い討ち掛けるけどあの子は本来あんたが
助けなくても
軽傷ですんだんだけどね」ww」

刹那「んなぁ!?それじゃあ何!?!?俺無駄死に!?!??
ふ・・・不幸だー」

神「まあまあwwあんた面白いからうちの暇つぶしに
異世界に送るでww・・・そうやねー恋姫がええかww本郷君の代
わりとして行かそうww」

刹那「え・・・マジ・・・?」

神「本気と書いてマジや」

刹那「つまり漫画の世界にいけるってことか？やつでも俺あんま強くないよ？」

神「大丈夫や！！いくつか願いかなえてチートにすりゃあええ！！」

刹那「よっしゃ~~~~！！ならいくつでもチート能力をたのむぜ~~~~ww」

神「え？でも？まあええか・・・」

ええんかい！！

- 1 ・身体能力・理解速度・記憶力をいまの5倍
- 2 ・どんな声色でもまねできるよう
- 3 ・完全コピー能力
- 4 ・完全再現能力（3・4に関しては現世の記憶を含む）
- 5 ・ゼロの使い魔であったガンダールヴの能力
- 6 ・植木の法則であった【1秒を10秒に変える力】

（制限なし）

し)

7・Fateであった投影魔術の能力(真名の解放な

衰^ミ
「

8・ネギまの長瀬 楓のアーティファクト「天狗之隠^{テングノカクレ}

+アイテム(なかにいろいろはいつてるWW

9・補助専用特殊人型デバイスを2つ(歌・音楽を歌
たり奏でたりすること)

味方の体調子・士気を最高にまで上げる)

10・神曲奏界ポリフォニカの作品であった単身楽団
(ピアノ・ギター・フルートなど)

刹那「・・・後文字の読み書きができるように後は「ストップや!
!」「んあ?」

神「さすがに切りががないわ!!!次ので最後にし!!!」

刹那「ういーWWじゃあ最後に容姿だが「待て」ん?」

神「容姿はうちが決めたる!!!安心しーや!不細工にはせんへん!
!!!」

刹那「ううーむ・・・わかったじゃあ頼むぜWW」

神「うむじゃあさっそくいってらっしや~~~~いWW「グイッ」

刹那「「ガコンッ」「うおっと!!!落とされるのは勘弁って何!?!?」

よけた先にもおとしあな!?!?!?!?」

神「ふっふっふ W W 神様をなめるやないでー W W」

刹那「うおおおおお!?!? 覚えてるおおおおお 口リ神いいいいいい!?!?!?!?!」

すると落ちながらハリセンを投げつけられて「誰が口リ神や!?!?!」
と聞こえた・・・

・ 絶妙な所に当たり、当たり所が悪く目の前がブラックアウトした・・・

能力の把握・訓練（前書き）

チート目指すならこんなもんかな？

能力の把握・訓練

刹那「・・・痛つつ・・・あんつのロリ神め・・・まあいいそれよりここどこだ？」

紙「・・・？
目が覚めたらどーみてもここ和室やな・・・ん？手

刹那「なになに『起きたようやなまず最初にそこで1年間くらい自分の能力を試しとき』

いきなり始めたところで戸惑うことやってあるやる？それとあんたが必要やと思われる文献やらも用意したたで』ふむ・・・たしかにそやな・・・ロリ神・・・グツジョブ！！って裏にも・・・（ペラッ）『ちなみに顔立ちは後ろ髪を結んだら上の中くらいのイケメンやけど髪結びを解いたら上の上くらいの美人の女顔にしたたで』って・・・へ!？」

お・・・女顔!？え・・・は!？そうだ！鏡・・・鏡あつたあつたどんな顔・・・

刹那「・・・わくべっぴんさんだ〜ってえええええええええええええええええ!?!？」

何してくれちゃってんの!？このロリ神は!？しかもご丁寧に『テヘツ』とか言っちゃてるし!！」

目の色は青色で髪は黒髪、膝のあたりまで伸びてて全体的に艶めいたような感覚があるような容姿・・・どっから見てもこりゃー美女にしか見えねーじゃねーか!?!・・・まあいいか・・・

(【マクロスF】の早乙女アルトに近い感じかな?)

髪結びとかなきやいい話だしな・・・先にここの把握だな・・・見る限りでいえば

テングノカクレミノ

「天狗之隠蓑」の中だなこりや・・・で文献は向こうか・・・

ん？魔法陣？「フォン！」（ネギまのエヴァの城であったのとまるつきり一緒w）

・・・うわゝ何万冊あるんだこりや・・・まるでナデシコのオモイカネの中だなこりや・・・

魔法陣で飛ばされるとそこには本本本本本本・・・本の山でした。

料理、服、医学、兵法、武術、カラクリ、音楽e t c・・・などなどさまざまなものがあった。

刹那「すげーな・・・こりや・・・よし・・・全部覚えちまおう!!」

3ヶ月後・・・

・・・やれやれ完全記憶の能力使っても覚えんのに3ヶ月かかちまっただぜ・・・

刹那「次は武術だなえゝつと手甲を付けて『完全コピー能力』の中から武術をリストアップして『ガンダールヴ』と『完全再現能力』発動させて・・・つとよし!!訓練開始すつか!!!」

6ヶ月後・・・

・・・つづくこれで剣術、双剣、槍術、弓術、長刀、無手の武術はすべて覚えまし
第3者からみれば確実に芸術といってもいいくらいだなこれは・・・
これで万事オツケーだなww

あっ・・・そーいやー

刹那「(スウー)おおおおい!!ロ」誰がロリ神やああああ
!!!」(ボゴオオン)
へぶしい!?!?」

今度はたらい落としだとお!?!?!やはり侮れん・・・!!

ロリ神「で何の用や?」

刹那「おう!あのなデバイスと単身楽団そろそろ渡してくれへんか?歌とか曲とか引きたいし歌いたいねん。」

ロリ神「デバイスはええけどあんた音楽とか引けんの?」

刹那「文献をコピってさらに完全再現能力を組み合したらできる!」

ロリ神「用頭回るわ・・・まあええわ!!まずはほれデバイス2つや。」

するとロリ神の手から光が2つ出てきて大きくなり・・・小さな手のひらサイズの妖精のような女の子が現れた・・・

「はじめまして（なのだよ）、マスター（〜）。」「

髪が赤くショートで活発そうで（なのだよ）と伸ばし口調の子と髪が金髪でロングで礼儀正しそうな子だった。・・・結構かわい
い！！

（お持ち帰り〜！！・・・て・・・っは！！いかんかん自重自
重・・・（笑））

ロリ神「名前はあんたが考えてあげてな〜」

刹那「ん〜・・・じゃあ、
髪がショートな子は「紅葉」
ロングの子は「青藍」
にしよう。」

青藍・紅葉「ありがとうございます（なのだよ）、マスター（〜）

刹那「紅葉、青藍・・・これからよろしくな！」

青藍・紅葉「よろしくお願いします（なのだよ）」

ロリ神「次に単身楽団や要望どりのものをそろえたで〜（フォン

！！・・・これは・・・ピアノとかギターとかはいいけど・・・三
味線や琴まで！？

ロリ神「オリジナル作品やで〜」

しぶいな〜・・・まあええか・・・俺も嫌いやないしww

ロリ神「あっそうやそうやオリジナルといえばあんたの武器も用意したんやww」

刹那「俺のオリジナルの武器？」

ロリ神「そうや！ほれっ（フォン）」

がしゃっがしゃっがしゃっがしゃん！！

うお・・・！！すげっ！！弓に大剣、刀、双剣、槍・・・どれもこれも技物だ・・・

刹那「サンクス〜」
ロリ「だからロリ神ゆーな！！（スパッン！）
」
「痛でっ!？」

まあええとして武器に名前をつけよ・・・」

そやね〜

大剣『竜王豹月』

弓『波月』

双剣『炎竜、氷竜』

刀『夢幻』

槍『夜影』

・・・つとこのくらいかね　後で馴染むかどうか試してみよ

刹那「さてと・・・武器はこんくらいにしておいて・・・紅葉！青
藍！今から歌と曲の練習
しよーぜ！..」

紅葉・青藍「わかりました（っただよ）」「」

能力のおかげでいろいろできるが体のほうの慣れはまだまだだ・・・
がんばんねーとww

3ヶ月後・・・

-----君をかき

むしって濁らせた　なのに　可憐に笑うところ　好きだったよー

ふうーこれですら歌に関しても憂いなしだなww

紅葉「お疲れ様なんだよ。うまく体に馴染むようになりましたか
く？」

刹那「ああ。もう完璧だ！能力で体が振り回されるとかずれとかは
もうない。」

青藍「そうですか・・・ならもうここから出ていくのですか？」

刹那「ああ・・・もうやることはやったし・・・さて、恋姫の世界
だが

どういふことになるかわからん・・・どこにつくかも考えておらん

しな・・・まあその状況に応じて
がんばるさ・・・『俺は俺であり続けるために。』

ハーレムは・・・まあ目指せたら目指そう・・・一番に目指すのは
納得のいくハッピーエンドを目指そう！

ロリ神「ちよい待ち。」

刹那「ってなんだよいざって一時に。」

ロリ神「名前どーすんの変えられるぞ？」

刹那「んーそやなー・・・よし性『歌』名『実』字は『奏曲』真
名が刹那でいいだろ・・・」

ロリ神「んーわかったほな行つてらしゃいや。では、『汝の旅先に
幸のあらんことを』」

刹那「おう！ありがとな！！」

さてこれから先どうなるかねえ？楽しみだ・・・

能力の把握・訓練（後書き）

むづん・・・納得のいく終わり方・・・むずいかも・・・

主人公・デバイス設定（前書き）

主人公とデバイスはこんな感じですよ！！

主人公・デバイス設定

主人公：歌実 奏曲（かじつ そうきよく） 真名：刹那^{せじな}

性別：男

年齢：17歳

身体的特徴

髪は黒髪で膝元まであり、瞳は青色で惹きつけられるような感覚する容姿していて髪結びを解くと

艶のある美しい女性にしか見えず、寝起きの姿を見れば殺人的にかわいらしすぎて誰もが赤面してしまふ。

髪を結んでいるときは10人中7人が振り返るくらいのイケメン、髪の結び目を解くと10人中10人が振り返るくらいに美女に見える。

身長：175cm

体系：あまり筋肉がないように見えるがとてつもなく力がある。（許緒・典章くらい）

性格：基本は誰にでも優しく明るい性格で自分のやることに良からうが悪からうが言い訳をせず、誰に何を言われようが自分を曲げるようなことをしないことから「俺は俺であり続けるために」という言葉をスローガンにしているとても自分に正直である。（たま〜に女性にとって齒が浮くようなことを言う天然な所が入っているかも？）

歌や音楽をこよなく愛していて誰かのために気持ちを込めて歌う時は髪結びを解く。

下種や外道は嫌っているため、そんな奴には容赦はまった

くしない。

(注・たまにうつかりしてたり、抜けているところもあつたり、ハ
ーレムとか言ってるくせに割と鈍感かも?)

デバイス

紅葉

性格：天真爛漫でいつもほのぼのしていて見ているものは
自然と和んでしまうようになるが、歌を歌っている時や演奏してい
る時、輝いているように見えとてもかっこいい。

好きなこと：歌や音楽、日向ぼっこ、マスターと青藍、動物

嫌いなこと：マスターを傷つける奴、怒った青藍

青藍

性格：冷静沈着であり、いつも紅葉のフォロー役で厳しい
ことを言うがとても優しい心の持ち主であるがきれると・・・(ガ
タガタ)。歌っている時や演奏している時は、心暖かくなるような
優しい笑みを浮かべていてもかわいらしい。

好きなこと：歌や音楽、読書、マスターと紅葉、動物

嫌いなこと：マスターを傷つける奴、台所に出るアレ

主人公・デバイス設定（後書き）

こんな感じで考えてますが後で変更あるかも？

第一話 命の意味（前書き）

さて始まりました！！
ただ、恋姫のキャラが出てくるのは少し先・・・

第一話 命の意味

刹那「あ痛たたた・・・出たと思ったとたんこれかよ・・・」

テングノカクレミノ
天狗之隠蓑から出たとたん空から落ちてびっくりしたわ・・・まあええか。

せやけどどこどころへんやろ？

刹那「どこかわからんしまず街か村でも目指そう・・・」

紅葉・青藍「「そうですね（なのだよ）」。「」

刹那「うお！？びっくりした・・・最初にいるならいるって言えよ・・・」

青藍「すいませんマスター、声をかけるタイミングがつかめなかったもので」

紅葉「ごめんなんだよマスター」。

刹那「ああ、まあいい・・・それより街か村でも目指そう。おまえらはあまりばれなようにしろよ？お前らのような奴はここじゃ見た者がいないから妖か何かに勘違いされたどんな目に会うかわかったもんじゃねーからな・・・お前らは戦闘になったら出てもいいが今は腰のバツクの中にも隠れてる。」

紅葉・青藍「わかりました（わかったんだよ）マスター。」

そう言うと2人は腰のバックの中に入って行った・・・
そして俺は天狗テングノカクレミノ之隠蓑を首に巻き腰に刀の『夢幻』を付け、背中に
弓の『波月』背負った。

刹那「さて、出発しま「ちよつと待てや、そこにーちゃん」ん？」
振り返ると3人組の男がいた。

???「ふへへ・・・見たこともない服着てんじゃねえか。とりあ
えず身ぐるみ全部置いて行けや！」

???「さつさとしやがれ！」

???「お、おとなしくするんだな。」

屑が3人剣を持って脅してきた。

刹那「てめえら馬鹿か？いきなり置いていけといわれて置いていく
やつがいるか？」

???「なんだとてめえ！！ぶつ殺されてえか！！！」

そう言っていきなり切りかかってきた・・・ツチイ！

刹那「フツ！！！」

???「ぐあああああつ！！！」

俺は即座に腰の刀に手をやり、男の斬撃をよけすれ違いざまに男を
切り裂いた・・・

刹那「お前らもこいつのようになりたくなかったら失せる・・・」

????「ひっひいひいひい」

そう言つて残りの2人は逃げて行った・・・

刹那「・・・」

いきなり殺すことになるとはな・・・わかつていたことだが・・・
チツ・・・

青藍「マスター・・・」

刹那「ああ・・・わかつてる・・・死にたくなかったら覚悟を決め
る・・・だろ？」

・・・わかつていたことだ・・・だが、わかつていても手が震えて
いた・・・

青藍「ええ・・・人の命は短いものです。平和に暮らしていたいと
思つていても生きていくことは難しく、誰かを殺さなければ生きて
いくことができない者もいます。さつき切つた者ももとは農民かも
しれません・・・ですが、それを仕方ないだけで済ましてはいけな
い・・・どん理由を付けても悪行に変わりがありません・・・その
罪に押しつぶされないよう、だからといって人殺しを肯定しないよ
うにしてください・・・。」

刹那「人の命は儚い、か・・・心に刻んでおくよ・・・ありがとな
・・・」

紅葉「どういたしましてなんだよ」

青藍「紅葉・・・それあたしのセリフ・・・（にこっ）」

紅葉「うにゃっ！！笑顔がこわいんだよっ！！！！」

刹那「いや・・・だったら怒らせちゃだめだろ・・・」

だが、ありがとな2人とも・・・さて出発するか・・・

第一話 命の意味（後書き）

シリアスになった上に使ってる言葉使い少し変になったのかな？
感想ください！！

第二話 諦めてんじゃねえ!! (前書き)

- ・ 簡単に言うと主人公は英雄肌みたいなもんに・・・
自分が気に入らないことがあるばまっすぐにぶつかるタイプです・・・

第二話 諦めてんじゃねえ!!

刹那「ああ……やつと街が見えてきた……」

食糧があつた（「天狗之隠蓑」^{テングノカクレミノ}の中に大量に食料を貯蓄している）からさほど困らなかつたが1週間もかかるとは……このころになると手は震えることはもうなかつた……この間何度も賊に襲われたが大事にいたらなかつた。

刹那「何にせよ町だ……うまい飯でもくいてえ!!」

そう言つて街に急いだ……だが

刹那「な……んだ……これは……」

目の前に写る光景は、ぼろぼろになつた家……傷まみれの人もいて、そして何より……誰もが目に光をともしていない人ばかりであつた。

刹那「おい何があつたんだ!？」

「ああ……賊が街に攻め込んできて……刃向かう奴から順番に殺され女子供や食料をみんな持つて行かれちまつた……」

……この時代じゃよくあることだ……でも、

刹那「それでてめえらは何やってんだよ……悔しくねえのかよ……取り戻したくねえのかよ……」

「悔しいよ！！取り戻してえよ！！でもどうすることもできねえんだよ！！刃向かった奴から順番に殺されちまうんだよ！！だから諦めるしか・・・ねえんだよ・・・」

刹那「！！ふざけんじゃねえよ！！諦めたらそこでおわちまうだろーが！！取り戻したければ戦って取り戻すしかねえだろうが！！取り戻せねえんじゃねえ！！ただ逃げてちゃ何も変わらねーだろーが！！死にたくねえ、奪われたくねえなら戦って守り通すしかねえだろーが！！！！！！」

「んなもんわかってんだよ！！！！でもよ・・・でも・・・よ。」

そう言うと、彼らの目から涙がこぼれおちた・・・

刹那「（だれだって恐いのは一緒か・・・なら）紅葉、青藍・・・歌おう・・・」

紅葉・青藍「はい、マスター」

俺と2人は楽器を構え髪結びを解き歌い始めた・・・

【希望の唄】

あなたがいて あなたといて

S i d e 民

「・・・死にたくねえ、奪われたくねえなら戦って守り通すしかねえだろー！！！！！！」

街に来た男のいうことはわかっていたことだったが・・・

「んなもんわかってんだよ!!!でもよ・・・でも・・・よ。」

恐れていたのだった・・・失敗すれば死んでしまう、失敗すれば奴らが復讐されてもっと多くの人が殺されてしまうことが・・・行動を起こそうとしても、手や足が鉛のように重くなったように感じていて動くことができなかった・・・すると・・・

???」「・・・紅葉・青藍・・・歌おう・・・」

そう言うと男の鞆から2人のかわいらしい小さな女の子が空に舞い出てきてどこからか楽器を出した。

「なん・・・!!!!」

男が髪結びを解くと思わず言葉を失った・・・男が髪結びを解くと風に揺られた長い髪、透き通るような白い肌、青空を思わせる瞳、全体的に艶のあるような容姿・・・とてつもなく美しかった・・・するとそいつは歌い始めた・・・

あなたがいて あなたという

急に何をと思ったがその歌を聴いていると

【もしもこの世にあなたが存在していなかったら
100ある笑顔のうち少なくとも40はなくなる
もしも地球の裏側 あなたがいると分かったら

S i d e

刹那

覚悟ができたようだな・・・ならば・・・

刹那「さあ行くぞ！！奪われたものを取り返し、守り抜くための闘いを！！！！」

「「「「「「「「「「「「「「「」

さて・・・これが初陣だ・・・取り返しに行きますか！！！！

第二話 諦めてんじゃねえ!!!(後書き)

「希望の唄」は雰囲気合ってるかな?と思いついてみましたww
どうでしょう? :

第三話 戦闘開始 天の御使い 改 (前書き)

戦闘開始しますww

ちなみに技名はオリジナルです。

第三話 戦闘開始 天の御使い 改

あの後、俺は武器を揃え戦う兵士達に渡し街を出立して賊ねぐらにしている城まで来た・・・

刹那「敵はどのくらいいるんだ？」

「おおよそ900はいると思われませす」

「ふむ・・・」

こっちの戦力600・・・策を使うか

「隊を3つに分ける！！前線は300、伏兵200、弓兵100だ！！まず前線の兵が囷となり奴らをおびき出す。奴らを溪谷に誘い込み、挟み撃ちにして奴らの逃げ道を塞ぎ、矢の雨を降らし奴らをせん滅させる！！！」

「わかりました！！！」

さて・・・準備が整った・・・さあ、始めようか・・・『俺が俺で
あり続けるために』

side

賊の頭領

今回は大量だったぜ！！！！食料が大量に入ったし後は女どもとガキどもを売って大もうけだ！！！！

「お頭!!」

「アア?なんだあ?」

「さつき襲った街の連中が武器を持ってこっちに来てやす!!」

「何だつて!?!」

見ているとあまり数がいねえようだが・・・ん?一人出てきやがった・・・?おお!?!すつげえ!

べっぴんじゃねえか!!

???「人々の大切なものを奪い、食らい、踏みつぶしていく賊どもよ!俺は貴様らを許さない!!奪われたものを返してもらおうぞ!!」

「ぎやはっはっはっは!!綺麗な顔してずいぶんなことを言うてくれるじゃなねーか!!」「そんな数で俺たちに勝てると思ってるのか?」「何なら今からお前をかわいがってやるーか?」
そんな事を聞いたあいつはこっちを馬鹿にするように・・・

???「・・・ごちゃごちゃご宅はいいからかかってきたら?ああ
そうか・・・恐くてかかってこれないような臆病者だったか・・・
だったらこんな臆病者を相手にするだけ無駄だったな・・・だが、
置き土産だけはもらっておいてもらおう!!!!」

そう言つて奴は矢を放ち、俺たちの仲間の1人に矢を放ち頭を貫き、
奴は下がっていった・・・

「あのアマああああああ!!ふざけたことをしやがって!!!!
!野郎ども!!すぐ奴らをつぶしに行くぞ!!!!そしてあのアマを

捕まえてなぶり殺しにするぞ！！！！！！」

「！！！！」

あのアマ・・・目に物見せてくれるわ！！！！！！

side 刹那

「賊どもが出てきました！！！！」

うまくいったか・・・

刹那「よし！！このまま溪谷に誘い込むぞ！！！！」

「了解しました！！！！」

さて・・・その前に軽く消し掛けておくか・・・

刹那「先に行け！！後で追う！！！！」

「え！？あ・・・わ、わかりました！！！！」

そう言つて刀『夢幻』から槍『夜影』に持ち替えそのまま賊に切り込みをかける

「ああああああああああ！！！！ゼイツ！！！！ゼイツ！！！！ハッ！！！！」

『光影・瞬影陣』

賊の剣を弾き、その反動を利用して隣にいた別の賊に突き刺す！！

ガキイイイイイイイイン！！ガキツイイイイイン！！ドスッ！！ドスッ！！

「グアッ！！」「グアアアアッ！！」「ガツハアッ！！」

刹那「どうしたどうした！！この程度なのか？やはり腰抜けなのか？悔しくばもつと攻めてくるがいい！！！」

「舐めやがってえええ！！！野郎ども！！！！さっさとぶっ殺せ！！！」

刹那「くははははは！！ほーらほら！！そんなんじゃ俺を殺すなんてのは夢のまた夢だ！！！」

そう言って挑発し、後退しつつ戦闘繰り返し、そして・・・

刹那「よし！！反転しろ！！仲間とともにせん滅させるぞ！！！」

さて反撃開始だ！！！！

刹那「俺が今から突撃を仕掛ける！！続けええええ！！！」

「「「「心！！」「」「」

刹那「紅葉・青藍！！歌を頼むぞ！！！」

紅葉・青藍「「わかりました、マスター！！！」

溪谷まで誘い込むことに成功し、反撃が始めた・・・

歌実様の策が実行されました。するとそこで・・・

刹那「紅葉・青藍！歌を頼むぞ！！」

紅葉・青藍「わかりました、マスター！！」

ますたー？と言っていたがどういう意味なのかは分からないが2人の小さな女の子空を舞い街でいた時と違う歌を歌い始めた・・・

【Alchemy】

【無限に生きたい

無限に生きられたら

全て叶う

でもいろんなものが

あたしを追い込んでく————・・・】

空を舞いつつ歌っている小さな女の子の歌を聴いていると力がわいてくるようだ・・・歌実様は

小さな女の子が歌い始めると武器を双剣に変え賊に突込んで行った。

「俺たちも続くぞ！！」「」「」
「心！！」「」

そう言って歌実様に続いて突撃を開始した！！

第三話 戦闘開始 天の御使い 改 (後書き)

笑い猫「どうも〜笑い顔の猫です〜いかがでしたかにゃ〜」

刹那「俺男なのに姫・・・(泣)」

笑い猫「にゃはは〜そのうちそれがいいことあるよ」

刹那「どんな?」

笑い猫「いつか女装に目覚m」「いやだああああ!?!」くっくっくっ
くっww
」

第四話 明日へつなぐ命 愛馬現る(前書き)

よし馬を仲間にしよう!!

第四話 明日へつなく命 愛馬現る

街に戻り、賊に攫われた女子供は無事で家族に再会を果たし街の人々は歡喜に包まれその日宴が開かれた・・・ある者は笑い、ある者は涙を流し、またある者はその両方だった者もいた・・・

刹那「奪われたものはすべて取り戻すことができた！！だが、それを取り返すために行動した結果失われた者もいるだろう・・・」

その言葉を聞き、落ち込んだ雰囲気になるが・・・

刹那「しかし！！俺たちは生きている！！大切な物を取り返し、守ることができた！！明日にその命をつなげるために！！死んでいった者たちのために！！今日という日に思い、笑い、歌を歌おう！！！！」

そう言うと紅葉、青藍が楽器を構え、刹那と共に奏で、歌い始めた・・・

【生きてこそ】

【ママ私が生まれた日の 空はどんな色
パパ私が生まれた日の 気持ちはどうだった？

あれから言葉を覚えて 私なりの
愛も甘え方も 身体にしみこんだ
.....

side

三人称

その歌を聴き・・・再び涙を流す者、笑みを浮かべ聴き惚れる者、さまざまな者がその歌を聞き自覚した・・・

俺たちは生きていると、死んでいた者たちのためにも、明日を憂い、新たな命をつなぐため生きなければならぬと・・・

side

刹那

次の日以降、街の復興を手伝いを行った。建築、畑の開拓、賊の対策に罫の作り方などで効率のよい方法を教えたりしていた。

これで街の心配は軽減されるだろう・・・完全に安全になったとは言えないがましにはなるはずだ・・・

週間後・・・街は軌道に乗り始めたので旅を再開することにした。

「街を救っていただきありがとうございます。御使い様、近くにお出でになった時はどうぞ来てください。街をあげて歓迎します。」

刹那「御使い様はやめてくれ・・・それとそこまで大げさにしなくてもいい。俺はあんたらが元気ならそれでいい・・・がんばりなよ・・・元気だな!!」

「はい！歌実様もお元気で・・・」

刹那「ありがとな・・・また会おう!!」

そう言つて旅を再開した・・・

数日後、

各地を転々と雲のように流れ、賊をつぶし多くの民を救い続けていたが・・・

刹那「森のど真ん中でここがどこだかまったくわからん・・・
適当に歩くもんじゃねーな・・・今夜はここで野宿しよう・・・」

紅葉「マスター無計画で動きすぎなんだよ。」

刹那「別にいいだろ？食糧なんかたくさんあるし・・・ん？」

青藍「どうかしましたか？マスター」

刹那「・・・何か来る・・・」

気配の感じる方向に目をやると・・・

刹那「・・・馬？・・・」

近づいてきたのは白い大きな馬だった・・・

紅葉「うわー!!おっきな馬なんだよ　でもどおしたんだろ？
けがしてるよマスター？」

たしかにその馬は所々けがをしていて衰弱した様子だった・・・

刹那「・・・おや？狼にでも襲われたか？大丈夫かな？」

おどけたように言った途端、その馬は倒れた・・・

刹那「ふむ・・・なんかの縁かねえ？治療してやるか・・・」

紅葉「さすがマスターなんだよ」

刹那「べつに・・・ただの気まぐれだ・・・」

それから3日間、馬の看病続けた・・・その看病のかいあって馬はとても元気になった・・・

刹那「お前・・・元気になってよかったな・・・」

ヒーンッ！！

刹那「そうかじゃあな・・・」ツハミ！「おわっと・・・ん？」

去ろうとすると袖をかまれた。

刹那「んー？なんだ？どうした？」

そう問いかけると白い馬は俺を横に近づき覗き込んできた。

紅葉「たぶんこの子はマスターのことをマスターにしたいと思ってるんだよ」

つまりなにか？俺に主になってくれってか？

刹那「そうなのか・・・？」

馬に問いかけると

ブルツ！！と言ってうなずいた

刹那「そうか・・・なら今日からお前は俺の仲間だ・・・名前は『トウゲツ冬月』でどうだ？

ヒヒーン！！

刹那「そうか・・・気に入ったか・・・よろしくな『冬月』！！」
ヒヒーン！！

こうして1人と2人のデバイスに、馬が加わった・・・

紅葉「よろしくなんだよ」冬g「カプツ！」にゃ~~~~！！噛まないんで欲し〜んだよ〜！！！！」

刹那「おお！さっそく仲良くなつとるの〜ww」

青藍「ええ！？アレ絶対襲われてますよマスター！！紅葉！！こつよーうー！！」

この日珍しく慌てる青藍を見た・・・

第四話 明日へつなぐ命 愛馬現る(後書き)

ギャグの方は練習します・・・

第五話 刹那、呉の王に出会う(前書き)

どもども〜笑い猫です〜

やっと主要キャラを出します〜まずは呉です！

刹那「やっとか・・・」

スルーしてはい、どうぞ〜

刹那「おい！無視すんな！」

第五話 刹那、呉の王に出会う

冬月が仲間になり、旅を続け建業までやってきた・・・

紅葉「でもマスターただふらふらしてて偶然ここに来ただけなのに・・・実はマスターって方向音痴なんだよ」

青藍「紅葉、それ言っちゃダメ。」

冬月「ブルルツ（俺も疲れた）」

気にしない気にしない・・・いずれ直す・・・

刹那「この頃黄色い布を付けた賊が多い・・・そろそろ黄巾の乱が勃発するな・・・まあ久しぶりの街だ、ゆっくり飯でも食って、ん？」

・・・血の匂い・・・

「????」
「!」

「????」
「!」

騒がしいな・・・何かあったみたいだ・・・

刹那「すみません、なにかあったのですか？」

「????」「ん？何じゃお主？（ほう・・・なかなかの顔立ちじゃ）」

刹那「旅の者です。それより一体何が？」

「????」「実は今賊に街の民を刺されて、人質をとっておってな……」

ああ、なるほど……じいさんは腹から血を流してて、ばあさんがつかまってやがる……どこも同じか……

刹那「俺が何とかしよう……」

「????」「何?……おぬしできるのか?」

刹那「ええ、任せてください」

……あのじいさん、早くしねえとやべえな……急ぐとしよう

side 孫策

賊に刺され地面に横たわり、血溜まりを作っているおじいちゃん、人質にされおじいさんの名を呼ぶおばあさん……溢れ出す怒りを必死に抑える。叶うなら今すぐ八つ裂きにしてやりたい。しかし、おばあちゃんを人質に捕られている以上、うかつな事は出来ない。

老人「うう……」

今も苦しんでいるおじいちゃんを早く助けないと取り返しをつかない事になってしまう。

それだけは避けなければいけない。

「俺達の要求は聞いたよなあ？」

「大人しく従った方がいいぜえ？」

「じゃねーと・・・あんたの大事な民が死んじまっぞお？まあすでに一人死にそうだけどなあ」

「「「ぎゃはははははー！」「」「」

孫策「きさまらああー！！！！」

「おっと！ 下手な真似はするなよ？」

孫策「くっ！」

「なんだ？ そんなにこのババアが大事かよ？」

孫策「・・・ええ、そうよ。その人は私の事を孫の様に可愛がってくれた。私にとって大事な人・・・」

老婆「雪蓮ちゃん・・・」

孫策「待っててねおばあちゃん・・・すぐに助けてあげるから！」

そうは言うものの・・・一体どうすればいいの？このままじゃおじいちゃんが・・・

????「おい、その屑ども・・・」

！？急に誰！？

そう思い声のする方向へ向いてみると顔立ちの整った男がいた……

「なんだとてめえ！！」

「……さつさとその人を離せ……」

「はぁ？離せと言われて話すバカがどこに居やがる。馬鹿か？てめえ。」

「……」
「……離すつもりはないんだな？だったら覚悟してもらおう……」

「何を言つて「ザクッ！！」ぐああああ！！？」

おばあさんを人質に取っていた男の両腕が宙に舞った。

「……！？今の動き、全く見えなかった……」

「ひい！？」

「ま、待ってくれ！！ あれは俺じゃ……」

「……」
「……はぁ……そんな言い訳が通ると思っているのか？くたばれ。」

「ザンッ！！」「ドシユッ！！」「ドスッ！！」

「ぐああああっ!!」「ぎゃあああああっ!!」「があああああっ!!」

そう言つて男は3人を切り捨てた。

????「大丈夫ですかおばあさん？」

老婆「わ、私の事よりおじいさんが!!」

おばあちゃんが私達の元に駆け寄つて来た。

老婆「おじいさん! おじいさん!」

孫策「冥琳! 医者を!!」

周瑜「すでに呼んでいる!」

老人「無駄じゃよ・・・わしはもう・・・」

孫策「何言つてるのおじいちゃん!!」

老人「わし・・・の・・・体の・・・事・・・は・・・わしが・・・
番・・・わか・・・」

老婆「そんな!？」

老人「すま・・・ない・・・ばあさ・・・ん」

老婆「おじいさん！ 私を置いて先に逝かないでくださいよ！！」

黄蓋「ええい！！ 医者はまだか！？」

孫策「おじいちゃん！ 諦めないで！！」

何でもいい。おじいちゃんを助けて！！

誰もが諦めかけたその時、救世主が現れた。

????「その人の言う通りだ・・・簡単にあきらめんな！！」

老人「お・・・おぬ・・・し・・・は」

side 刹那

出血がひどいがこれならなんとかなる！！

刹那「さっさとしねーとまずい・・・おいあんたは離れてろ。俺が治療する・・・」

????「ねえ・・・あなたなら何とかなるの？ おじいちゃんを助けられるの？」

子どもの様に彼女はしがみついていた・・・

「???」「お願い！ 私に出来る事は何でもする！ だから・・・だからおじいちゃんを！！」

そんな彼女の頭を優しくなでる

刹那「ああ、君の大切な人は俺が助けてみせる・・・異国の治療法だが助けられるはずだ！！」

そう言つて針、メス、治療薬品、アルコールランプなどを出し、治療し始めた・・・

刹那「じいさん・・・諦めるなよ・・・あんただつてそこのお孫さんとはあさんを泣かせたいわけじゃねえだろ？だから頑張れよ！！」

20分後・・・

刹那「これで傷を塞いで・・・っと。ふ~~~~~~~~これ何とか助かる・・・」

早っ!?

まあチートですし

「???」「おじいちゃ「ガシッ!」「んぐう!?!?」

あぶね〜今この人抱きつこうとしたよ・・・

刹那「ちよつと待て！！治療したすぐだぞ！？今は安静にさせておけ！！ぎりぎりだったんだから！！」

????「え？ああ・・・そうだったわ。ごめんなさい。ついうれしくて・・・」

刹那「まあそのまま安静にして1ヶ月くらいしたらまた元気に歩けるようになるさ・・・」

すると後ろから妙齡の女性がやってきて

????「我が呉の民を救ってくれて礼を言っぞ・・・」

刹那「いや大したことはやってない」

????「そんな謙遜することはないぞ？お主名前は何という？」

刹那「俺の名は歌実・・・歌実 奏曲だ・・・」

????「な！？お主が 美しき無双の舞姫 天の御使い ！？じやが、女ではなかったか？」

刹那「はあくやっぱそう見えんだ・・・（泣、後で説明してやる・・・。それよりあんたらは？」

雪蓮「私は孫策、真名は雪蓮。呉の王よ。おじいさんを救ってくれてありがとう・・・」

刹那「真名いいのか？」

雪蓮「いいわよ。おじいさんを救ってくれたお礼よ。」

刹那「ならありがたく呼ばせてもらおう。」

祭「おおそうじゃ。わしは黄蓋、真名は祭じゃ。」

冥淋「周瑜公謹、真名は冥淋だ。」

刹那「あなたたちもか？」

祭「うむ、策殿が預けるのならわしらも預けよう。」

刹那「そうか、なら俺のことも刹那と呼んでくれ。」（二カッ

一同「カッツ・・・／＼」

刹那「ん？どうした？顔が赤いぞ？」

雪蓮「な、何でもないわ（カッ）いいとは思っていたけど、まさかあんな笑顔をしてくれるとは・・・反則よ／＼」

祭「な、何でもないのじゃ（不覚にもドキッとしてしまったのじゃ／＼）」

冥淋「い、いやなんでもない（あんな男も世の中にはいるのだな／＼）」

刹那「？」

・・・こうして俺は呉の王、孫策・・・もとい雪蓮にであった・・・

それにしても3人ともどうしたんだ？

紅葉・青藍「鈍感（なんだよ）・・・」

第五話 刹那、呉の王に出会う（後書き）

刹那「なんで急に真っ赤になったんだろ？風邪引いたか？」

笑い猫「この鈍感やるゝゝ！！普通に気づけよ！！」

刹那「ん？何にだ？」

笑い猫「クツ！しかたない・・・今度女装編でも作ってやる！！」

刹那「え！？おい！！やめろっ！俺が一体何をしたって、あ！？こら逃げるな！

待てええええええエエエ！！！！」

第六話 刹那、呉の客将になる、雪連のたくらみ（前書き）

刹那「さてこれからが大変だ・・・賊つぶしに、街や農業の政策、そして冥淋の死亡フラグをたたき折る作業もあるし・・・」

笑い猫「ハーレム計画に歌実ファンクラブの設立、刹那女装計画もあるし・・・」

刹那「そうそうって、ちよつと待てええええい！！なんだそれ！？聞いてねえぞ！？！？」

笑い猫「すでに決定事項だww諦めるd」

刹那「いやだあああああああ！！！！！！」

第六話 刹那、呉の客将になる、雪蓮のたくらみ

自己紹介をした後、俺は城に招かれ、城にいた陸遜、もとい穩真名を交換し、紅葉・青藍を紹介した・・・2人を見たときすごく驚かれた・・・

雪蓮「ところで刹那は何で呉に来たの？」

刹那「雪蓮に客将にしてもらおうと思ってな・・・賊どもがうつとしくておちおち旅をしてられん・・・路銀もそろそろ尽きちまうからちようどいいしな、ここいらの賊どもが落ち着くまで雇ってもらえないか？それまでは文官としても働こう・・・」

刹那「

雪蓮「あれだけの武があるなら文句はないわ！よろしくね

祭「よろしくの刹那。」

冥淋「文官としても働けるのか、それは助かる・・・よろしく頼むぞ刹那。」

穩「よろしくお願いしますね〜刹那さん」

刹那「ああ！よろしく！」

紅葉・青藍「「よろしくお願いします（なんだよ）」

「こうして俺は呉の客将になった……ここで終われば何もなければ問題なかったのだが……」

雪蓮「あ！そうだった！ねえ刹那なんであなたが女だなんて言われてるの？どう見たって男じゃない？」

祭「おお！そういうえばそうじゃなくなぜじゃ？」

刹那「……ああ……それはな……」「バサッ」「こう言う訳だからだよ……」

冥淋「なっ！！」

祭「なんと……」

雪連「え!?!」

穩「うわゝ　すぐきれゝですね。」

刹那「……（泣）」

雪連「……刹那、あなた女だったの？」

刹那「違うわ!!俺は男だ!!」

一同「……男には全然見えない（じゃ）（ませ〜ん）」

刹那「うう……俺男なのに……（泣）」

紅葉「だ、大丈夫なんだよ！髪を結んでいれば男性にきちんと見えるんだよ！」

刹那「じゃあこのままだったら？」

雪連「どう見ても女ね」

刹那「「グザアアアツ！」……そこは嘘でもいいから男と言って欲しかった……」

紅葉「わわっ！マスター元気出してほしーんだよー！！」

がつくりと崩れ暗い雰囲気を出していると……

雪連「まあまあ そんなことで辛気臭い雰囲気なんか出さないの！」

刹那「とどめを刺した雪連が言うか！」

雪連「あはは、あ、そうだ！今夜歓迎の意味を込めて宴を開くわよ」

紅葉「え！？歓迎会！？嬉しいんだよー！！」

青藍「……紅葉、飲みすぎたら駄目だからね、マスターもですよ。」

刹那「え？俺もか？」

青藍「あなたが飲みすぎたら悪酔いしてしまうからですよ。」

・前の時（耐えるのに）大変苦労しました。」

刹那「ん〜・・・最初の内は覚えてるが・・・後の記憶が全くないんだが・・・」

青藍「だったら飲みすぎないでくださいね（ニッコリ）」

刹那「ヒッ！サ、サーイエッサー！！」

青藍「・・・その笑顔怖いよ（ガタガタブルブル）・・・まあ飲み過ぎなきゃいいんだ！

宴の時までゆっくりしてよう・・・

刹那「じゃあ俺休んどくわ、紅葉も青藍テキトーに休んどけよ、あ、そうだ、雪連！宴の時は天の酒も出すぞ〜後でな〜」す
たすた

s e i d 雪連

天のお酒！？うわ〜楽しみだな〜 まあそれより・・・

雪連「ふふふ」

冥淋「雪連、いったい何を考えている？」

やっぱり冥琳は気がついたわね・・・

雪連「ん〜私は刹那にこの国に残ってもらいたいな〜って

思っ て あれだけの者そうはいないでしょ？」

祭「わしも策殿に同感じゃ、それにいい目つきをしておっ
たしな……」

祭もやはりあの海のように蒼いのはすべてを見抜いてい
るような目、それに刹那の優しさが見えた様な気がしていた……

冥淋「たしかにな……しかもあれだけの武を持っていた
からな……わからなくはない。」

雪連「でしょ？それに私は王としてではなく、女としてで
も刹那が欲しいのよ」

私は刹那のことが好きになってしまったもの

祭「わしも策殿と同じ刹那が気に入ったのじゃ。」

冥淋「はあ、それでどうするだ？」

雪連「だから宴を開くんじゃない」

青藍「やめておいた方がいいですよ……」

雪連「わ！？青藍ちゃんたちいたんだ……小さくて気が
つかなかったわ。」

冥淋「お前たちはいいのか？主が食われるかも知れんのだ
ぞ？」

青藍「それを選ぶのはマスターです、なった時はなったときです……ですが、酔わせて襲うのは得策ではありません。」

雪連「なんで？」

青藍「それは……その……」

紅葉「マスターは酔っちゃうと可愛くなるんだよ」

青藍「こ、紅葉!!」

一同「」「」「はあ?」「」「」

青藍「はあ〜見ればわかりますが、やめておいた方がいいです……」

紅葉「あれは……下手したら……うう!!だめだめ!思い出しちゃダメ……」

何かわからないが青藍は赤くなり、紅葉は悶え始めた……

雪連「ん〜?わからないけどやってみましょ 気になるし

ね
「

冥淋「お、おい雪連!!」

雪連「きつと大丈夫よ冥淋、心配ないわ 早速準備しまし
よ……」

ブルッ！！

刹那「ん？なんかいやな予感が……気のせいかな？」

第六話 刹那、呉の客将になる、雪連のたくらみ（後書き）

刹那「・・・おい、何するつもりだ？」

笑い猫「秘密なのだ」

刹那「なんかいやな予感しかしねえ!!!」

笑い猫「なら一つだけ・・・その予感は大当たり」

刹那「いったい何が起こんだよ!？」

笑い猫「それではみなさんばいばいww」

刹那「無視すんじゃないやねええええええええ!!!!!!」

第七話 宴 飲みすぎ 可愛いは正義!! (前書き)

笑い猫「うん・・・まずいかも？」

刹那「これがまずいどころの騒ぎか!!!!」

笑い猫「キャラ崩壊してないよね？」

刹那「知るか!!この駄作者めが!!!!」

笑い猫「そうかそーうかww今度もとかわいk「ちよーしこいて
すんませんでしたああああ!!!!!!」わかればよろしい(ま
あ遅いがなww)」

ひでえ!?

第七話 宴 飲みすぎ 可愛いは正義!!

そんなこんなで宴開始・・・

刹那「ならこんな酒はどうです?」

祭「ほお〜なかなかうまいのお!しかし不思議じゃの・・・お主の懐は蔵になつとるのか?」

刹那「まあそんなもんですww」

雪蓮「刹那〜もつとお酒出して〜」

刹那「あーはいはいつと!今度は・・・鬼殺し・・・っていう酒だ・・・かな〜り強いよ?」

いろいろな酒を出しては飲んでを繰り返していた・・・

刹那「(マジでどんだけ飲むんだよ・・・底なしかよ・・・)」

穩「はい じゃあ頂きますね〜」がぶりっ」「

・・・え!?!?がぶ飲みしちゃ!?

穩「わひゃあああああ!?!?!」

刹那「あゝあ、言わんこつちゃない・・・強いつて言ったのに・・・つて雪蓮?」

雪蓮「ほ～らあ刹那も飲ませてばっかじゃなくてこっち来て一緒に飲みましょ」

刹那「絡み酒かよ・・・悪いが飲みすぎるなと青藍にいわ」「ガッポオ!」「むごお!?!?」

雪蓮「青藍には許可を取ったわ だから飲みなさい」

刹那「むごお～めいりぐ～たしゅけ～(冥琳!助けてくれ～!!!)」

助けを呼ぶも・・・

冥琳「(無理だ・・・諦める)」

刹那「むごごおおお!?(見捨てられた!?!?)」

それから後、雪蓮に淹のように酒を飲まされた。

・・・30分後・・・

刹那「・・・うっん・・・えへへ」

雪蓮「あれ～飲ませすぎちゃったかしら?」

穏「あの～刹那さん大丈夫ですか?」

刹那「うっん・・・えい (シユル)」

刹那はおもむろに髪結びを解くと・・・

紅葉・青藍「」（あーあ、始まつちやった・・・ここは退散しと）
う・・・」

刹那「にやはは〜 紅葉ちゃん、青藍ちゃん」

紅葉「うにゃ!？」

青藍「クツ!!遅かったか・・・」

一同「「「「「え?」「」「」

雪蓮「えーっと・・・子供っぽくなっちゃった?」

冥琳「・・・紅葉が言っていたのはこー言うことだったのか?」

祭「・・・なんだか意外じゃの・・・」

青藍がやめておいた方が良かったが、なんだか拍子抜けしたな〜と思つてたが・・・

刹那（酔）「にやはは〜ん」

雪蓮「あー刹那?2人を離してあげなさい、苦しそうよ?」

刹那（酔）「ぐすつままだ抱きついていたい・・・だめ?」（上目使い）
「

一同「「「「「!!//////」「」「」

この時青藍の言ったことが理解できた、それは、まるで雨の日に見

つけた捨猫のようだった・・・

首を傾げながらウルウルした瞳で見上げられて、耐えられる人はいるだろうか・・・

いやいない、唯一人として存在しない。

雪蓮「うわー／＼／＼／＼（やばいわ・・・すごく可愛い・・・）」

冥琳「・・・／＼／＼（うう・・・刹那を見ていると顔が熱く・・・）」

祭「／＼／＼（わしはそんな趣味はない・・・わしは・・・）」

穩「はびゅ!?／＼／＼（いけません・・・思わず鼻血が・・・）」

一同刹那を見て思っただろうことは・・・

一同「くくく（今の刹那は殺人的にかわいすぎる）（のじゃ）（です）（）!」「くくく」

刹那（酔）「?皆どうしたの?お顔真っ赤だよ?大丈夫?(コテンツ)」「首をかしげた・・・」

一同「くくくブハアツ!!」「くくく」

刹那（酔）「あやや?みんな鼻血が出てるよ?大丈夫?おいしゃさんよんでくるね。」

その後が大変だった・・・この時の刹那を見た者は鼻血を拭いて倒れ、医務室は貧血の者で溢れ返り、廊下は見回りをしていた兵士とかの鼻血で血まみれになってしまった・・・

第三者の者から見たらすごく不気味だ・・・

雪蓮「・・・ねえ、琳冥・・・」

冥琳「・・・ああ、・・・」

雪蓮・冥琳「それは、これより先封印しましょう（しよう）・・・」

この日、歌実 奏曲（女バージョン）のファン倶楽部が結成されたとか何とか・・・そして、

刹那「あれは俺じゃない・・・あれは・・・」

今度は酔った時のことを覚えていたらしい・・・ご首相様（チー
ーーーーン）

第七話 宴 飲みすぎ 可愛いは正義!! (後書き)

刹那「あれは俺じゃない・・・あれは「間違いなくお前だww」
ちがああああああう!!!!!!」

笑い猫「まあそれは置いて・・・」

刹那「スルーされた!？」

笑い猫「張三姉妹どーしよう?同じ歌物だから全然アイデアが浮かばん・・・」

刹那「まだ先だろ・・・ゆっくり考えりゃーいいだろ?」

笑い猫「でもな・・・」

刹那「はあく、すみません、どうかこの駄作者にアイデアがあったら提供してやってください、お願いします・・・」

笑い猫「お願いします!!!(土下座)」

第八話 冥琳と刹那の休息？（前書き）

笑い猫「今回は冥琳との1日！！こんな感じかねえ？」

刹那「俺が知るか、それはお前の仕事だ。」

雪蓮「ねえ刹那・・・冥琳としたの？」

刹那「ぶー！！！唐突に何！？おれなにもしてないよ！？」

雪蓮「だって・・・ねえ？」

笑い猫「それは最後を見ればわかる！！」

第八話 冥琳と刹那の休息？

カロロツ・・・

冥琳「ふうー・・・これでここはよしだな・・・」

刹那「それで？役に立ちそうか？」

冥琳「当たり前だ、しかしすごいな、わたしもこんなやり方初めて聞くぞ？」

刹那「かなり読みあさったからな・・・」

刹那の宴から数日、私は刹那が文官としてどれほど使えるか確かめるため、一緒に仕事をしてその仕事ぶりを見て確かめようと思っていたのだが・・・

冥琳「正直悔っていた・・・お前の案だが私も初めて聞くようなものばかりだ・・・」

刹那「まあ、何百年、何千年の過去の偉人たちの知恵ですし・・・」

街の治安を守るため警備体制の草案、新しい作物開発、呉の近辺の毒キノコの解毒剤の作り方、治水・新たな武器の開発など・・・

冥琳「なかでもこの天の国での作業法・・・私としては大助かりだ・・・」

刹那「まあ今よりは効率が格段に上がるだろうから・・・それよ

り冥琳、ちゃんと休みは取ってんのか？ずっと働きっぱなしじゃないか。」

冥琳「まあな・・・だがお前が教えてくれた作業法のおかげでだいぶ楽になりそうだ・・・」

刹那「もしかして休みのときも働いてんのか？」

冥琳「そうだがそれがどうかしたか？」

刹那「おいおい・・・(汗)」

side 刹那

あーだめだこりゃ・・・完璧ワーカーホリックだよこの人・・・仕方ないといやー仕方ないけど・・・そらー病気にもなるは(汗)うーんどうしよかね。あ！そうだ！！

刹那「なあ、冥琳。」

冥琳「なんだ？」

刹那「有給休暇1日だけとれるか？」

冥琳「？1日だけならとれるが・・・それがどうかしたか？」

刹那「そうか！なら・・・」

冥琳「お前の1日を俺にくれ!!」

冥琳「・・・はあ？」

刹那「簡単にいやー逢い引きになるかな？（にやりっ）」

冥琳「な！？（グポンッ）いきなり何を言って!?!?!？」

刹那「なーんてな ほんの冗談だ、俺が言いたいの明日1日俺と一緒に休暇取って休まねーかっていつてだよ。」

冥琳「あまり変わってないような気がするが、しかしな・・・」

刹那「1日くらい大丈夫だろ？休まんと仕事ばっかしていると体壊すぞ？どつかののんびり屋の王様に心配させたくないだろ？」

冥琳「・・・確かにそうだな、なら明日はお前と1日過ごそう・・・」

これで冥琳をばっちりや休ませて疲れをとるためにいろいろとすれば、死亡フラグをたたき折れる・・・計画道り!!! ゴシヤーーン

刹那「おう!じゃあ明日な!!お休み」

言っこと言ったとったと行っってしまった・・・

冥琳「まるで嵐のような男だな、しかし逢い引きか・・・」

急に言われたものだから驚いてしまったが・・・

冥琳「悪くないな・・・」

刹那明日は少し楽しみにしてるぞ・・・

side 刹那

これで準備よし！っと、さてさてでは呼びに行きますか

刹那「冥琳、おはよう。」

冥琳「ああ、さてどこに連れていく気だ？」

刹那「庭だよ、お茶の準備もできてるしな。」

冥琳「庭で茶か・・・悪くないな。」

刹那「ああ、音楽隊もいるしな。」

冥琳「音楽隊？」

刹那「見ればわかる。」

冥琳を庭に連れてくるとそこには・・・

紅葉・青藍「お待ちしていました（待ってたんだよ）」

冥琳「紅葉に青藍？ああ、そういうことか・・・」

刹那「ああ、お茶をしながら音楽お聴くのもいいもんだろ？」

紅葉「一生懸命演奏するから聴いてほしいんだよ。」

青藍「頑張りすぎて失敗しないようにね紅葉。」

紅葉「うっ！痛いところ突かれたんだよ」

冥琳「ふふ、まあ楽しみにさせてもらおう・・・」

紅葉「はい では！！」

そう言つと、紅葉は三味線を出し、青藍は琴を取り出した。

冥琳「ほう、琴か・・・かなりのいい物だな。」

刹那「お？わかる？」

冥琳「ああ、少しな・・・」

青藍「では行きます。」

~~~~~

side

冥琳

2人が演奏はとても美しく、心が休まるような感じがしていた・・・

冥琳「・・・」

この頃、ずっとここもって仕事ばかりしていて、心の休まるひまがなかったなと思う・・・今の休息は正直ありがたかった・・・

そして、演奏を聴きながらお茶を飲みまったり過ごし、気が付けば日が傾いていた。

冥琳「もうこんな時間か。どうやらずいぶんと話し込んでしまった様だな」

刹那「そうだな、夕食はどうすんだ？何なら作るぞ？」

冥琳「刹那、料理もできるのか？」

刹那「ああ、できる。自分でも何だが腕には自信あるぞ。」

冥琳「そうか、ならごちそうになるぞ。」

その後、刹那の手作りの夜食をごちそうになり、食べたことのない料理ばかりだったが、おいしかった。（料理を作っている彼は女らしいと思ったのは内緒だ）

冥琳「ふう・・・」

夕食を済ませ、寝台に腰掛ける。先程から感じていたが体が軽い。まさか一日休んだだけでここまで顕著に表れるとは……

冥琳「それだけ疲労が溜まっていたという事か」

こんこん……

その時、私の部屋をのつく音が聞こえた。まさかとは思つが……

冥琳「刹那か？」

刹那「当たり前だ。」

冥琳「なんだ？さっき言い忘れたことでもあったのか？」

刹那「いや、冥琳にマッサージでもしてやろうと思つてな。」

冥琳「まつさーじ？何だそれは？」

刹那「簡単に言うとな体を指圧して疲れをとるための作業療法だよ、今日休んだおかげ結構疲れ取れてるだろ？体が万全な状態が継続するように強制しに来た。仕事をする際に役に立つだろ？」

冥琳「ほお、天の国にはそんな技術もあるのか。なら頼めるか？」

刹那「まかせな」



次の日、体は軽くなり、頭も冴えわたっていて、体調はすこぶる程良かった・・・

だが、刹那のマッサージをされているところ（喘ぎ声がしていたため）を聞かれていたため、どこの王様は勘違いをしていたらしい・・・

第八話 冥琳と刹那の休息？（後書き）

刹那「ち、違うー！まだ何もしてないー！ー！」

雪蓮「へー「まだ？」する予定あるんだー」

刹那「そ、それはその、えと、ご、誤解だー！ー！ー！ー！ー！」

笑い猫「まあいずれ食われる運命だしな（笑）」

刹那「誰助けてー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

第九話 刹那の賊退治 新兵器 刹那に迫るもの？（前書き）

笑い猫「さてさて戦闘開始だ〜WW」

刹那「だがこれ棒読みがほとんどじゃねえか？」

笑い猫「大丈夫WWこれは前菜みたいなもんだ・・・」

刹那「前菜？」

笑い猫「まあまあWW最後を見りゃわかるってWW」

刹那「？」

## 第九話 刹那の賊退治 新兵器 刹那に迫るもの？

刹那が客将になって数日後、黄巾党討伐のため、戦場に立つことになった。

こちらの将は、雪蓮、祭、冥琳、客将の俺だけで、兵の数は3000、黄巾党は5000であった。

雪蓮「いっぱいいるわねー」

刹那「何で嬉しそうなんだ雪蓮？それより、まとも当たったらまず負けるぞ……」

冥琳「ああ、そうならないために私やお前がいる。」

祭「わしもおるぞ？」

刹那「そうだな、じゃあまず冥琳と雪蓮は本隊2000を率いて正面から当たってくれ、俺と祭は500ずつ左右に分かれて攻撃しよう、俺の発案した『大盾』と『連弩<sup>れんど</sup>』があるだろ？あれを最大限に利用しなよ。」

そう、俺は冥琳に新兵器として武器の設計図を提供し、軍備の強化を図った……

兵の訓練は楽になるし、なにより戦略に優位に立てるし、一石二鳥だしな……。

刹那「さて始めますか！」

祭「では行くとするかのお!!」

冥琳「では、始めるとしよう。」

冥琳「世は乱れ、人心は荒む・・・我らの目の前にあるはその元凶、  
黄巾の賊徒!これより我ら孫呉は飛躍の時に入る!この乱を収め、  
我ら孫呉の名を世に知らしめ、平和な世を我らの手で築くのだ!総  
員抜刀せよ!突撃!」

さて戦闘開始だ!!

刹那「紅葉・青藍!頼むぞ!!」

紅葉・青藍「はい!(おお)」

### 【オベリスク】

【夜明けの光を小鳥が見つけるように  
私がついてみせる

かすかなきざしに高鳴る胸をまだ

世界は眠っていて 知らない――――】

さて、これで士気が上がるはずだ・・・

俺は髪をほどき、大剣『リフツルキ竜王豹月』を担ぎ、

刹那「俺たちは決して1人ではない、1人じゃないからこそ大切な  
ものがある!それを奪おうとするやつらがいる、それは目の前に敵

だ！！奪われたくないと思うのなら己が持つ力で・・・まもりきつてみせるおおお！！！！」

「「「「「おおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」」」」」

そう言っつて俺は敵に突撃を仕掛けた・・・

side

黄巾党

今回は、楽に奪えると思っつていたのに・・・何だっつて言っただよ！？数だっつてこっちが多いのに、負けるわけねえと思っつていたのに！！

見たこともねえもんで雨みてえに矢が降るは、奴らのでっけえ盾があるせい出突撃を仕掛けたところで越えられやしねえ！！

「？？？「ははああああああああああ！！！！！！！！」

『ドカアアアアアアツ！！！！』

すると横にいた仲間が猛々しい音と共に砂埃が舞い6〜7人が巻き込まれながら転がってきた。

まるでそこは嵐でも来たようになっていた・・・

！？な、なん・・・だ！？でっけえ剣を持った奴が突っ込んできやがった！？

「？？？「ふうー、お前がこの隊の頭か？」

砂埃が晴れると、そこには蒼い目の長い髪の美しい女が立っつて

いた・・・

「て、てめえ、なにもんだ!?」

歌実「俺は呉の客将、歌実 奏曲!!! 天の御使いだ! 貴様を断罪しに来たものだ!!!」

「!?!? てつてめえが、  
カソウフウジンキ  
歌奏風神姫 !?!? へ、へへへ噂に以上にべっぴんじゃねえか・・・」

そう言うと奴は息を吐き、大剣を振りかぶり・・・

歌実「はあく・・・ 追い打ちをかけるようで悪いが・・・ 俺は男だぞ?」

「なにいいいいいいいい!!?!?!?!?!?!?!」

それが最後の言葉になった・・・

side 雪蓮

雪蓮「すごい・・・」

刹那が発案した、『大盾』は敵を寄せ付けず、『連弩』は敵をどんどん貫いていった・・・  
だが、それ以上に・・・

雪蓮「刹那・・・綺麗・・・」

遠くから、刹那が敵の部隊に突っ込んで行くところが見えた、大剣を振り回し、敵を倒していくところはまるで踊っているようだった。

冥琳「どうした雪蓮？珍しいなお前は興奮していないのか？」

雪蓮「ううーん・・・刹那のあれの場合戦いより芸術、って言う方が近いからかしら？興奮するより見ていたって感じがするわ・・・」

刹那が戦っている姿は戦っているというより、踊っていて一枚の絵という方が近いような芸術そのものだと思えず、ただ言えるのは・・・

冥琳「・・・美しい、か・・・」

雪蓮「ええ、刹那家のところに来ないかな？」

冥琳「たぶん今は無理だろう・・・」

雪蓮「今は？」

冥琳「ああ、刹那は何か目的があるのだろう・・・だがそれが終われば、」

雪蓮「来てくれるかもって事？」



冥琳「そういうことだ。」

雪蓮「なるほど」 そうと決まれば唾つけておかないと」

冥琳「雪蓮・・・お前刹那を食べる気か？」

雪蓮「そういうこと」

冥琳「はぁ・・・刹那、頑張れよ・・・」

ゾクッ

刹那「んお！？なんだ？なんか誰かに目を付けられたような悪寒が・・・？」

主人公食べられるまで後わずか・・・

第九話 刹那の賊退治 新兵器 刹那に迫るもの？（後書き）

刹那「……」

笑い猫「まあ諦めろ」

刹那「このクソ作者がああああ!!!」

笑い猫「まあまあ これから先に似たようなことがあるから」

第十話 食べられた？犯られた責任！？（前書き）

笑い猫「とうとう食べられたな・・・WW」

刹那「せめてまともなのに・・・」

雪蓮「刹那可愛かったわよ」WW」

刹那「うわああああああああああ（泣）」

## 第十話 食べられた？犯られた責任！？

刹那「……（泣）」

雪蓮「にこ」

穩「えへ」

祭「かつかつ」

冥琳「まあ、結果はどうあれ責任は取ってもらうぞ刹那。」

刹那「食われたの俺なんだが……あまり納得がいかんがわかって  
いる、ただ今は無理だぞ？乱世が終わってから、いずれかの形でと  
らしてもらう……」

雪蓮「わかってるわ、それぐらいはいいわよ」

しかし、油断した……まさかこうなるとは……

～回想～

黄巾党を討伐して数日後……

俺は書庫の整理のため、書庫に向かうと……

穩「あれ？刹那さんじゃないですか、どうしたんですか？」

間延びした声が書庫の入口に立っていた俺に声をかけてきた・・・

刹那「ん？ああ穏か、どうしたんだ？入らねーの？」

穏「いや、確かに入りたいんですけど・・・」

なにやらもじもじする穏、いったいどうしたんだ？

穏「あゝ。うゝ」

？いったい何なんだ？

穏「私、一人じゃ書庫には入れないんですよ」

刹那「はあ？一人じゃ入れない？」

子供かよ・・・(汗)

穏「あ、そうだ！刹那さん、一緒に入ってもらえますか!？」

刹那「え？・・・ま、まあいいが・・・」

よく分からないが、俺も用があるしな・・・

穏「えへへ、これでやっと読めます」

うん？何か言ってるがよく聞き取れんな・・・

まあいいか・・・

刹那「えーっとこれがこっちでこれがあそこで・・・」

只今、識別分け真最中であるがもうすぐ終わるぞ・・・

刹那「これがあっちでっと！ほい終わり！穩？探し物見つかったか？」

だが、見るべきではなかった！

穩「ああ〜ん、やっと会えました〜、この日をどれだけ待ち望んだか、はあはあ」

おい、

穩「ああ〜、膨大な知識の波が今、私の中を駆け巡っていく〜、はあはあ、それだけで私、達してしまいそうです〜」

刹那「なにしとんじゃああああ！?!?!?!」

すっぽんぽんじゃねえか!?!こいつなにしてるだよ!?!

穩「ああ〜、刹那さん、丁度いいところにい〜」

刹那「ちょうどいいも糞もねえ!?!いったいなにやってるんだ!?!」

穩「私、もう少しでイケそうなんですう、だあかあらあ・・・手伝えて下さいいい!?!」

刹那「うおおお!?!」

急に飛びかかってきやがった!?

雪蓮「なんか書庫が騒がしいわね……」

祭「まったくじゃ、おいさわがし……い……ぞ……」

『……あ』

服が乱れた穩が俺の上に馬の状態、

通りがかった雪蓮と祭、大量の酒を持っていて俺があげた『やけ酒君』を持っていた……

助かった!!

刹那「雪蓮!祭!助けてくれ!!」

だが違った……

雪蓮・祭「(にっこり)」

刹那「へ?」

雪蓮・祭「私も混<sup>わ</sup>ぜてるのじゃ」

刹那「うそおおおおお!!?!?!?!?!」

「う、こいつら・・・酔ってやがる!？」

刹那「やばっあさっさと逃げ(がしっ!!)(うお!?)」

逃げようとしたが穩につかまり、雪蓮が酒を持ってくると・・・

雪蓮「逃がさないわよ」

刹那「な!?!しえ、しえれ(ガポツ!)んぐう!?!?」

俺は酒を飲まされ・・・

～回想終わり～

起きると俺の部屋に俺を含めた4人は服は乱れていて、布団に血が付いてるわイカ臭いわで理解した・・・(泣)

刹那「うう・・・汚された・・・(泣)」

雪蓮「んふふ」可愛かったわよ刹那」

刹那「間違っても男の俺に言う台詞じゃねえ!!」

祭「しかしホントのことじゃしな?」

穩「えへへ」そうですよ」

刹那「ち、ちくしょおおおお!!!!」

雪蓮「まあまあ 良い女を3人も侍らしたんだから文句言わないの



次は冥琳も混ざる？」

冥琳「機会があったらな・・・」

刹那「冥琳！？あんたもか!？」

冥琳「わたしじゃ不満か？」

刹那「滅相もありません（キツパリ）」

冥琳「ならいいではないか（ニヤリ）」

刹那「うう・・・（汗）」

なんか術中にはまった感じがする・・・

「こっして、俺の初めては奪われたのであった・・・」

第十話 食べられた？犯された責任！？（後書き）

笑い猫「いきなり4（P．．．．．）なんてうらやましい奴だww」

刹那「ボク、ナニサレタノ？」

雪蓮「それは、キャ」

祭「以外せいたつぷりじゃったな．．．//」

穩「えへへ//」

刹那「俺の純情返せええええええええええ！！！！」

第十一話 刹那、脱走します！！　そしてまた迷子？（前書き）

刹那「決めた、俺は決めたぞ・・・」

笑い猫「何を？」

刹那「俺は旅を再開する！！」

笑い猫「よし、わかった！！女装編が早まったぜ・・・」

刹那「へ？いや、何！？」

笑い猫「と、言う訳でどうぞ」

刹那「や、やっぱりやめ」拒否は無駄だ！！！！」「う、うわああああ  
ああああああああああ！！！！！！」

第十一話 刹那、脱走します！！　そしてまた迷子？

あれから数日・・・

そろそろここいらの賊も落ち着いたなそろそろいくか・・・

刹那「おーい、雪蓮。」

雪蓮「んー？なに刹那？まさか犯りたくなつたとか？」

刹那「ぶ！？違つわ！！出会い頭に言うか普通！？？」

雪蓮「え〜つーまーんーないー！」

刹那「ガキ見たくぶーぶー言つな！！はあー・・・俺はそろそろ旅を再開しようと思う・・・」

雪蓮「え！？？」

刹那「最初の方で言ったが、俺には俺の目的がある・・・それは果たさなくちゃなんねーからな・・・」

雪蓮「・・・」

刹那「・・・」

雪蓮「だめ！！」

刹那「・・・へ？」

雪蓮「いなくなっちゃったらつまんないじゃないのよー!!」

刹那「いや、そういわれても・・・」

雪蓮「こうなったら牢にぶち込んででもいや拘束して・・・ぶつぶつ」

おいおいおいおい、なんか不穏なワードばかり浮かんでますよ雪蓮さん・・・ここは・・・

刹那「脱走!!!」

雪蓮「あ!?刹那ー!?逃がさないわよ!!!」

そう言っただけ追いかけてきた!!

刹那「いやだから俺目的あるいったからダメだったよな!?!?」

雪蓮「それでも嫌なものは嫌なのー!!!刹那だって私の体もて遊んだくせにー!!!」

刹那「誤解を招くような発言をするなー!!!つつか弄ばれたのは俺のほうだろー!!!」

雪蓮「刹那はうちのところでずっと客将をすればいいのよー!!!」

刹那「んなもん断るわー!!!」

そして、逃げるうちに祭、穩も加わり知らない奴も来てどんどん追いかけてくる人は多くなり……

「……待つてくれ……歌実ちゃん……!!!!」「」「」

刹那「……何なんだよあの数は!?ざっと4000入るぞ?!?!」

青藍「どうやら、マスターの追っかけらしいです。」

紅葉「おお〜マスター人気者なんだよ〜」

刹那「こんな人気いるか!!!!」

冬月「ブルルツ（どうでもいいが多いなーホント）」

「歌実ちゃん……んあなたの歌を……!!!!」

「いやしをください……い!!!!」

「歌実ちゃん……ハア……ハア……」

刹那「最後の奴やべーぞ!?つか俺男だぞ?!?!?」

「それでもOK!!!!!!」

「紅葉ちゃんでも青藍ちゃんでもいいZE」

青藍「なぜ英語を知っているの!?!」



紅葉・青藍「……また迷子なんだよ（です）……」

刹那「うるせえ！！しかたねえだろ！？あんなのに追われてたら迷  
うわ！！！」

はあ……これからどーしょ……



第十一話 刹那、脱走します!!　そしてまた迷子? (後書き)

笑い猫「いよ　この色男!もてるね」

刹那「こんなもてかた嬉しいないわ!!!」

笑い猫「大丈夫だ　そのうちどっかの猫耳に」この無責任孕ませ男  
!!!」と罵られる日が来るから」

刹那「余計に安心できんわ!!!」

第十二話 また王様？よく会うな（前書き）

刹那「今度は何をさせる気だ？」

笑い猫「今度はな、ヒーローとして行ってもらうぜー！ー！」

刹那「はあ？どついう意味だ？」

笑い猫「ふっふっふ、見ればわかるぜー！ー！」

第十二話 また王様？よく会うな

刹那「もうここどこだよ……」

青藍「わかりません……」

紅葉「マスターの方向音痴なんだよ……」

刹那「うるさいわ！！！」

逃げ切ったのはいいが完璧に迷った……ここはどこ？どこの森？

刹那「はぁ……しかたねえ、野宿しかないかな……」

紅葉「え……」

刹那「しかたねえだ、ん？」

紅葉「どうしたんだよ？」

刹那「んー、なあ、なんか聞こえねえか？」

青藍「……たしかに聞こえますが、……金属音？……！！！！  
え！この音は剣がぶつかる音です！！！！」

刹那「なに？方角は？」

紅葉「あっちなんだよー！！！！」

刹那「そうか、だったらお前らはここで待って荷物見ててくれ・・・」

さてさて、こんな森でだれかねえ？

side

???

???'クツ!!」

ギインツ!!

「チツ!しづとい女だ!!いい加減諦めな!!」

クツ!!・・・私のせいだ・・・

ここは袁術軍の城から少し離れた森の中、ここに二人の少女がやって来ていた・・・目的は最近自分の境遇に少し疲れを見せていた少女にもう一人が気分転換に馬乗りを誘ったからだ・・・

だがそれがイケなかった、森に入って数分したところで山賊に襲われたのだ。

多勢に無勢という事もあり、馬乗りを誘った少女はもう一人を庇って怪我をしてしまった、だんだんと追い詰められ、今は囲まれた状態となっていた。

???'蓮華様!!下がっててください!あなたにもしもの事があつては!!」

「????」何を言っているの!? 思春! 貴方は怪我をしているのよ!  
!」

この二人の少女、蓮華と呼ばれた方を名を孫権、思春と呼ばれた方は名を甘寧と言い、元は河族だったが、その実力を見出されて今では孫権の護衛として呉に尽力している一軍の将である・・・

山賊に囲まれた二人、孫権は自分を庇って怪我をした甘寧をなんとか守ろうと剣を握る。

甘寧は逆に自分が馬乗りに誘ったせいだと責任を感じ孫権を命をかけて守ろうとする。

だが山賊達はそんな二人の気持ちなど全く気にせず下品な笑い声をあげる。

「へっへっへっ、こんな上玉の女が二人も手に入るとは今日はついでるな!」

「全くだ! さあ、おとなしくしな! ちゃんと可愛がってやるぜ!」

山賊達は自分達の絶対的優位を疑わずもう勝った気でいる。

甘寧「黙れ下郎!! 一步でも近づけば即座に黄泉地へ送ってやる!」

殺気を飛ばし凄みを利かせてはいるが今の自分ではハツタリにしかならない・・・自分の命を犠牲に孫権だけでも逃がそう、そう決意しようとしたその時・・・。

ヒュンー！

ドスツ「ぐあああー！！」

「な、なんだ！？どっから矢が！？」

山賊共は気づかなかつたが、私は気づき矢が飛んできた方を向くと  
・  
・

???「ずいぶん腐つたまねしてんじゃねーか？下種ども・・・」

その闇の中から出てきたのは、月明かりに照らされ、美しい容姿の  
女が出てきた・・・

side

孫権

正直もうダメかもしれないと思っていた・・・。

護衛の思春はワタシを庇って怪我をしまい、山賊の数はこちら  
を大きく上回っている・・・

こんな所で死ぬわけにはいかない。袁術から孫呉を取り返すまで・  
・！！

そう思ったその時、彼女は現れた・・・月明かりに照らされ、黒く  
長い髪、空のように蒼い目、幻想的で美しい容姿、私は自分に危険  
な状況を一瞬忘れ、

孫権「綺麗・・・」

私は無意識に呟いていた……

「……さて、お前らには選択肢があるぞ？ここから逃げるか、それとも俺に殺されるか……好きな方を選びな……」

50人はいる山賊に余裕の言葉を投げかける、慈悲深い様に聞こえるその言葉は

賊相手には挑発にしかならなかった……多分それは本人も承知の上だろう。

「へ、へっへっへ……今夜は運が良いぜー！！！！さらにこんな上玉の女を手に入れられるとわなー！！！！」

すると、山賊共は歓喜をあげた……

「……はあー、つくづく下種だな……で？答えを聞いてないんだが？」

「んなもん決まってるだろーが！！お前も可愛がつてやんぜー？」

すると山賊共は、その女に襲いかかろうとする……

すると、女は弓を背負い、腰の双剣を向きながら、

「……やれやれ、ほんと下種だな……なら……」

死んでもらおう……」

「減らず口を！！お前ら、何をしている！さっさと捕まえる！！」

頭目らしき男の命令で一斉に襲いかかる山賊達、

「ウオラア！！」                   ブオン！！！！

刹那「フツ！！」                   ザグツ！！！！

一人目が青竜刀を振り下ろし、女を動けなくしようとする、それを横によけ、足を前に進めると同時に、山賊を半分にする！！

「オオオオオオ！！」               ダダダダダツ！！

シュツ・・・ザクツザクツ！！！！

今度は2人一辺に襲いかかるが一気に接近して双剣を逆手に持ち、すれ違いざまに首をはねる！

「いやああああああ！！！！」

槍による刺突で手足を奪おうするが双剣でいなしましたすれ違いざまに切りつける！！

次々に襲いかかる賊をその双剣で踊っているように葬っていく・・・

孫権「（すごい・・・圧倒的な数による暴力を双剣で覆していくなんて・・・。）」

ワタシは恐れた、だがそれ以上に懂れた・・・あの強烈なまでに洗



練された舞いを踊っているような剣技に・・・

数分もしない内に残ったのは偉そうに命令していた頭目だけとなつた・・・

「う、うわぁー！！た、たすけてくれー！！」

圧倒的な力を目の前にして戦わずに逃げようとするが、

「???」「おいおい、今更逃げんなよ?」

ドスッ！ドスッ！

「ぐぁぁぁぁぁー!？」

そう言うと、即座に弓を取り、矢を放つて山賊の両足を貫く！！

「な、ヤメロ！！タスケテクレー！！?」

「???」「もう遅い、お前が選んだぜ?それぐらいの責任は取らねえとなぁ?後悔ならあの世でやってくれ、もう終わらせる・・・」

恥も外聞もなく泣き叫ぶ山賊に道化は死刑宣告をする・・・

両腕に握る双剣をふるう、両腕、両足、そして首を一瞬にしてはねる！！

ザザンッ！ザンッ！！！！

ヒヨウエン  
セツカザン  
氷炎・赤花斬

声もあげることなく、男は屍となった……

????「ふん……きつたねえ花だ……」

森の一角に両手、両足、首のとんだ胴体が、出血により赤い花が咲いたようになっていた。

????「ふー、これで全部か……おいそこのお二人さん無事か？」

そう言いながら髪を結びながらやってきた。その容姿は先ほどとは違う整った顔立ちの男の風に見えていた……

孫権「(ぼおー／＼／＼／＼)」

????「?おーい、顔が赤いぞ?どうした?」

孫権「え、いや!?あ、えと……ええ、大丈夫よ。」

????「?そうかい、ま、よかつたな……」

孫権「あの……貴方は何者なの……?」

歌人「俺か?俺は歌人、歌実 奏曲……旅の芸者であり、武人だよ。あんたは?」

孫権「わ、ワタシの名は孫権!呉の王孫策の妹よ。」

つづく……



第十二話 また王様？よく会うな（後書き）

笑い猫「また毒牙にかかった奴が一人・・・」

刹那「？どどういう意味だ？助けたただけだろ？」

笑い猫「無意識か・・・天然の女泣かせになるな」

刹那「なぜに!？」

第十三話 あんたはどんな王になりたいんだ？（前書き）

笑い猫「前の続編だ！ついでに刹那の過去が少しわかるよ。」

刹那「ちょっと待てどついうことだ!？」

笑い猫「そのまんまだよ？少し真面目風だ!!」

刹那「ならいいが・・・（でもなんか嫌な予感が）」

笑い猫「それではどうぞ!..!」

### 第十三話 あんたはどんな王になりたいんだ？

side 刹那

孫権「わ、ワタシの名は孫権！呉の王孫策の妹よ。」

刹那「！！あんたが雪連の妹！？」

孫権「な！？きさま！！なぜ姉さまの真名を！？」

刹那「ああと、いきなり悪い、だがちゃんと本人の許可を得てるよ．．．」

孫権「そ、そう、だけどどういふ訳で許されたの！？」

刹那「ああ、それはな、ってそれより先にそっちの女の治療を先にしようぜ？後から訳は話してやる．．．」

孫権「え？ああ！思春！大丈夫？」

忘れてたんじゃないよな．．．

????「大丈夫であります、蓮華様。」

刹那「傷を見せな、応急手当ぐらいしてやる．．．」

????「すまない．．．」

刹那「気にすんな、そういえば名前は？」

甘寧「甘寧、字は興霸だ……」

刹那「甘寧か、よろしくな(ニカッ)」

甘寧「ツ……/ / /」

刹那「ん? どうした?」

甘寧「な、なんでもない!! / / /」

刹那「お、おう?」

どうしたんだ? まあそれより手当てしないとな……

孫権「ところであなたは何で男口調なの?」

刹那「そりゃそうだろ、俺男だよ?」

孫権・甘寧「えええ(なにい)!?!?!?」

刹那「はあ……もういい、なれたよ(泣)」

孫権「え、えつと……ごめんなさい」

刹那「あやまらないで……余計にむなしくなる……(泣)」

んなことより治療治療……

テキパキッ

刹那「これでよしっ」と！」

甘寧「ああ、感謝す、痛ッ！！」

刹那「おいおい、無理するな応急処置をしたぐらいなんだ、まだ歩けねえよ。」

おーい！！冬月ー！！！！！！」

孫権「なに、あな・・・ゴホン！お前には仲間がいるのか？」

刹那「？ああ、馬一頭と相棒が2人いるぞ。（なんか今口調直したよな？）」

甘寧「・・・。」

紅葉「マスターお心配したんだよ。」

青藍「だから心配ないって言ったでしょ？」

冬月「ブルルッ（そう言う姉さんも心配してたくせに・・・）」

青藍「冬月、何か言った？（ニッコリ）」

冬月「ブルルッ！？（いえ！何でもありません！！）」

いつから馬の言葉がわかるようになった青藍・・・



甘寧「な！？妖か貴様ら！！」

刹那「ちげーよ、あれが俺の相棒だよ。」

孫権「で、でもすごく小さいわよ！？」

刹那「だぁー！！ちゃんと説明するから落ち着け！！」

説明中

孫権「じゃあ、あなたが天の御使いなのね？」

刹那「ああ、そういうことだ、ってそんなことより甘寧を孫権の城に運ぼう。」

孫権「ええ、わか・・・ああ、そうしよう。」

なあんか無理に口調を変えてやがるな・・・なんなんだ？

side

孫権

歌実に助けられ、お礼に城に泊めることになった。まさか姉様の客将をしていたなんて思わなかったわ・・・

孫権「（私はこのままではまだまだ駄目だ・・・）」

私がつとつっかりしていれば思春は怪我をすることはなかった・  
・王族としてもつとつっかりしなくては・・・

「・・・・・・・・ー}}}} - - -」

孫権「ん？どこからか歌が？」

きれいな歌声だった・・・どこから聞こえてくるのかと思っている  
と・・・

孫権「城壁の上から？」

聞こえてくる方向へに向かつてみると・・・

歌実が歌っていた・・・月の光に照らされ、歌っていた・・・その  
光景はただただ幻想的で、その歌をずっと聞いていたいと思えるほ  
ど美しかった・・・

歌終わると歌人は大きく息を吐き、

刹那「さて、その観客さんいかがだったかな？」

と声を掛けてきた・・・

side 刹那

刹那「さて、その観客さんいかがだったかな？」

月がきれいで気分もいいから歌っていると孫権がやってきたから声をかける・・・

孫権「え？あ、きれ・・・ゴホン！良い歌だったな・・・」

刹那「ありがとな・・・ところで聞きたいんだが、」

孫権「なんだ？」

刹那「なんでお前は無理に口調を変えてるんだ？」

孫権「ツ！？・・・何の事だ？」

刹那「いやいやいや、女の子っぽい話し方をすると急に威圧的な口調に直すだろ？すげー違和感あるぞ？」

俺から見ても無理をしているようにしか見えねーもん・・・

孫権「ワタシは・・・、ワタシは孫仲謀。孫家の・・・王族としての立場がある！だからワタシはいかなる時にも毅然とした態度でいなければならぬのだ！」

刹那「だからって無理はしなくていいと思うが・・・」

孫権「それでもわたしは「お前は一体何になりたいんだ？」え？」

刹那「お前は一体何になりたいんだ？王の身代わりか？やめとけ、んなもんにはなれねえーよ・・・」

孫権「なあ！？きさまは私を馬鹿にしているのか!？」

刹那「そうじゃねえ、だれもその人丸々そっくりになりきることなんかできやしねえ、その人になれるのはその人でしかありえねえって言ってるんだよ……」

孫権「なら私はどうすればいいの!? どうすることもできないじゃない!!!」

悲観的になっ てんなー……んなもん……

刹那「んなもん簡単じゃねーか、お前はお前のありのままであり続けなければいいんじゃないか……」

孫権「え? ……」

刹那「人は誰かになりきることなんてできやしない、だが逆から言えば自分になれるのは自分しかないってことだ、他の何かになるうとする必要なんかどこにも無い、自分自身にしかできない事がちゃんとあるんだからな……」

孫権「自分にしか……できないこと……」

刹那「お前はお前だ…… 汝になれる者は汝のみ、いかなる者も汝になれる者おらず、そのものになれるのは、汝のみ っ てな、お前以外に孫仲謀になれる奴なんてどこにもいない、だからお前は自分のできる事をすればいいのさ。」

孫権「私にできる事……。ちゃんと見つけれられるかしら?」

刹那「それはわからん、だが、それを見つけることができるのは……」

」。

孫権「ワタシ自身しかない……。」

刹那「そういうことだ、お前ならきつとわかる日が来るさ……。」

孫権「歌実、ありがとう。自分のするべき事が見つかった気がするわ。」

刹那「刹那だ……。」

孫権「え？」

刹那「刹那でいい、俺は面白いと感じた者に真名を預けることにしているからな……。」

孫権「そう、なら私も蓮華でいいわ。」

刹那「そうかい、なら蓮華頑張れよ……。」

蓮華「ええありがとう、刹那……今日はそろそろ休むわ……お休みなさい。」

刹那「ああ、お休み。」

フツ……良い笑顔じゃねえか、さてと次はつと

刹那「そのもう一人の観客さんも出てきたらどうだ？」

後ろで隠れている気配に声をかける……すると少ししてから出

てきた。

甘寧「いつから気付いていた？」

刹那「お前は一体何になりたいんだ？」ツて言った時だな、一瞬殺気を感じてわかった。」

自分の主を馬鹿にされたと勘違いしたんだろうな・・・

甘寧「・・・・・・・・歌実、礼を言う。」

刹那「藪から棒になんだ？礼を言われるようなことをしたか、俺？」

甘寧「蓮華様の事だ・・・あのような晴れやかな顔は久しぶりなのだ。」

刹那「俺は俺の思ったことを言ったただけだがな、だが甘寧、本当はお前の役目だったはずだぜ？」

本来は俺みたいなの部外者が口出しするのではなく、孫権に仕える甘寧こそが言うべきなのだ・・・

甘寧「・・・・・・・・分かってる。本当はワタシが言うべきだろう、だがワタシは元は河賊、そんなワタシが王族たるあの方に意見するなど、」

刹那「関ヶーねえだろ？」

全てを言い切る前に甘寧の言葉を遮った。やれやれ、どいつもこいつも不器用な奴ばっかだな・・・

刹那「過去や立場がどうあれ、お前は孫権に仕えているのだから？身分を気にする以上に、いつでも主の事を思って行動するということが大切だと思うぜ？」

甘寧「主を思う……。そうか……。それだけなんだな……。すまない、私まで教えられたな。」

刹那「べつにいい、俺は思ったことを口にはしているだけだからな……」

甘寧「そうか……。しかしよく蓮華様の悩みが分かったな……。それにあそこまで正確に助言できるものなのか？」

刹那「……。むかしむかし、あるところに……」

甘寧「？いきなりどうし……」

刹那「むかしむかし、あるところに兄と弟がいました。兄は尊敬に当たる人物で弟はそんな兄のようになると無茶ばかりしていました、だが失敗ばかりしていました。その失敗の理由は……兄のようになる……ということを勘違いしていたせいでした……」

甘寧「勘違い？」

刹那「ああ、兄のようになるとして兄自身になるとしていたのさ、しぐさや癖、好みとか様々なことを真似して兄のようになるとしていたのさ。」

甘寧「……」

刹那「そんなときに、兄から」

『俺なんかよりお前はずっとすごいよ、お前は俺になるなることより自分自身になることこそお前はおおきくなることができる。』

そう言われたのさ・・・、それ以来、真似をすることをやめて、自分の好きなこと、できることをするようになり失敗していたことも成功するようになりましたとき、めでたしめでたし・・・」

甘寧「それがお前でそんな体験があつたからなのか？」

刹那「さて、な・・・俺は昔話をしたただけだぜ？」

甘寧「フツそうか・・・。」

刹那「俺もそろそろ寝るわ、また明日な、甘寧。」

思春「思春だ・・・。」

刹那「え？」

思春「思春でいい、蓮華様と昔話を聞かせてくれた礼だ。」

刹那「そうか・・・なら俺も刹那でいい。」

思春「ああ、それではな刹那。」



刹那「また明日な思春。」

こうして2人の心は晴れたのであった・・・

第十三話 あんたはどんな王になりたいんだ？（後書き）

刹那「普通で良かった・・・」

笑い猫「・・・」

刹那「ん？どうした？」

笑い猫「下手したらストーカーと変わらねえ、お前もしかしてこれなのか？（エンジェルビーツ 音無風）」

刹那「違っわ！！！！」

第十四話 別れ、迷子？三羽鳥に出会う（前書き）

刹那「いっつも迷子なんやね（泣）」

笑い猫「それがお前のポジションだからなww」

## 第十四話 別れ、迷子？三羽鳥に出会う

朝、そんでもって蓮華達の城の城門前……（いきなりだなおい！）

蓮華「……本当にいくのね？」

思春「……」

刹那「ああ、俺は俺の目的があって旅をしてるからな……」

蓮華「あなたの目的って？」

刹那「訳あつて言えないが……しいて言うなら『納得のいく終わり』だな……」

蓮華「納得のいく終わり？」

刹那「ああ、今はそれしか言えないんでな……」

蓮華「そう……それより本当にダメなのかしら？」

刹那「仲間になれってやつか？ああ、すまんがこの乱世ではやらなきゃいけないことがあるから無理だな、乱世が終わってからならできるとはな……」

青藍「マスター、それあまり意味がありませんよ。」

刹那「だなあ……すまん……」

蓮華「そう・・・次はどこを目指すの？」

刹那「平原でも行こうかなって思ってる・・・」

思春「なぜ平原なんだ？」

刹那「ちよつとな・・・まあそろそろ行くわ。またな。」

紅葉「お世話になったんだよ。」

青藍「それでは。」

蓮華「ええ、気を付けてね。」

思春「・・・・・・・・。。。(スッ)」

そして無言のまま右手を上げて別れの挨拶をする思春・・・

さて、平原を目指しますか!!

と思っていたが・・・

紅葉「・・・」

青藍「・・・」

刹那「・・・・・・・・じじじっ?」

紅葉・青藍「はあ……」

また迷子だ!!!

旅に出てすぐは治安は悪かった、(まあ、袁術の領地だししかたねえか)立ち寄った村には食料があまり無かったので食料分けたり、食べられる野菜やキノコの栽培と土地の開墾、食用でなかった野菜の調理法などを教えたりしてやったほどであった。

それから村を転々とするたび迷子になってばかりであった。

刹那「俺こつゆうのばっかだな(泣)」

紅葉「げ、元気出すんだよ!!!」

青藍「そうですよ!!!」

刹那「すまん、ん?おお!!!街じゃねえか!?!」

紅葉「よかつたんだよ!!!街の人にここがどこだか聞けば、どこかわかるんだよ!!!」

青藍「な!?紅葉がまともなこと言ってる!?!」

紅葉「せいらくん、それどついう意味?」

青藍「そついう意味だ。」

紅葉「うう、マスター(泣)」

刹那「どうでもいいからさっさと行こうぜ！」

・・・数分後

無事に街に着いて門を潜ったのだが、何やら様子がおかしい？  
人はいるのだろうか、どこを見回しても全く見当たらない・・・誰  
もが息を潜め、家の中に隠れているらしいな・・・

うづくん・・・タイミングの悪い時に来ちまったみたいだな・・・  
そう思っていると、

???「おい！その貴様、何者だ！止まれ！！」

刹那「んあ？」

突然、両腕に鉄の籠手をはめた至る所に傷がある銀髪の少女が立ち  
塞がった、目は鋭くコチラを睨んですでに臨戦態勢に入ってい  
る。

???「黄巾党の斥候だな！？今ここで退治してやる！！」

そう言つて襲いかかってきた！！

刹那「は？いやお」ゴヒュウツ！！、わ！？」

まず、拳を振ってくるのをよける！

刹那「ちょ！？ちよつと待て！！」

「……問答無用!!」

次に回し蹴り、延髄蹴りが飛んでくる!

刹那「ほっ!とっ!はっ!」(ドゴッ!)

「……な!?ぐはっ!」

それをいなし、よけると同時に後ろに回り込み掌底を叩きこむ!

「……くっ!きさまよくも」凧!ちよつと落ち着かんかい!」

「凧ちゃん、ちよつとまってなの!」

後ろからかけられた声に反応して止まる、次に現れたのは目の前の勘違い少女と同じ年くらいの少女二人だった。

「……沙和、真桜!何故止める!」

「……だから落ち着かんかい!冷静にあの兄さん見てみい!この兄さんどこにも黄色い布をつけてないやろ!」

「……」黄巾党の人達は絶対どこかに黄色い布を巻いてるの、だからこの人は黄巾党じゃないの。」

「……」だが頭巾風(頭巾風とはフードのことです)のかぶり物をしている奴など怪しすぎるだろ!」

刹那「だったらとれって言ったらよかつたんじゃねえの?」

「……あ!」



刹那・???。「今気がついたんかい!!」(ビシッ!!)「

遅ッ!?気づくの遅ッ!!!思わず関西弁の女と一緒に突っ込んで  
しまった・・・

???。「も、申し訳ございません!てつきりヤツらの斥候が来たと  
ばかり・・・!」

土下座する勢いで謝り倒してくる少女A。顔も羞恥心で若干赤くな  
っている。

刹那「H A H A H A H A!!キニシテナイヨー、ワタシオコツテナ  
イヨー。」

???。「なんでカタコトなん!?絶対まだ気にしとるやる!!」

鋭いツツコミをいれてくるとは・・・むう、中々やるではないか。

???。「まあなんでもいいわ、かぶり物取ってくれへん?」

刹那「ん?ああ、そうだな。(バサッ)俺は歌実奏曲、見ての通り  
旅人だ。」

???。「「「ぽおー／／」」」

刹那「ん?どうした?」

楽進「も、申し遅れました!私は楽進、字を文謙と申します!／／  
」

李典「う、うちは李典、字は曼成や。よろしゅう。／＼／」

于禁「沙和は于禁ていつの。字は文則なの。／＼／」

刹那「？顔が赤いぞどうした？」

楽進・李典・于禁「「な、なんでもありません！（ないでー！）  
（ないのー！）／＼／」「」

刹那「お、おう？ってそれよりなんで街はこんな状態なんだ？」

楽進「今この街は黄巾党の襲撃を受けているのです、一時は退けましたが奴らはすぐにでもまた攻め込んでくるでしょう・・・ワタシ達義勇軍はその迎撃の準備をしていたところなのです。」

李典「そんでもってこの辺りを治めてる役人さんからも援軍が来てるんやけど、正直それを合わせても数は向こうのほうが多いんや・・・。」

刹那「役人の・・・つまり正規軍か・・・いったいどんな奴が率いてんだ？」

????「楽進、李典それに于禁なにかあったのか？」

水色の髪を片目だけ隠すように下ろしたクールビューティーって言葉がよく似合う女性がこっちにやってきた・・・

なかなかの武人だな・・・

楽進「いえ、私の勘違いだっただけです！あ、歌実殿。こちらがさつき言っていた援軍を率いている方です。夏侯淵様、こちらは旅人の歌実殿です。」

へえ〜なるほどな・・・魏の霸王の将か・・・都合が良いな・・・

????「夏侯妙才だ。曹操様の下で将を務めている。よろしくな、歌実。」

side

夏侯淵

曹操様からの命で黄巾党に襲われてるこの街の防衛のために先発隊として来た。なんとか撤退させたが、あくまで一時的であり、ヤツらはスグにもう一度来るだろう・・・今はそれに備えて準備の真っ最中なのだが、なにやら向こうが騒がしい、聞こえてくる声は義勇軍を率いている楽進達のように、どうかしたのか？

夏侯淵「楽進、李典それに于禁にかあったのか？」

聞きながら近づいていくと3人の他にもう1人いた。なかなかの顔立ちをしていて、長い髪をまとめた、蒼い目の男がいた・・・。ただの勘違いらしく、楽進達の様子から敵ではない様だ。名前を歌実というらしく旅をしている最中にここに立ち寄ったらしい。

・・・ん？歌実？それに見た事もない服装、もしや・・・？

夏侯淵「歌実、お前もしかして、カソウフウジンキ歌奏風神姫ではないのか？」

于禁「夏候淵様、それはないの〜その人確か女の人のはずなの〜。」

李典「確かにあんちゃん強いけど、性別ちゃうし、楽器なんか持ったらんやん。」

楽進「夏候淵様、さすがにそれは違うかと・・・。」

夏候淵「む？・・・そうか、そうだと思ったのだが・・・。」

刹那「・・・・・・・・・・（泣）」

李典「ん？どうしたんやあんちゃん？泣きそうになって？」

紅葉「マスターはどこ行っても女にしか見られないみたいなんだよ〜」

青藍「・・・頑張ってください、マスター・・・。」

李典「うわ！？なんなんやこの子ら！？！？」

于禁「かわいいの〜！！」

楽進「な！？妖か！？」

刹那「落ち着け！こいつらは俺の相棒だよ・・・。」

夏候淵「相棒？にしては小さすぎると思うが・・・。」

刹那「おれが歌奏風神姫、カソウフウジンキ天の御使い・・・歌実奏曲だよ・・・。」



紅葉「マスター、ドンマイなんだよ……。」

刹那「ありがとな、それよりだ……こちらの戦力と黄巾党の戦力を教えてくれ、手伝ってやるよ……。」

楽進「え！？手伝ってくださるのですか!？」

刹那「ああ、奴らがいたら、旅の弊害になるしな……それにあいづらみたいなのは、気にいらねえからな……。」

さて防衛線だが、どうしてくれようか？

第十四話 別れ、迷子？三羽鳥に会う（後書き）

笑い猫「ふっふっふww劉備に会いに行くと見せかけと曹操のところへww」

刹那「どこのひっかけだよ・・・」

笑い猫「うるせえ、方向音痴。」

刹那「（グザッ！）（ぐはあ！）！」

笑い猫「まあそれは置いといて・・・次回は防衛線！！乞うご期待！！」

第十五話 策略による殲滅（大爆発！！！！）（前書き）

笑い猫「さてさて、武力もええけど策略もええなあww」

刹那「おい、どごそのカラクリ職人の口調になってるぞ・・・」

真桜「わいは気にせえへんで」

笑い猫「おお、わかつてはりますな」

真桜・笑い猫「あっはっはっは・・・クックックックク・・・」

刹那「何で急にあくどい笑いになってやがる！！」

笑い猫「そんなこんなでどうぞ！！」

刹那「あれえ！？スルー！？！？」



## 第十五話 策略による殲滅（大爆発！！！！）

さて、まず戦力の把握だな・・・

刹那「こつちとあつちの数は？」

楽進「こちらが800です、それと真桜が作った投石機があります、黄巾党の奴らは6000です。ですが、曹操様の援軍が二刻（1時間）後に来ると伝令が来ています・・・」

投石機か・・・むう、それでも普通に厳しいな、だが・・・

刹那「それと別に非戦闘員は何人いる？」

楽進「え？700くらいですが・・・！？まさかその人たちのも戦えとー!？」

刹那「いや違う、罨を作るから手伝ってほしいのさ」

夏侯淵「ほう・・・罨か、どんな罨何だ？」

刹那「ああ、それはな（ごそごそ）」

さてさてお楽しみだな

side

黄巾党

チツ！まったく厄介な所だ・・・何度か繰り返し攻めているがなかなか落ちやしねえ！！だがもうもたねえだろう、これで奴らのもんも奪ってやんよ！！

「行くぞ野郎ども！！さっさと落として奪えるもんだけ奪っぞ！！」

「「「「「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」」」」」

さてさっさといくぜええええええ！！！！

「ぐあああ！？」「痛つてえええ！？！？」

「どうした！？」

「足元に大量の尖ったやつが！？」

「チツ！畏か！！！！気を付けて進め！！」

そうやって指示をするが・・・

「お頭！！東門の奴ら何か見たこともねえもんを持ってありえねえくらいの矢を飛ばしてきやす！！」

「こちらの西門はその数は少なえっすが、火のついた竹の塊を飛ばしてきて後でその竹が爆発しちまうから突撃できねえっす！！」

チツ！何なんだ！？？さっさと落とせるから楽勝だと思ったのに！！

「なら正門を攻めるぞ！！さつさと落とすしちまえ！！」

この選択は俺たちの間違いであったとまだ知る由もなかった・・・

side

刹那

いや、うまくいくもんだな・・・投石機が使えるならほかのやり方もあると思いつきでやってみただけど・・・戦えないから役に立たないとかじゃねえな・・・

俺は西門と東門の奴らに呉で作置きをした連弩を渡し防衛力を上げ、さらに黄巾党の奴らが攻めづらくなるようにまきびしを大量にまくのを手伝ってもらった・・・

刹那「まあそのせいで正門の方に大量に集まるわけなんだが・・・」

楽進「そうですね、西と東門には500ずつで別れ、残りはすべてこっちに攻めてきています。」

刹那「ああ、予定どおりだな、後は準備ができたら終わりだな・・・」

楽進「ええ、まさかこんな方法があるなんて・・・」

夏侯淵「私もこんな方法は初めてだ・・・」

刹那「まあ物はやり様だよ、さてひと当たりするぞ・・・背中を任せろぞ。」

夏侯淵「任せろ、お前も気を付けておけよ……」

楽進「お任せください！歌実様！」

刹那「刹那でいい、背中を預けんだ、それにお前らは信用するに値する奴だ……」

楽進「！！光栄であります！なら私も風とお呼びください！！」

夏侯淵「フツ、なら私も秋蘭でいい。」

刹那「そうか、援護を頼むぞ秋蘭、では行くぞ風！！」

楽進「はい！刹那様！！」

刹那「紅葉！青藍！歌を頼むぞ！！」

紅葉・青藍「はい！マスター！！」

【突撃ラブハート】

【LET'S GO つきぬけようぜ

夢でみた夜明け まだまだ遠いけど

MAYBE どーにかなるのさ

愛があればいつだってー~~~~~】

刹那「全員いくぞ！！この戦いは死ぬための闘いではない！生き残

るため、守るための闘いだ！！守りたい者を守る覚悟があるのなら、その覚悟を、魂を貫き通して見せる！！」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおつおお！！！！！！！！」」」」

これで士気も上がったし、歌のおかげで実力不足も補える・・・さて俺もやりますか！！」

side 凧

凧「はああああああ！！！！」

ドカアアアアアン！！！！

刹那「おおおおおおお！！！！！！！！」

ザンツ！ザンツ！！ドスツ！ドスツ！！

私は気弾を使い敵を吹き飛ばし、刹那様は私が打ち漏らした敵をどんどん槍で葬っていく・・・

刹那「凧！まだ気弾は打てるか！！」

凧「はい！まだ大丈夫です！！」

刹那「なら今は打ち続ける！！今は耐えきるぞ！！」

凧「はい！わかりました！！」

「くっ!?なんて強さだ!!だが打てなくなった時が最後だ!!ひ  
るまず攻める――!!!!」

「「「うおおおおおおおおおお!!!!!!」「「「

そう言うと、奴らはひっきりなしに攻めてくる。

凧「(予定通りだ・・・真桜、急いでくれよ・・・)」

そう、私たちにはまだ策があった・・・刹那様が考えた策が・・・

side 刹那

刹那「うおおおおおおおお!!!!」(ダンッ!!)

コウエイ エンゲツザン  
光影・円月斬

ザザザクンツ!!!!

襲いかかる敵を跳んで、空中から丸ごと切り裂く!!

「「「ぐああああああああ!!!!!!」「「「

刹那「チイツ!!まだか!!」

秋蘭「刹那!!!!準備出来たらしいぞ!!!!」

李典「バッチシやで!!!!」

刹那「よし!! 凧!!!」

凧「はい!!! 全員! 後退するぞ!!!!!!」

「!!! 奴ら後退し始めたぞ! 今が好機だ!!! 突撃するぞ!!!!!!」

「「「「「うおおおおお!!!!!!!!!!」「「「「

奴らは好機とみて突撃を始めた!!

刹那「李典! 今だ!!!!!!!!!!」

李典「おっしゃあああ!!! 発射やあああああ!!!!!!!!!!」

俺が李典に頼み、用意してもらった物それは・・・

投石機で大量の小麦粉を投げつけるための準備だった・・・

「ぐああなたこれ!」「うわあつぶ! 何だ? 粉じゃねえか! ?! ?」「ま、前が見えねえ! ?」

黄巾党の奴らのところに前が見えなくなるかかった・・・

刹那「今だ!!! 秋蘭!!!!!!!!!!」

秋蘭は火のついた矢を構え・・・

秋蘭「ああ、任せろ!!! はあああああ!!!!!!!!!!」





「うわああああああ……」「勝てるわけがねえ……！」  
「逃げろおおおお……！！！」

こうして、黄巾党の殲滅は終わり……

刹那「諸君……！よくやってくれた……！俺たちの勝利だ……！」

「」「」「」「」「」「」  
「うおおおおおおおお……！！！！！！！」

「……！！」「」「」「」「」

黄巾党から勝利を得ることができたのであった……

第十五話 策略による殲滅（大爆発！！！！）（後書き）

刹那「すさまじいな・・・」

笑い猫「学園都市のネタや・・・」

刹那「アク ラレータのネタ・・・」

笑い猫「・・・」

刹那「・・・」

笑い猫・真桜「「恐るべしっ！！学園都市！！」」

刹那「違っただろ！？（ビシッ！！）」

第十六話 霸王との出会い、狙われた刹那、またまた客将（前書き）

笑い猫「やっと曹操との出会い・・・結構長かったなあ・・・」

刹那「そうか？あまり経ってないように思えるが？」

笑い猫「結構思い悩んだよ！！どうやってフラグ立てよう・・・」

刹那「結局それが！！」

笑い猫「いやそれしかないじゃん？ともかくどうぞ！！」

第十六話 霸王との出会い、狙われた刹那、またまた客将

side

曹操

曹操「・・・いつたい・・・なにが・・・」

私は曹孟徳、街が黄布党に襲われてると聞き、春蘭と兵を5000率いて救援に向かっていた。

最初に、秋蘭を先行させていたから私たちがつくまでもつと考えていた・・・

夏侯惇「いつたいなんだったんだ？」

あと少しで到着と言う時、大地を揺らすほど大きな音がか聞こえた・・・

夏侯惇「華琳様、いつたい何が起きたのでしょうか？」

曹操「わからないわ・・・急ぎましょう、秋蘭が心配だわ。」

夏侯惇「そうですね！急ぎましょう！華琳様！」

「「「「うおおおおおおおおお!!!!!!」」」」

到着すると、すでに戦いは終わっていた・・・驚いたのはたった800の軍勢で6000の黄布党を破ったということだった。

曹操「いったいどうなっているの?」

自分の見ている光景を呆然と見ていると・・・

秋蘭「華琳様!」

夏侯惇「秋蘭無事だったか!」

曹操「秋蘭!無事でよかつたわ、でも何があつたの?」

秋蘭「はっ!それはこの街に立ち寄った者の策により殲滅に成功しました。」

曹操「その者は何者?」

秋蘭「天の御使い、カソウフウジンキ歌奏風神姫、と呼ばれている歌実 奏曲という者です。」

!!カソウフウジンキ歌奏風神姫!武は天下無双、智勇をとつても横に出る者はおらず、とても美しい曲を奏、歌い、いくつもの村を救い、そしてとても美しい娘と聞いている・・・この勝利もその者の力・・・欲しいわねえ・・・

曹操「今どこにいるのかしら?案内してくれない?」

秋蘭「わかりました。」

ふふふっどんな子が楽しみだわ・・・

side

刹那

ゾクリッ

刹那「！？な、何だ今の寒気？」

凧「刹那様、どうかなさいました？」

刹那「いや、なんかいや々な寒気がしただけだ。」

凧「そうですk「おい凧〜！！」「凧ちゃん〜！！」！沙和、真桜！〜！！」

李典「うまくいったな〜。」

李典「無事でよかったのー！！」

凧「ああ、刹那様、ありがとうございます。」

刹那「俺は少し手を貸しただけにしかすぎねえよ、凧。」

凧「それでもです、っとどうした二人とも？」

李典「なんや〜凧、いつの間に真名を許しあっとんや〜）ニヤニヤッ」

于禁「そうなのー（ニンマリッ）」

凧「い、いや、それは「戦闘で背中を預けるのなら真名で呼んでくれと、俺が先に真名を預けたんだ」せ、刹那様！」

刹那「俺が預けたら凧も預けてくれてな、それで真名で呼び合ってるんだよ、まあ、そういうわけで凧と呼ばせてもらってるわけだ。」

李典「なるほどな、通りで凧が嬉しそうなわけや」

凧「なあ!?!」

于禁「隠そうとしてもバレバレなの」

李典「態度で丸わかりやな」

凧「ツ……ノノ」

顔を赤くする凧、どったんだ？

于禁「うーん……そうだ！歌実さん、私も真名で呼んでほしいの  
」！！」

李典「そうやな、兄さん、ウチの事も真名で呼んでや」

刹那「いいのか？」

于禁「凧ちゃんが預けるのなら私もいいの！」

李典「うちも同じやで。」

刹那「そうか、なら俺も刹那でいいよ。」

沙和「沙和の真名は沙和なの。」

真桜「ウチの真名は真桜や。」

刹那「よろしくな、沙和、真桜。」

真桜・沙和「よろしくや(なの)。( )。」「」

こうして俺たちは真名を交換した・・・

秋蘭「刹那、少し良いか？」

刹那「ああ秋蘭、お疲れさん、どうした？」

秋蘭「ああ、曹操様がお前に会いたいと言ってな。」

刹那「へへそうなんだ、それで曹操はどこだ？」

すると、金髪のお嬢様必殺の縦ロール少女が現れた。

曹操「あなたが歌実 奏曲？」

刹那「そつだが、あんたが曹操か？」

曹操「ええ、私が」



「????」貴様っ！ 華琳様になんという口の聞き方をしているっ！  
「」

すると後ろにいた黒髪を後ろに流した女性が片刃の大剣を降り下ろしてきた！

刹那「（ヒュン！）うおっ！？」

剣を上から振ってきたのでそれを、避ける。「!？」避けられた夏侯惇はすこし驚いていた。

刹那「く、口のきき方が悪かったのは認めるけどいきなり切りかかってくるのはどうよ!？」

「????」ええいうるさい!! 問答無「春蘭!! なにをやっている! 早く剣をしまえっ!!」!?! 申し訳ありませんっ、つい……  
「」

曹操「まったく、すまなかつたわね歌実……しかし春蘭の一撃をよけるとは……」

秋蘭「すまない刹那。うちの姉が失礼した、どうも華琳様の事になると頭に血が昇りやすくなってしまうのだ。」

刹那「いや俺も口が悪かったよ秋蘭（姉ということは夏侯惇か）。」

曹操「!秋蘭、あなた真名を許したの？」

秋蘭「ええ、背中を預けるならという理由で刹那から真名を預けられましたので。」

曹操「そう、それはそうとあの時の爆発はなに？」

刹那「ああ、それはな……」

説明中

刹那「……というわけなんだ。」

曹操「……そう、そんな方法が……」

秋蘭「私も最初は驚きました、刹那、こんな方法どこで……」

刹那「天の知識、それしか言えんな……」

曹操「……天の御使いとしての知識、天下無双と言われる武、名声、そして艶のある美しい容姿……どれもとっても最高ね……」

紅葉・青藍「マスター……!!」

刹那「おお、二人とも無事だったか。」

夏侯惇「な!? 妖か!?!?」

秋蘭「姉者、あれは刹那の仲間だ。」

曹操「へえ、かわいらしいじゃない……あれも欲しいわねえ」。

」

刹那「さて、街の防衛には成功したし、そろそろ行く。待ちなさい。  
「ん？」

曹操「あなたほどの一材、私が見逃すはずがないでしょ？」

刹那「どういうことだ？」

曹操「単刀直入に言うわ、貴女私の物になりなさい、それだけの才をこの乱世でくすぶらせておくのはもったいないわ。」

刹那「お誘いはうれしいが断らせてもらうよ。」

曹操「・・・その訳を聞いてもいいかしら？」

刹那「俺には目的がある、詳しく話言えないが『三本の矢を一つに  
・・・この目的があるからどこか特定の将になることはできないん  
だよ・・・』」

曹操「そう・・・ならば私達と来なさい」

刹那「・・・あの話聞いてた？」

曹操「部下になれと言っているんじゃないわ。黄布党を討伐するま  
で協力してくれないか、と聞いているの、それにあなたの気が変わ  
るかもしれないしね。」

刹那「客将か・・・いいだろ、その代わり、と言っては何だがこの  
三人を仕官させてやってくれないか？一角の将になれると思うのだ  
が？その少しの間、客将として仕えよう。」

三人「「私が（ウチが）（沙和が）！？」」

曹操「わかったわ、所で何故貴女は男物の服を着ているのかしら？  
口調も男の喋り方だけけれど？」

刹那「はあ〜・・・そんなもん簡単だ・・・」（スツ）

髪を結ぶと・・・

刹那「そいつは俺が男だからだよ・・・」

曹操・夏侯惇「「な！？なんですって（なんだと）！？！？」」

秋蘭「刹那、お主本当に男なのか？やはり信じられないのだが・・・」

刹那「まごうことなく男だよ・・・もう慣れたよ・・・」（泣）

曹操「あ、あり得ないわよ！　嘘を言っているのではないの？」

刹那「正真正銘、男です・・・」

曹操「あ、あれほどの美貌を持っていて男・・・でもこれほどの  
美貌持っているのなら・・・男でも・・・」

？何思い悩んでんだ？？

紅葉「乙女の難しい時期でもあるんだよマスター・・・」

???.わけわからん・・・

こうして、刹那は客将になった・・・



第十七話 寝起き 春蘭との手合わせ 春蘭の新しい剣（前書き）

刹那「おい！！なんだよこのタイトルは！！！！」

笑い猫「ん？えつとなあ・・・適当ww」

刹那「あほかああああああああああ！！！！！！！！！！」

笑い猫「まあまあwwその代わり次は女装編だぜよww」

刹那「それはやめろ！？」

笑い猫「え〜〜しかたないな・・・やだ」

刹那「うわああああああああああ！！！！！！！！！！」





朝方の刹那はやばかった・・・しぐさがまるで猫のようなしぐさであってとてつもなくかわいい・・・しかもその当の本人はまだ寝ぼけていて目を（クシッ）と目をこすっている・・・

ほんとに猫のようだ・・・

春蘭「・・・ハッ！！そうだった！！刹那起きろ！！今から私と勝負しろ！！！！」

刹那「ええ、眠いよ。」

秋蘭「すまないが華琳様のご命令でもあるのだ。」

刹那「華琳の？しかたないな・・・着替えるよ。」

春蘭「早く済ませろよ？華琳さまが来る前に集まっておくのだ！！」

刹那「ふあゝい。」（ぬぎぬぎ）

春蘭「つて貴様！何脱ぎ始めている！！！！」

刹那「ほえ？」

秋蘭「いきなり脱ぎ始めるな刹那・・・」

刹那「む、ごめん・・・」（・・・）

春蘭・秋蘭「ッ・・・／／／」

刹那「?どうしたの?着替えるんだけど・・・」

春蘭「あ、す、すまない・・・(な、なんてきれいな肌をしているんだ!!)」

秋蘭「あ、ああ、先に調練場に先につてるぞ(むう、これほどは・・・)」

刹那「?何で顔が赤くなっただろう?」

気づかないのは本人だけであり、二人が心の中で思っていたのは・・・

秋蘭・春蘭「(奴は本当に男なのだろうか・・・)」

と、思っていた・・・

ちなみに真名で呼んだのは「一時とはいえ私の将になるのだから、教えるのは当然でしょう?」と華琳が言ったから全員の真名を交換させてもらった・・・

調練場に行くところには華琳、春蘭、秋蘭、凧、真桜、沙和、季衣の七人がいた。(桂花は街の視察に出ているためいない・・・)

季衣「にいちゃん!おはようー!!」

刹那「あいよ・・・おはようさん、呼んだか華琳?」

華琳「ええ、さっそくだけど春蘭と戦ってくれない?貴方の実力が

知りたいの。」

刹那「わかったよ。」

春蘭「ふはははははっ！！！！たたき切ってくれる！！！！！！」

刹那「はなつから殺す気満々かよ……」

しかし大剣か……なら『夢幻』でいいか……

俺は刀を構えた……

春蘭「そんな細かい剣で私の剣を受け止められると思っているのか？」

刹那「そこら辺はは技量で補うさ……さて始めようか……」

華琳「では両者用意はいいわね……始め！！！！」

春蘭「行くぞ！！！！うおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！

！！！！！！」

刹那「！？速い！？！？」

おれは後ろに跳んでよけると……

ドゴオオオオオオオオオオオオン！！！！！！！！

！？マジかよ……地面にめり込んでやがるよ……

刹那「さすが魏武の大剣……なんて力だ……」

春蘭「当然だ！ 私は相手を一撃で倒すために力を重点的に鍛えている！！ 力自慢なのは当たり前だ！！！！」

刹那「そうか、だが簡単に勝てると思うなよ！！！！」

春蘭「そうでなくては面白くない！ お前の全力、私に見せてみる！！！！」

刹那「応！！ はあああああああ！！！！！！」

ムゲン  
ゲンエイジンソウガ  
夢幻・幻影陣爪牙

春蘭「な！？（ゴガガゴガゴガゴガアアアアン！！！！！！！！）つくう！！！！」

俺はとてつもない速さで縦、下から連続で切りかかる！！（常人には残像が同時に切りかかっているように見える……）

刹那「へえ、あれを受けきれるとは……なかなかやるな……」

春蘭「この！！なめるな！！！！！！！！！！」

刹那「うお！？（ガキイイイイイン！！！！）チイツ！！！！」

隙をついたように切りかかってきた剣を防ぎ……

刹那・春蘭「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ギイイイン！！ギイアン！ギイアン！ガキイン！！ガキヤアン！  
！ガン！カキイン！キンキンキン！！

雄叫びと共にただただ剣を打ち合っていく・・・周りの石は吹き  
飛び、地面にはヒビがはいり、金属音が鳴り響く・・・

side

華琳

華琳「・・・なんて闘いな・・・」

私は春蘭と刹那を戦わせているが、正直驚いた・・・春蘭とここま  
での闘いをするなんて・・・この戦いはまるで鬼と鬼との戦いの  
ようだよ・・・

凧「刹那様・・・」

真桜「な、なんちゅう戦いなんだ・・・」

沙和「す、すごいのに・・・」

そう、まさしくその通りである、だがそれ以上に・・・

季衣「・・・綺麗・・・」

秋蘭「・・・凄いな・・・。戦場でも見惚れてしまいそうだ・・・」

その通りである、あれだけ激しく打ち合っているのにもかかわらず、  
舞を踊っているように見え、戦いというより芸術といった方が近い。  
・  
・

本来、武のぶつかり合いは、美しい、極限まで引き上げられたモノは自然と美しくなる・・・  
だが、刹那の武には他のだれにもない美しさがあつた・・・

刹那「そろそろ次で終わりにしようか・・・」

ハッ！！と刹那の声で我に返る・・・

この曹猛徳を魅了させるなんて・・・ますます欲しくなつたわよ刹那・・・

side 刹那

刹那「そろそろ次で終わりにしようか・・・」

正直に言おう・・・腹が減つた！！朝飯食つてないからそろそろ限界だ・・・

春蘭「いいだろう・・・次で決めてやる・・・」

そして俺と春蘭は剣を構え・・・

刹那「受けてみる！！我が最高の一撃を！！！！！！」

春蘭「我が魏武の大剣！！その身に受けてみよ！！！！！！」

ガキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

とてつもない轟音だった……勝ったのは……

カランツカランツ……

刹那「俺の勝ちだな……」

俺は春蘭の剣を神速の速さをもって刀でぶつけ、大剣を叩き折り、首に剣を突き付けた……

刹那「ふう〜終わった。」

三人「」「刹那様(さ〜ん)(兄さ〜ん)!!!!!!」

刹那「お？」

俺が刀を引くと凧たちがやってきて……

凧「す、すごかったです!!」

真桜「かっこよかったです!!」

沙和「きれいだったの〜!」

刹那「おう、ありがとな……」

華琳「見事なものだったわ刹那。」

刹那「おう、それで？満足いききましたかな？」

華琳「ええ、ますます貴方が欲しくなったわ、私のものになりなさい。」

刹那「すみませんが今は何と言われようとだめです。」

華琳「そう・・・まあいいわ、いずれあなたを手に入れてやるわ。」

おおっ、なんという直球的な・・・

春蘭「うっ・・・。」

刹那「ん？どうした春蘭？怪我でもしたか？」

だとしたら早く治療を・・・

春蘭「うわあああああああああん！！私の剣がああああああああああああ！！！！！！」

刹那「へ！？」

え！？何！？号泣！？！？

春蘭「どうしてくれるんだー！！！！私の剣がおれてしまったでないかあああああ！！！！」

刹那「ああ・・・そのう・・・悪かったな」



秋蘭「姉者、刹那もこう言っているのだから許してやれ。」

春蘭「うう、ぐす……ひっくう……」

なんつうか……

刹那「何この可愛い小動物……」

秋蘭「刹那もわかるか？姉者の可愛さが……」

刹那「ああ、今ならわかる……」

秋蘭「刹那。」  
刹那「秋蘭。」

ガシツ！！俺は秋蘭と固い握手を交わした。

春蘭「うう……刹那よくも……」(泣)

刹那「ああ……まだ泣いてんのか……わかったよ、春蘭、お前専用の良い大剣をやるから……」

春蘭「うう……ほんとか？」

刹那「ああ、気に入らなかつたら突き返してくれても構わん。」

春蘭「うう、ぐすつ……約束だぞ！！」

刹那「ああ、約束だ……」

この後日、投影能力を使って、大剣『斬艦刀』を作り、春蘭渡すと大喜びしたそうな・・・

それにしてもさすが春蘭・・・重さ約60キロまで減らしたが軽々振り回すとは・・・

第十七話 寝起き 春蘭との手合わせ 春蘭の新しい剣（後書き）

春蘭「おい！！これでは私が化け物みたいではないか！！！！！！」

笑い猫「まあまあ でも華琳様の役に立てやすくなるよ」

春蘭「そ、そうか・・・ならいいが。」

笑い猫「そうそう （計画道りWWW）」

刹那「見事にだまされたな・・・」



第十八話 逃走 睡眠薬 ほんとに男か？

刹那「はぁ・・・はぁ・・・来、ここまで逃げれば・・・」

????「みつけたぞこつちだー！ー！ー！」

刹那「げ！？もうかよ！？」

どうも刹那です、現在俺は城中を逃げ回っています・・・なぜかと言つと・・・

華琳「刹那！待ちなさー！ーい！ー！」

刹那「誰が待つか！ー！ー！女装なんかさせられてたまるかああああああああ！ー！ー！ー！」

つかまつたら女装させられるからだ！ー！

春蘭「華琳様はお前に似合うと思って揃えたのだぞ！？それを無碍にするつもりか！ー！ー！」

刹那「あんなのに似合っているとわかれて喜ぶ男がいるかああああああああ！ー！ー！ー！ー！」

紅葉「まあまあマスター、だまされたと思って一度だけ・・・」

青藍「私も見てみたいです。」

刹那「お前らもか！ー！ー！いやじゃ！ー！ー！だまされた先には絶望しか

ないわ！！！！！！！」

つかまつたら最後・・・いろなものを失っちまう！！！！！！

(ボヒユウツ！！) 刹那「うおっ！？」

凧「すいません刹那様、華琳様の命令ですので、」

沙和「おとなしく捕まるのー！！」

真桜「逃げられへんで〜。」

刹那「クツ！！そろいもそろって！！・・・俺には味方はいないのか！！！！！！」

まずい・・・このままじゃ捕まる！！！！こうなったら庭から抜けて外に逃げちまおう！！！！

そう思った俺は庭を走る！！

刹那「このままつかまってたま」(ズボツ！！) うおおお！？！？！？

お、落とし穴！？！？こんなことをするのは・・・

桂花「引つかかったわねこの変態無責任孕ませ男女！！！！！！」

刹那「だれがじゃあああああ！！！！つかお前もか桂花！！お前俺に興味ないんじゃないのか！？！？！？」

桂花「華琳様のご命令に従ったまでよ、ボソボソツ(私も少し見て

みたい気が・・・)」

刹那「なんてつたんだ？」

桂花「何でもないわよ！！華琳様——！！刹那を捕まえました——！！！！」

華琳「よくやったわ桂花、今夜閨に来なさい、ご褒美をあげるわ。」

桂花「か、華琳様・・・えへへ・・・／／／」

うわ〜百合百合しい・・・じゃなくて！！！！

刹那「つかまつたが着替えさせられると思っなよ！！！！」

華琳「それに関しては大丈夫よ・・・青藍！！」

青藍「はい、どうぞ・・・」

なっ！！？あれは俺の睡眠薬！？！？（治療などで使うので持ってたやつ）

刹那「青藍！！主の俺を売りやがったな！！！！」

刹那「いえいえ、売ってなどおりませんよ？私は自分の欲望の忠実に従ったまで・・・マスターの可愛くなったところ、私は見てみたいんですよww」

こいつ・・・アトデオボエテヤガレ・・・

華琳「まあ何でもいいわ・・・眠って可愛くなっちゃいなさい刹那。」

そう言っただけに俺に睡眠薬を振りかけた。

刹那「ぐっ！ちく・・・しょ・・・う（ガクンッ！）ぐう〜」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

うっ・・・何なんだ一体？  
ん？何か騒がしい？

????「まさ・・・とは」

????「化・・・ほとんど・・・」

け・・・なんだって？・・・うう・・・ぐらつく・・・

????「あい・・・らし・・・わ」

少しずつだけど周りが分かってきた・・・どうなってんだ？

桂花「まさか・・・ここまでとは・・・なんでこいつは・・・」

なにがここまでなんだ？つかなんか下がスースーするし、はき心地



がなんかおかしいような？

凧「・・・／／／」

真桜「なんちゅーか・・・／／／」

沙和「洒落にならないの・・・／／／」

秋蘭「これほどとはな・・・」

春蘭「どう見ても女にしか見えませんね！華琳様！！」

うう何がなんだ？だれが？

刹那「う・・・にゃんだ〜？妙に動きじゅらい・・・？（つゝ）（）」

睡眠薬のせいで呂律が回らないまま俺は眼をこすりながら起きると・・・

そこにいた全員「コッコッコッツ／／／／／」「」「」「」「」

刹那「？みんなやどうしたによ？かおあきやくしちえ？」

？を浮かべ起きたばかりで涙目の俺は首をかしげると、それはまるで雨の日に見つけた捨猫のようで・・・  
喜びとも苦悩ともつかない表情の華琳。

感嘆する秋蘭、満足げな春蘭、鼻血が出ていて首をトントンしている紅葉と青藍、沙和と真桜は頬を染めて視線を外し、自分にそんな趣味は無いと激しく葛藤していて、凧と桂花は床に頭を打ちつけて、どうにか堪える、そして、季衣は耐性が無いために見惚れてしまっ

ていた……

……一同こつ思ったであろう……

一同「「「「「「「「「これはホントに男なの（やの）（なの）（なの）（なの）？」」「」「」「」「」

そのあと刹那は刹那で薬のせいでもともと思考が回らないことをいいことに着せ替え人形にさせられ、刹那は何か大事なものをなくした！この後、無理やり連れ出され、警邏の兵や町民達は女装刹那の可憐さに心を奪われたとか奪われなかったとか……。

刹那「アレハオレジャナイ、アレハオレジャナイアレハ……」

後日……刹那は部屋に三日間壊れたように繰り返しつつぶやいていたそう……



第十九話 警備案 失敗を糧にすること（前書き）

笑い猫「ハッピーニューイヤーwwみなさんあけおめですぞーww  
」

刹那「今年もよろしくお願いします。」

笑い猫「では今年の投稿・・・どうぞー!」

## 第十九話 警備案 失敗を糧にすること

華琳「・・・たしかにそれなら出きるわね、でも大商人と小商人とじゃ差が出来てしまっうんじゃない？」

刹那「ああ、それはそれでまた分ければいいだろ？小商人と大商人とは別々にすれば良い、小商人は小商人と、大商人は大商人と競ってもらえば不公平じゃないだろ？」

華琳「それなら問題ないわね・・・それにしてもよく考えられたわね。」

刹那「まあな・・・」

今俺は警備案で華琳に提案しているところである、内容は警備の詰所の位置についてだ。

街の治安を良くするために商人たちから出資を頼み、番付（商人を出資額に応じて順位付けして決まった場所に貼り出すこと）して街の人はそれを見て買い物をすれば名前が分からない場所から買うより分かる方が安心でき、小商人は小商人と、大商人は大商人と競ってもらえば差はなくなるということを提案した・・・これをすれば治安は良くなるし、物の流通も良くなつて一石二鳥つてわけだ。

華琳「それで、警備の人員はどうするの？ちゃんとした者がいなくなったらあまり意味がないわよ？」

刹那「凧達に任せてみたらどうだ？まだここに来て日が浅いし、街の人達に顔をおぼえてもらういい機会だろう？」

凧は大丈夫だが後の二人は・・・うん、公私混同はしないと信じよう・・・

華琳「そう、なら隊長は貴方に任せるわ刹那。」

は・・・？

刹那「俺がやんのか？」

華琳「あなたが言い出した事なんだから、あなたが責任者になるのが筋じゃないの？」

刹那「あゝ確かに・・・」

華琳「でしょう？ならお願いね。あの娘達には伝えておくわ」

刹那「でもいいのか？俺は目的があるからいずれここを去ることにするんだぞ？」

華琳「だったら貴方の後任が務まるようなものを探しなさい、それなら問題ないでしょう？」

刹那「ああそれなら良い、わかったやらせてもらうよ。」

華琳「やり方等はあなたに任せます。しっかりね。」

桂花「あんたの考えた案なんだから、ちゃんと結果を出しなさいよ。」

刹那「ああわかってるよ。」

次の日・・・

刹那「というわけで街の警備をすることになったわけだが・・・」

凧「はい！お任せ下さい！この任、必ず成し遂げてみせます！！」

真桜「うちにできるかいな？」

沙和「凧ちゃんがいれば何とかなると思うの・・・」

やる気満々の凧と対照的な二人・・・大丈夫だろうか？

刹那「とりあえず、今日は街の中を見て回って街の雰囲気と道をおぼえて行こう。いずれ正式に警備兵が入ってくるだろうから、その時は君達が教えてあげてくれ。」

凧「わかりました隊長！！」

真桜「了解や！」

沙和「了解なの〜！」

刹那「よし、さていくか・・・華琳に報告書まとめなきゃならんしな。」

俺は三人と一緒に街へ向かった・・・さあ、初仕事だ！

意気揚々と街に向かったわけだが・・・

沙和「あー！！！！！」

刹那「どうした！？盗人か！」

沙和「可愛い服なの〜！！」

（ガクツ！）おい！！

刹那「こら・・・今仕事だぞ？」

沙和「ちよつとだけ！ちよつとだけなの〜！！」

刹那「いやいやちよつとでもだm「あー！！！！！」今度は何だ！？」

真桜「新しい部品のねじが出とる！！！！」

刹那「お前もか！駄目だつーの！！」

真桜「すぐ終わるから見逃してや隊長〜！！」

こいつら・・・頼みの綱の凧が頼りだ！！

刹那「凧、止めるのを手伝・・・凧？」

凧「不審者・・・不審者・・・」

おい・・・熱心によってくれるのはありがたいが・・・正直、君が



不審者に見えるよ凧・・・（泣

凧「不審者・・・不審者・・・」

刹那「えつと・・・凧？真面目にやってくれるのは嬉しいが・・・  
もう少し肩の力を・・・」

凧「どうしました隊長！！不審者ですか！？」（ヒュボツ！！）

聞かれただけ氣を拳につて、こらこら！

刹那「とりあえず落ち着「食い逃げだー！！」ツ！！」

まずい・・・バットタイミングだ！！

刹那「なご「待て！逃がさんぞ！大人しく投降しろ！！」遅かった  
！？」

「ふざけんな！！どけええええ！！！！」

犯人が凧に向かって突進する・・・ああ、終わったな・・・

凧「仕方ない、ならば力づくで大人しくなってもらおう！はああああ  
あああ！！！！」

氣弾準備する凧つて、氣弾でかつ！？

刹那「な、凧！威力を抑え「食らえええええ！！！！」あーあ・・・」

「ぎゃあああああ！！！！」

犯人に当たった・・・当たったのだが・・・

「きゃあああ！！」「たすけてくれー！！」「うわああああ  
！！！！！」

・・・周りの家や店、関係のない人まで巻き込まれちゃった・・・

沙和「えへへ、買っちゃったの」

真桜「いや〜！ええ買い物したわ〜」

凧「・・・よし！隊長！犯人を確保しました！！」

満足げな三人・・・沙和、真桜に関してはだめだこりゃ・・・凧、  
周りを見てくれ・・・

刹那「カオスだ・・・（汗）」

華琳への報告どうしよう・・・

華琳「よくやったわ三人とも・・・」

凧「ありがとうございます！」

沙和「頑張ったかいがあったの〜。」

真桜「せやな。」

そこの二人は遊んでたろうが・・・

華琳「ただ・・・いささかやり過ぎね。住民や店の持ち主等から苦情が殺到しているわよ？」

凧「う・・・(汗)」

華琳「街を守る警備隊が街を壊し住民を傷つけるなんて本末転倒よ・・・まあ、今回は許すけど・・・次は無いわよ？」

刹那「ああ、すまなかった。」

凧「も、申し訳ありませんでした・・・。」

華琳「ではこの話は終わります・・・三人は残りなさい、話があります。」

刹那「ん？俺はいいのか？」

華琳「ええ、用があるのはこの娘達だから、」

刹那「わかった、じゃあ失礼する。」

俺は玉座を後にした・・・

その夜・・・

刹那「やれやれ、今日は少し失敗したな・・・だがそれだけで終わらせないようになきゃな。」

紅葉「どういうこと何だよ？」

刹那「いろいろあるのさ、いろいろな・・・そんなことより月が綺麗だな・・・城壁に上がって歌でも歌おうか・・・」

青藍「わかりましたマスター。」

俺は城壁に向かい、歌を歌い始めた・・・

side

凧

凧「刹那様は一体どこに行ったのだろうか？」

沙和「部屋にはいなかったの・・・。」

真桜「どこ行ったんやろうな？」

私たち三人は刹那様を探していた、今回のことで謝るためだ・・・私たちを警備隊に推薦したのは、私たちが早くこの街に馴染めるようにするためにしてくれたのかかわらず、逆に迷惑をかけてしまったからだ・・・

真桜「隊長にはホンマに迷惑をかけてもーたなあ・・・」

沙和「なの・・・」

凧「そうだな・・・しかし刹那様はどこに、ん？」

沙和「どうしたの、凧ちゃん？」

凧「いや、なにか歌が聞こえないか？」

真桜「歌？・・・あー確かに・・・ってこれ隊長の歌やないか!？」

凧「城壁の方から聞こえてくるぞ。」

沙和「行ってみるの〜!」

私たちは城壁の上に向かった、そこに行くと・・・

【〜・・・旅人よ 傷あと痛むのなら私の胸で眠りなさい

慈しみながら包んであなただけ照らすの

今宵の月のように】

髪をほだき月明かりに照らされながら紅葉殿、青藍殿と共に歌を歌う刹那様がいた・・・月に照らされ踊りつつ歌を歌うその光景は芸術ともいえるほど美しく、歌っている歌はただただ綺麗で澄んでいて力強く歌っていて綺麗だった・・・

凧・真桜・沙和「・・・」

私たちは見惚れていた、聴き惚れていた・・・刹那様が歌い終わるそのときまで・・・

歌い終わると

パチッパチッパチッパチッ……

私たちは無意識に拍手をしていた……

side

刹那

パチッパチッパチッパチッ……

歌い終わると凧たちが立っていた

刹那「よお、どうした三人とも？」

凧「刹那様！！私は感動しました！！！」

沙和「すごかったのー！！！」

真桜「綺麗やったでー。」

刹那「ありがとな三人とも。」

紅葉「ありがとうなんだよ。」

青藍「ご静聴、ありがとうございました。」

刹那「ところでどうしてここに？」

凧・真桜・沙和「……あ……」「」「」

おい・・・忘れとったんかい・・・

凧「そ、そうでした！！すいませんでした！！！！」

沙和「隊長ごめんなさいなの～！！」

真桜「隊長堪忍や～！！」

思い出し謝りかい！まあいいとして・・・はて？

刹那「何謝ってんだ？」

凧「秋月様のお心遣いにも気づかず、私達は・・・」

沙「華琳様から聞いたの～」

真「ウチらを警備隊に推薦したのは、ウチらが早くこの街に馴染めるようにするためにしてくれたんやって」

凧「それなのに、逆にご迷惑をおかけしてしまって・・・」

沙和「沙和なんて、全然お仕事やらずに服に走ってたし・・・」

真桜「ウチらは隊長の優しさを踏みにじってしもった・・・」

刹那「そうか・・・」

華琳・・・話したのか・・・

刹那「それで？反省はしてくれただろ？」

コクリとうなずく三人

刹那「そうか・・・だったらいい。」

凧・沙和・真桜「」「え？」「」

刹那「明日からまた頑張ってくださいよ？」

凧「ゆ、許して頂けるんですか？」

刹那「反省してくれたんだろ？だったらそれでいいさ・・・」

沙和「で、でも・・・」

刹那「おいおい、反省してるのにこれ以上何か言うことあるか？」

真桜「せやかて、警備はうまくいかなかったわけやし・・・。」

刹那「失敗することなんて誰にだってあるさ、でもそこから何も学ばない、反省しない、同じことを繰り返すことが一番いけないことだ、三人とも・・・次も今日と同じような事をするか？」

凧「いえ！次からは周りの状況を確認かめ、必要以上の威力を出さないように精進します！」

沙和「沙和も次はさばらずしっかり見回りするの〜！」

真「ウチも気合入れてやることにするわ！見とってや隊長！」



うむ、良きかな良きことかな

やる気を見せる三人に

ポン

凧「あ、刹那様!？」

沙和「何するの〜!？」

真桜「な、なんや!？」

刹那「はっはっはっなんだか可愛くてな・・・」

思わず三人の頭をなでてしまった・・・なんかオヤジ臭いかなえ

ナデナデ

凧「・・・／／」

沙和「えへへ／／」

真桜「隊長・・・ハズいで／／」

おっと調子に乗り過ぎたか？三人とも顔が真っ赤になっちゃった。

スッ

凧・沙和・真桜「・・・」

おい・・・なんでそんなに残念そうなんだ？

刹那「さてそろそろ戻るか・・・それじゃ、改めて三人ともよろしくな(ニカッ)」

凧「はい！今度こそご期待に応えてみせます！／＼／＼(綺麗な笑みだ・・・)」

沙和「隊長も頑張るの／＼／＼(綺麗なの・・・)」

真桜「うちに任せっ切りやったら困るで隊長／＼／＼(良い笑顔するなあ隊長・・・)」

刹那「？どうした？顔が赤いぞ？」

凧・沙和・真桜「・・・なんでもないです(でー)(なの・・・)」

( )(鈍感・・・)( )( )

刹那「？」

知らないのは本人だけであつた・・・

第十九話 警備案 失敗を糧にすること（後書き）

刹那「おい！オヤジ臭いつてなんだよ！！！」

笑い猫「げっへっへwwたまには良いではないかww」

刹那「正月からこれかよ！！！」

第二十話 凧、新たなる戦闘スタイルを手に入れる（前書き）

笑い猫「今回は凧オンリーデースWW」

刹那「で？内容は？」

笑い猫「題して、凧強化計画！！ついでに刹那も！！だ！」

刹那「俺はついでかよー！！」

笑い猫「スルーしてどうぞー！！」

刹那「こいつ……（怒）」

## 第二十話 凧、新たなる戦闘スタイルを手に入れる

凧「はあああああああ！！！！！」

ボヒュウツ！！ゴツ！！ガツ！！ガツガ！！！！

刹那「ホツ！！ハツ！！セイツ！！！！」

私は今、隊長に体術を教わっている、・・・武器を使ってもあれだけの技量を持っているのに・・・拳でもここまで強いなんて！！

刹那「ほら！蹴りを不用意に放つと足元がお留守だぞ！！」ガツ！！

凧「うわっ！？」

私は足元を払われ、倒れたところを拳を突き付けられ・・・

刹那「ほい、俺の勝ちだな。」

凧「まいりました・・・。」

刹那「筋は悪くはない、だが逆に素直すぎるのが欠点だな・・・戦闘の時は虚実を混ぜなければ、今のように反撃を食らうことになる。」

凧「はい、ありがとうございました。」

刹那「あと攻撃を真正面から受け止めるのではなく、受け流す技術

を付けること、相手の“円”を読むことだ。」

凧「円、ですか？」

刹那「そうだ、円とは、全体を見るということだ。円の中に相手を入れる。その円の中の出来事、瞬きから、息遣いまで全てを見ることだ。」

隊長は指で円を書き、説明する。

刹那「これは武器を使う際も一緒なことだ、これを自分のモノにすることでより戦いやすくなるから覚えておくように。」

凧「あの、春蘭様の場合はどんなんでしょうか？」

刹那「春蘭の場合は・・・あれの場合は・・・本能的にわかってしまっただろう・・・」

凧「・・・そうですか・・・」

隊長「・・・案外ひどいですね・・・」

刹那「まあそれは置いておいて、次は俺の番だな。」

凧「はい、ではまず重心を落として・・・」

隊長が俺の番と言ったのは、氣を私から教わるためだ、なんでも「身体能力だけだとなんか不安だし、それにかっこいいしな!!」らしい・・・

刹那「ふーっ……これでいいか？」

隊長は体全体に吹き出るような氣をまとっていた……

凧「はい、しかしすごいですね……もう氣を自在に扱えるなんて……」

刹那「はっはっは、指導する先生がよかったからな、凧先生？」

凧「か、からかわないでください！／＼／」

刹那「すまんすまん、だがありがとな。」

凧「いえ！私の方こそ体術を教わってますし、お互い様ですよ。」

刹那「そうか、ならお互い頑張ろうな！」

凧「はい！」

刹那「ところで凧、もう一回手合わせ頼めるか？氣の感覚が慣れてきたからそろそろ実践に移りたいのだが。」

凧「そうですね……そろそろよろしいでしょう。氣は慣れないうちは流れを意識するだけで激しく体力を消耗する筈ですが、隊長ならもう基礎は十分ですので大丈夫でしょう。」

刹那「ああ、じゃあそれでは……」スッ

凧・刹那「「お願いします。」」

氣の訓練のためとはいえ手合わせである、これは隊長にとって私に教えた円についてちゃんと活用できているかどうかを確かめる意味もあるだろう……

凧「はあああああああああ！！！！！！」

刹那「ふっ！！はっ！！せいっ！！しっ！！」

ゴッ！！ガッ！！ギガッガッガ！！！！ヒュヒュッ！！ボヒュウツ！！

クツ……やはり隊長は強い！！円を使っても私では勝てないのか「凧！！」っ！！

刹那「凧、氣弾を放つのは攻撃のためじゃなく、自分自身を速くする工夫をしてみな！！」

この言葉に私は思考に沈む……

攻撃以外の氣弾の使い方？自分を速くする？私の氣弾は敵に当たれば爆発してしまう……！！っそうか！！！！

s i d e

刹那

気づいたようだな……氣の扱いは凧から聞いてから思ったことだけどいろいろ応用すればもっと強くなれる、ただそれを使う者が使いこなせるか否かだ。

凧の足に淡い光がこもる……



凧「隊長、行きます!!」

刹那「フツ、来い!!」

ボンツ!!

すると凧の足元が爆発し、突っ込んできた!!そう、凧が考えた工夫とは氣弾の爆発を利用した、ダッシュ戦法・・・威力が大きすぎれば自爆するだけであり、少なすぎればあまり意味がないことである、だが凧は完全にモノにしている・・・毎日鍛錬を欠かさなかった者の努力のたまものである。

凧「フツ!!」

ゴギイイインツ!!!!

刹那「クツ!!」

凧が放つ蹴りを両腕防ぐ!!速度の上がった攻撃は必然的に対処が難しくなる・・・少し言っただけでこれほどとは!!

刹那「はああああ!!!!」

ガキイイインツ!!!!

凧の肘をすくい上げるように蹴り上げる、凧はそのまま浮き上がる、宙で半回転した凧は・・・

ボンツ!!

爆発音と共に急降下してくる風、再び流星の如く俺に迫る！！

ガキイイインツ！！！！

風「ハアアアアアアアツ！！！！」

刹那「グウウツ！！」

俺はガードをすると両腕が吹き飛ばされちまった！！なんて威力だ・  
・

風「まだです！！」

刹那「なっ！？」

ボンツ！！！！

俺がガードしたことによってまだ空中にいた風はさらに気を爆発させ、一回転して蹴りを放つ！！

ドカアアアアツ！！！！

刹那「ぐはっ！！」

もろに蹴りを受け、俺は倒れ、風は着地する……

刹那「あ痛ててて、」

風「大丈夫ですか隊長！？」

刹那「ああ大丈夫だ、しかし凧ここまで扱いこなせるとは・・・」

凧「い、いえ！！これも隊長のおかげです！！ありがとうございます！！  
た！！！」

刹那「俺はきつかけを与えたにしか過ぎないよ、それに俺も氣の扱  
いにも慣れたし、お互い様だ、こっちこそありがとな（ニカッ）」

凧「い、いえ！こちらこそありがとうございました！！／／／」

刹那「それに円をさらに活用することでもっと強くなれるはずだ、  
がんばれよ！！」

凧「はい！！」

こうして、凧は新たな戦い方を手に入れた。

追伸、これを聞きいれた春蘭は刹那に戦いを挑むようになることを  
刹那はまだ知らない・・・

## 第二十話 凧、新たなる戦闘スタイルを手に入れる（後書き）

刹那「ちょっと無茶ぶりすぎないか？俺の設定はチートのはずだが・  
・・」

笑い猫「ふっふっふ、氣を扱えるとさらにふっふっふ・・」

刹那「おい・・・俺をいつたいどうする気なんだ!？」

笑い猫「戦のときに完全チートなるぜwwヒントは・・・  
『剣からビームが!?!?!』という具合に・・・」

刹那「どこのトンデモ人間だよ!?!?!?!?!」

第二十一話 桂花、嫌がらせは空回り それと葛藤？（前書き）

笑い猫「今回は桂花編だ！！」

刹那「俺嫌われてるのだがどうなんだ？」

笑い猫「大丈夫さ、彼女は迷ってるだけさ。」

刹那「はあ？」

笑い猫「とりあえずどうぞー！ー！」

第二十一話 桂花、嫌がらせは空回り それと葛藤？

紅葉「マスターの苦手なこと？」

桂花「そうよ、なにかないかしら？」

紅葉「う〜ん、朝早く起きることとか、水に濡れるとか、お酒をいっぱい飲むこととかが苦手なんだよ。」

桂花「そう、わかったわ。」

紅葉「それにしてもマスターの苦手なことを聞いてどうするつもりだよ？」

桂花「ど、どうもするつもりはないわよ、ただあそこまでいろいろできるから何か苦手なこと一つでもないのか思っただけよ。」

紅葉「ふ〜ん、そうだったんだ。」

私は桂花、刹那の弱点を探すため調査している。

あの男は最近あまりにも目に余る・・・

皆に認められ、華琳さまの貴重な部下を配下にし、あまつさえ華琳さまと親しげに話す。

あの男に吠え面かせてあげると考えたのは数日前のこと。

アイツのことを冷静に考えると、それがどれだけ難しいか思い至った。

欠点が見つからない・・・。

武官、文官としても優秀であり、多芸で、特に歌がうまい……。そこであいつの身近にいる紅葉に聞き込み調査をしている……。青藍の方は気づかれる可能性があるから紅葉に聞いている。

紅葉「・・・と、まあそんなことだよ。」

桂花「そう、それじゃあもう良いわ。」

紅葉「それじゃあバイバイなんだよ。」

そう言つて、紅葉が飛んで行ったことを確認し・・・

桂花「・・・くくくつ、あの男に自分の立場をわきまえさせてやるんだから。」

弱点が分かればこつちのモノ・・・見てなさい刹那!!

明朝・・・

朝早く起きることが苦手なら無理矢理でも早く起こすまで!!

桂花「刹那!!聞きたいことがあるから起きなさい!!」

私は朝早く、刹那の部屋に侵入し無茶苦茶な理由を付けて刹那を起こすことにした、だが・・・

刹那「ふわあ~~~~・・・むにゅ・・・なに~~~~?」「っ、(

桂花「っ!!!/!/」

布団にくるまった刹那が出てくる・・・

桂花「(な、なに!?!この可愛い猫のようなのは!!!/!/!)」

男だと言ってもこの容姿である、髪を下ろせばとてつもなく美人であるが、今の刹那は子猫のような可愛さがある・・・

刹那「んみゆう・・・どうしたの桂花?」

桂花「や、やっぱり何でもないわ!!!もう行くから!!!/!/!/!/」

side 刹那

そう言うともものすごい速さで部屋を出て行ってしまった・・・

刹那「ん・・・なんだったんだ?・・・まあいいや・・・もう少し寝てよ・・・ぐうゝzzzz」

side 桂花

はあ・・・はあ・・・クツ!失敗したわ・・・  
あいつ本当に男なのかしら?なんであそこまで可愛いのも!!  
でもあの猫のようなしぐさ/!/・・・思い出しちゃだめ!!

桂花「あいつは男よ!!!つ、次の手を考えないと・・・」

.....



- - -  
- - -  
- - -

チャプ・・・チャプ・・・

桂花「くくくつ、今度こそは・・・」

水に濡れることが苦手なら偶然を装ってこれをぶち待てるわ・・・  
見てなさい！！

桂花「よいしょつ、ふう、少し多すぎたかしら？さすがに重いわね・・・」

大きめの桶に水を入れて刹那を探してるけど、どこにいるのかしら？  
うん、とぶつぶつ呟きながら唸っているせいで後ろにいた存在に  
気づくことはできなかった・・・

side 刹那

ん？あれは桂花？水の入った桶をもって何してんだ？

近づいて見ると何かぶつぶつ言ってる・・・耳を傾けてみると・・・

桂花「ぶつぶつ・・・刹那・・・どこに・・・水・・・重い・・・」

どうやら俺を探していたみたいだな・・・しかも後ろにいらぬことす  
ら気が付いてないな・・・

よーし（ニヤリ）

スウ〜と大きく息を吸い込み・・・

刹那「桂花！！！！！！」

桂花「ふひゃあああ！？！？！？！？！？」

後ろから叫んで脅かしてやったのがまちがいだった・・・

なぜなら、桂花は驚いた拍子に水の入った桶を空中にぶちまけてしま・・・

俺と桂花は仲良く水をかぶった。

side

桂花

もうっ！！最悪だわ！！！！この馬鹿が脅かしてきたせいで桶を投げちゃったじゃない！！！！

おかげでずぶ濡れ・・・

桂花「もう！！何してくれんのよ！！！！おかげでずぶ濡れ・・・ッ！！！！」

刹那「あはは、悪い悪い、ん？どうした？顔が赤いぞ？」

桶が当たったせいか、髪飾り（旅や戦闘以外は髪結びではない）がとれてしまっていて髪を下りてしまっていた・・・

服が体にびったりくっ付いてしまって体の輪郭があらわになり、濡れてしまったせいで髪はいつもよりその艶を増していた・・・今の彼女（男だと忘れてる）もはや芸術としか言えようもないほど美しかった・・・

桂花「なんてきれいな・・・」

刹那「え？」

桂花「え！？え、あ、な、なんでもないわ！！／／／」

刹那「お、おい！！！」

桂花「なんでもない！！なんでもない！！い！！！！／／／」

私は思わずそこから逃げ出してしまった。

私は一体何口走つてのよ！！あれは男！！女じゃなくて男！！でも、本当にきれいだった・・・はっ！！考えちゃダメ！！

side

刹那

・・・ポツン・・・

桂花が去った後も俺はポツンと立ちすくんでいた・・・

刹那「・・・残った俺だけで後片づけしないとならんのか・・・」

桂花が去った後に残ったのは、水び出しの廊下とずぶ濡れになった俺だけが残った・・・

俺は仕方なく一人でその場を片づけることにした、しかし疑問だ・・・なぜ兵や侍女たちが俺を見ると赤らめて逃げる？

この日、城の中にずぶ濡れの美しい女がいるという話が引きつ切りなしにかけ走ったとか何とか・・・

華琳はこの話を聞いて「何としても探し出しなさい。」と命令を出したとか・・・

ついでに桂花はこれ以降、なにか葛藤する桂花がよく見られるようになったとか・・・ぶつくさ言っているのを聞いてみると「あれは男じゃ・・・でもあれだけきれい・・・美しい・・・でも男・・・」とか何とか・・・ちなみに俺に酒をたくさん飲ませた後もこれがさらにひどくなったらしい・・・

第二十一話 桂花、嫌がらせは空回り それと葛藤? (後書き)

桂花「アレハオトコ、オンナ、オトコ、オンナ、オトコ……」

笑い猫「おーい!!!……だめだ……すでに末期か……かわいい  
そうに。」

刹那「かわいいそうにじゃねえ!!!どうすんだよこれ!？」

笑い猫「うーん……めんどくせえから放置(キラツ)」

刹那「キラツ じゃねええええええええええええええええええ!!

!!!!!!」

第二十二話 人が寝てる時にいらぬことをしゃべるべきではない(前書き)

笑い猫「最悪だ・・・」

刹那「どうした?」

笑い猫「テストと実習が重なっちゃまってんだよ!!!」

刹那「そうか・・・頑張れ(笑)」

笑い猫「(笑)じゃねえ!!というわけでしばらく休載します。」

刹那「なに!?!じゃあ俺の出番は!?!?」

笑い猫「しばらくを預けた・・・下手すれば2、3ヶ月くらい・・・」

「

刹那「ちくせう・・・」

## 第二十二話 人が寝てる時にいらぬことをしゃべるべきではない

刹那「ここにもいないか・・・」

現在俺は、仕上がった仕事を華琳に見せるべく、城の中を探し回っている。

これを渡せば今日の仕事は終わることもあり、早く済ませたいのだが・・・。

刹那「いったいどこにいるんだいったい・・・」

桂花「どうしたのよあんだ？」

刹那「ん？ああ、桂花か、すまないが華琳を見てないか？」

桂花「誰があんたになんか教えるもんですか！そこらへんでも這いずりまわってお探しなさい。」

その口ぶりだとどこにいるか知ってるようだな、だが知っても教える気はないか、しかたがな・・・

(バサッ)

俺は髪結びを解き・・・

刹那(美)「もう一度聞く、華琳はどこにいる？」

桂花「え、あ、向こうの庭でお休みになっています／＼／＼」

この姿になるとこいつ素直になるな・・・俺が思うにこいつ俺を髪





・・・はぁー、やめやめ、いたずらはやめ、したらどんな目に会う  
かわかったもんじゃない。

side

華琳

華琳「・・・・・・・・・・」

どうやら起きたことに気づいてないようだ。

華琳「(どうして、私寝たふりしてるのかしら?)」

自分でも分からないまま眠ったふりをする・・・

刹那「・・・こうしてみると、ただの女の子なんだがな」

「(ちょっと!ちょっと・・・)」

刹那が私の髪に触れてきた。人が寝ているのをいい事に何してるの  
よ!?

刹那「だが、実際にはこの肩に色々なものを背負っているんだよな  
・・・」

そんな私の気持ちなど露知らず、頭をなでてくる刹那

華琳「(・・・私が頭をなでられるなんて何時以来かしら?・・・)」

「  
・・・はっ!!--この曹孟徳ともあろう者がされるがままだなんて・・・

刹那「やれやれかわいらしい寝顔だ・・・」

華琳「（な！？／＼／＼）」

急に何を言っているのこの男は！?!？

華琳「（かあゝゝゝ／＼／＼）」

刹那「ん？何か顔が赤いような？気のせいかな？」

私も私で何赤くなってんのよ！！生娘じゃあるまいし！！！！

刹那「・・・しかし、これからが大変か・・・霸道歩む者、人の和を大切にする者、己が祖先の土地を取り返し、守ろうとする者・・・全員の目的は天下統一、民の安寧、か・・・」

！！・・・霸道を歩む者、これは私のことね・・・ほかの者に関しては何わらないけど・・・

刹那「三本の矢を一つに・・・現実にするのは本当に難しそうだ・・・」

三本の矢を一つに、いったいどう言う意味なの？いったいあなたは何をしようというの？

刹那「・・・フツ、何弱気になってんだか・・・正しいことなんてどこに見ない、ただ自分を信じて前に進むしかない・・・気に入らない現実があるのなら自分の気に入る方に変えちまえばいい、俺は俺で納得のいく終わり方を目指せばいい、そう思えたからこそ、俺

は『歌』にすべてを刻んだんだろうが……。」

貴方は、いったい何をしようというの？ 貴方の納得のいく終わり方  
って……

刹那「だが今は守らせてもらうぞ、華琳。」

華琳「あら、それはあなたが私のモノになってくれるということか  
しら？」

限界だった……これ以上は聞いてはいけない、そう思い今起きた  
ふりをする。

刹那「！？ 華琳、起しちまったか？」

華琳「あれだけ耳元で騒がれば目が覚めるのは当然でしょ？」

刹那「あく確かに……すまん。」

華琳「別にいいわ。それで……用は何？ まさか何も無いのに起こ  
したわけじゃないでしょう？」

刹那「ああ、昨日の夜頼まれてた仕事が終わったんでな、これなん  
だが。」

そう言って刹那は私に竹簡を見せる……フム、

刹那「どうだ？」

華琳「……ええ、いいわよ、確かにこっちの方が良いわね、採用

させてもらっわ。」

刹那「そうか、ならよかった、休んでいる時に悪かったな。」

華琳「別にかまわないわ、でも目が覚めてしまったわね……」

刹那「そうか、なんだったらもう一度眠れるように子守唄でも一曲  
どうだい？」

この男は……

華琳「それは私が子供だって言いたいの？」

刹那「まさか、ただ華琳に安らかな良い眠りを、って思ってな、ま  
あ悪いもんでもないと思うぞ？」

華琳「……はあ〜言っても無駄なようね……まあいいわ聞かせ  
てくれる？」

刹那「フツ、喜んで……」

青藍「なら準備します。」

紅葉「すぐに用意するんだよ〜。」

刹那「おまえら、どこからわいてきやがった？」

青藍「ノーコメントという方向で。」

刹那「……。」

どこから出てきたかわからないけど、テキパキと準備を始める二人・  
・準備が終わり、刹那は琵琶に似たような物（ギター）を弾き、  
歌を歌い始める・・・

刹那「では、たった一人の観客の少女に安らかな眠りを・・・」

【アイモ〜鳥の人〜】

【アイモ アイモ

ネーデル ルーシェ

ナイナ ミリア

エンデル プロデア

フォトミ

ここはあつたかな海だよーー】

とても美しい、綺麗な歌だった・・・

それは心安らぐ歌だったが、どこか哀しそうな歌だった・・・

華琳「（良い歌ね・・・）」

私は瞼を閉じ、歌に身を預け、眠りへと向かう・・・

第二十二話 人が寝てる時にいらぬことをしゃべるべきではない（後書き）

刹那「おい、もう少し歌のどこ詳しく書けねえか？」

笑い猫「文才がないから上手に書けん・・・努力します・・・」

刹那「精進しろ・・・」



## 第二十三話 凧もチートになるかも？お菓子製造人間？

・・・ビュウッ！！ビュンッ！！シャシャッシャッ！！

刹那「フッ！ハッ！ゼイツ！！」

今日は休日だったから朝から鍛錬をやっていた。

刹那「ふー・・・後もう少しだな、これが完成すれば、ふっふっふっ・・・」

朝から鍛錬をしていたのは新しい技の開発のためだ。凧との鍛錬のおかげで氣を完全に扱えるようになり、放出系、身体強化、氣を使った治療（傷を塞ぐことのみ）などができるようになったため、新しい技の開発に取り掛かっていた・・・

刹那「凧にはほんと感謝だな、しかし・・・へたすりゃ凧もチート人間の仲間入りだな・・・」

なぜかと言うと凧の新しい戦いのスタイルを見て、俺は思いつきで凧に技を教え込んでみたら・・・

刹那「まさか速攻でできるようになるなんて・・・ある意味人間爆弾攻撃になるな「刹那ーーーー！！」ん？」

あれは・・・春蘭？

刹那「おーーーーい！俺はここだー！！」



春蘭「おお！ここにいたか！！刹那！力を貸せ！！」

かなり興奮してるな、

刹那「そんなに必死になると言う事は・・・華琳がらみの話か？」

これまで、この状態の春蘭に色々振り回されたからな。

春蘭「違う！秋蘭が・・・秋蘭が大変なのだ！！」

刹那「・・・は？」

秋蘭が大変？いったい何が！？

刹那「わかった、すぐ行こう！案内してくれ！！」

春蘭「うむ！私に付いて来てくれ！！」

春蘭の後に続き走る。敵に襲われたのか？それとも急病か？チツ！  
無事でいてくれよ秋蘭・・・

-----  
-----  
-----

春蘭の案内でたどり着いたのは一件の店だった。大勢の人が列を作り、それが店の中まで続いている。そしてその中には・・・

秋蘭「おお、速かったな姉者。」

ズシヤアアアアアア！！！！

俺はずっこけた、なぜなら何も大変そうでない秋蘭が立っていたからだ……

春蘭「お、おい……どうした刹那？」

刹那「おい……これどういうことだ？」

秋蘭「どうかしたのか刹那？」

刹那「秋蘭が大変だ、って聞いてきたんだが……」

秋蘭「そうか、だが私はこの通り元気だよ」

刹那「だよなあ……」

見ればケガは無いし、苦しそうでも無い。

刹那「どう言うことかな？しゅ・ん・ら・ん？（ニッコリ）」

俺は最大級の笑顔で春蘭に聞いてみる、ただし、少し怒気も込められている……

すると、春蘭は少しうるたえた様に……

春蘭「わ、私は秋蘭の言った通りにしたただけぞ！そ、そうだろう秋蘭！？」

秋蘭「そうか……私の言った通りにしたのだな姉者は……」

秋蘭・・・ホントいい性格してるよ・・・

刹那「はあく・・・まあ、何もなかったんだったらよかった。それじゃあ俺はこれで・・・」

俺はその場を後にしようとしたのだが・・・

ガシッ！！x2

秋蘭「おっと、説明するからな」

春蘭「逃がさんぞ！大人しく一緒に並べ！！」

そのまま二人につかまれ拉致られた・・・

刹那「つまり？滅多に入らないお菓子を華琳の分も買いたいから一緒に並んで欲しい、と？」

二人が頷く、やっぱり華琳に関する話だったか。

春蘭「うむ！この菓子は華琳様の大好物だからな、今日のお茶の時にぜひともめしあがって頂きたく思ってたな！」

秋蘭「しかし、華琳様をこのような列に並ばせるわけにはいかないのではな、非番のお前を呼んだのだ。」

刹那「それにしたって呼び方ってもんがあるだろうが・・・春蘭があんな言い方するから心配したぞ。」

春蘭「うっ……」

秋蘭「ほう、心配してくれたのか？」

刹那「当たり前だ。仲間を心配しない奴がどこにいるんだよ。」

秋蘭「フツ、すまなかったな。」

刹那「しかし……俺じゃなくて女性を呼んできた方がよかつたんじゃないかねえか？」

見れば並んでいるのは女性ばかりで、男性の姿は俺を含めて数人しか見えなかった。

秋蘭「それについては大丈夫だ。」

刹那「？どういうことだ？」

秋蘭「こうすれば。」《バサツ》

そう言つて秋蘭は俺の髪結びを解く。

秋蘭「これでどこから見ても女にしか見えないから大丈夫だ。」

刹那（美）「何が大丈夫だよ！？俺は男だぞ！！」

春蘭「心配するな！私は気にしない！」

刹那（美）「俺が気にするわ！！」

秋蘭「すまないな、少しだけ我慢してくれ。」

刹那（美）「むう……」

春蘭「だ、駄目か？」

春蘭が不安そうな顔で聞いてくる……くう、そんな顔で頼みやが  
つて……

刹那（美）「はあ、わかったよ、わかったからそんな不安げな顔で  
俺を見るな。」

途端に笑顔になる春蘭。

春蘭「よし！それでこそ華琳様にお仕えする者だ！！」

刹那（美）「俺は客将なんだが……」

春蘭「はっはっは！細かい事は気にするな！」

秋蘭「助かるぞ刹那」

刹那（美）「まあ……あんな顔されたら断れんだろう……」

秋蘭「ふっ……確かにな。」

そしてその後……

秋蘭「無事に買えてよかったな姉者。」

春蘭「ああ！これで華琳様もお喜びになってくださるぞ！！」

秋蘭「それは何よりだが、せっかく買ったのだから転ばぬように気をつけるのだぞ。」

お菓子を購入し上機嫌に歩く春蘭。秋蘭の注意も聞いていないようだった。

刹那「すごい変わり様だ・・・」 髪を元に戻した

秋蘭「姉者は華琳様が絡むと大抵ああなるぞ。」

刹那「なるほど・・・」

春蘭「刹那！お前のお陰で助かった！礼を言っぞ！！」

刹那「あ、ああ・・・」

春蘭が俺に礼？

刹那「・・・俺が春蘭にお礼を言われるとわな・・・」

秋蘭「今の姉者は素直だからな、自然に出たのだらう。」

刹那「そうか・・・」

確かに素直、ねえ……と、思いふけっっているその時、

ガラガラ!!

春蘭「うわ!!」

いきなり聞こえて来た春蘭の声と大きな音に目を向けると、そこには転んでいる春蘭と去って行く馬車が見えた。どうやら春蘭の前方不注意で馬車にぶつかりそうになり、慌てて避けようとして転んでしまったようだ。

刹那「春蘭!!」

秋蘭「大丈夫か姉者!？」

急いで春蘭に近づくと、

春蘭「あ……ああ……」

呆然とした春蘭の声がした。見ればお菓子の入っていた袋が彼女の目の前で潰れていた。

刹那「あちゃあ……」

秋蘭「だから気をつけると……」

春蘭「うう……あ……ああ……」

かなりのショックを受けている様子の春蘭……とりあえず立たせ

ないと、と思い手を差し出す。

刹那「おい春蘭、大丈夫か？」

だが春蘭は反応せず、目に涙を溜め出し、そして・・・

春蘭「う、うわああああああん！！！！」

刹那「うおっ！？」

春蘭は大声で泣き出した。

春蘭「うわあああああん！！せっかく・・・せっかく華琳様の為に買ったのにいいいい！！！！」

秋蘭「やれやれ・・・今回は諦める姉者。そこまで潰れてしまっただけだ。」

随分慣れた様子で春蘭を慰める秋蘭。

秋蘭「今日は運が悪かったただけだ。また今度買いに来よう」

春蘭「しゅ、しゅうらん・・・」

秋蘭「よしよし・・・刹那、協力してもらって悪いが次も頼んでいいか？」

秋蘭「ひっく・・・えぐ・・・せ、せつなあゝ・・・」



刹那「それはもちろんいいが・・・」

本当にこれでいいのか？今回の華琳とのお茶会をとて楽しんでしまっていたのは今の彼女を見れば一目瞭然だ。そんな彼女をこのまま帰らせていいのか？

刹那「はあ・・・」

仕方ない・・・

刹那「なあ秋蘭、落としたお菓子に泥が付いてないヤツはあるか？」

秋蘭「ん？ああ、ついてない物もあるがそれがどうした？」

刹那「そいつは良かった、それを貸してくれ」

秋蘭「？」

疑問に思いつつ秋蘭は俺に落としたお菓子の袋を渡す、そして俺は袋の中から泥の付いていない形の崩れたお菓子の欠片を摘み、食べた・・・

秋蘭「刹那・・・意地汚いぞ・・・」

刹那「ちげーよ、味を確かめたただけ・・・形もさっき買ったときに見たし、味も分かった。」

そう言いながら春蘭に近づくと、

春蘭「うっ……ぐしゅ、せつなあ……」

刹那「安心しな春蘭、さっきのお菓子と同じヤツならなら……」

春蘭の目の前に出した握り拳を開くと、

刹那「ここにある。」

二人「な!?!?」

驚くのも無理はない、なぜなら俺の手の上にはさっきとお菓子が出てきたからだ……

春蘭「あ?せ、刹那!なぜ手からお菓子が!?!私は落としてしまったのに!?!」

刹那「落ち着け、春蘭。こいつは俺のコピー、複製能力で出したお菓子だ、味や形が分かったから同じヤツ出せる……」

秋蘭「複製……なるほど、だからさっきわざわざ落ちたやつを食べたのか……」

刹那「そう言うことだ。」

さすが秋蘭、理解が速くて助かる。

春蘭「????ふくせい?なんだそれは?」

・・・さすが春蘭、全然わかってないな・・・

刹那「つまり天の御使いの能力で出したというわけだ。」

春蘭「難しい言い回しをせずに最初からそう言え。」

刹那「・・・」

全くこの子は・・・

刹那「はあく、まあ何にせよ、これで華琳とお茶ができるだろ？」

春蘭「刹那！恩に着る！本当にありがとう！！」

刹那「気にするな、泣き止んでくれてなによりだ。」

春蘭「秋蘭、今度はお前が持っていてくれ。また私が持って転んではいけないからな。」

秋蘭「ふふっ、そう言う事なら遠慮なく持たせてもらおうか。」

刹那「それじゃあ俺は失礼するよ。華琳とお茶、楽しんでくれ。」

俺は疲れたから帰ろうとしたが・・・

ガシッ！

春蘭「ちよつと待て刹那！せっかくだ、お前も華琳様と一緒にお茶をしないか？」

刹那「へ？俺もか？」

秋蘭「良いのか姉者？」

春蘭「秋蘭、刹那がいればいくらでもこのお菓子が食べられるではないか！」

・・・こう言うところだけ頭が回るな・・・お菓子は別腹か。

刹那「・・・確かにいくらでも食えるかもしれないが・・・食べ過ぎてしまえば太るぞ？」

ピシッ！！

春蘭「刹那・・・」ジャキッ

秋蘭「いい度胸だ」チャキッ

二人はそろって武器を構え始めたが、

刹那「まあ、おまえらはそんだけ美人なんだから気にする必要性はねえだろうがな。」

「ッ／／！！」

刹那「ん？どうした？顔が赤いぞ？」

春蘭「い、いや！なんでもない！！（び、美人／／／）」

秋蘭「ああ、そうだ。（悪くはないな／／／）」

刹那「????」

だったらなんで顔が赤いまなんだ？

この後、華琳たちと一緒にお茶を楽しんだ。その際、色々なお菓子を出すと華琳に城のお菓子係に任命されたとか何とか・・・俺はお菓子製造人間か・・・

第二十三話 凧もチートになるかも？お菓子製造人間？（後書き）

笑い猫「やべっネタがやばい！！というわけで更新スピードが遅れますテストとかまだ終わってないし」

刹那「お前バカだろ！！！」

笑い猫「やかましい！！衝動書きじゃあああああ！！！！！」

第二十四話 俺と季衣は役に立ったぞ!! (前書き)

笑い猫「どっひゃあああああ!?!?!?!?」

刹那「いきなり奇声など上げてどうした?」

笑い猫「びっくり仰天ホンゲケキョウ!!ふたを開けてみるとアク  
セス件数が30万も越えてやがった!!!」

刹那「古いなおい、ってええええええええ!?!?!?マジか!?!」

笑い猫「俺嬉しすぎて涙チヨチヨ切れてまうでええええ!!!」

刹那「だから古いつつの!!!」

笑い猫「皆様ありがとうございます!!これからもがんばります!!  
そんなこんなで今回の投稿、どうぞ!!」

刹那「またスルーかよ!?!もはやこのポジションで固定されたのか  
よ俺!!!」

## 第二十四話 俺と季衣は役に立ったぞ!!

刹那「脱走兵？」

季衣「そうなんだよーこのところ多くて・・・」

春蘭「まったく！情けない連中だ！！あのくらいで逃げ出しよつてからに！！」

まあ脱走兵一人出たらそれにつられてほかの奴も逃げちまうようになるわなあ、数が減りすぎたらそれは困るわな・・・

刹那「どのくらいの調練をしていたんだ？」

季衣「えーっと春蘭様と打ち合ったり、走り込みで百里位走り込んだり、ずっと隊同士で打ち込み続けたりを丸一日・・・」

刹那「明らかにやりすぎだ！！そんなもん逃げる奴がいて当たり前だろ！！！！」

春蘭「何を軟弱なことを言っているこのくらいできて当然だろ！！！！」

刹那「このくらいって・・・じゃあお前らできんのかよ!？」

春蘭・季衣「「できる!!」(よ?)」

刹那「・・・まじかよ・・・」



こいつら・・・本当に人間なのかどうか疑いたくなる時があるな・・・  
つーか百里だぞ!? 四百キロも完走できるもんなのか!?

刹那「ま、まあ何にせよ、脱走兵が出るんだつたら調練を少し軽く  
してみたらどうだ?」

春蘭「それはできん! そんなことをしてしまえば弱い奴ばかりにな  
ってしまうではないか!!」

刹那「きつい調練ばつかやって兵が一人もいなくなつたらそれこそ  
問題だろ。」

季衣「えー、僕は大丈夫だつたけどなー。」

刹那「自分を基準にして考えるもんじゃありません。自分が大丈夫  
でもほかの奴は大丈夫じゃなかったりする時もあるんだぞ。」

春蘭「調練を軽くするか・・・むうう・・・」

刹那「それか褒美を考えるとか。」

季衣「褒美?」

刹那「そう、ここまでできた者に褒美を与えるとかしたら少な  
くなんじゃねえか? 要するに飴とムチだな。」

春蘭「褒美と言ってもそれほど財政に余裕はないぞ、刹那。」

!? 春蘭がまともなことを言っているだど!? 季衣も目を丸くして  
る・・・

春蘭「・・・何か失礼なことを考えなかったか？」

刹那「キットキノセイダヨー。」

春蘭「だったらなぜ貴様は片言になっっている！！」

刹那「まあまあ、それよりいい考えがある、それはな・・・」

-----

あの後、俺の提案で褒美を与えるよう政策をとった。褒美となる物は真桜が作ったカメラで撮った春蘭の涙目の猫になった写真やら桂花の変態恍惚の笑みを浮かべてる写真やらが配られることになった。興味のない奴ら（ごく少数だったが）には俺の手料理、天の国の料理を配ることになった。ここまではいい、だが・・・兵士たちが一番欲しがってる写真がまさか・・・

刹那「・・・季衣だったとな・・・」

ここの兵士って意外とロリコンが多かったんだなあ、男どものエロパワーで逃げ出すやつはかなりいなくなっただな（というかなぜ桂花や春蘭たちは悔しがってたんだ？）・・・まあ当然の本人（季衣）はわかっていないからいいモノの・・・

刹那「提案するんじゃないかと思ったかもなあ」「あら、刹那じゃない。」「ん？」

思いふけつてしていると後ろから華琳と季衣がやってきた。」「

華琳「何をぼーっとしていたの？」

刹那「ああ、ちょっと前に出した脱走兵についての案でちょっと考え事をしてたんだ。」「

季衣「それって前の春蘭様と話してたやつなの？」「

刹那「ああ、それより華琳たちは開墾する土地の下見じゃなかったっけ？」「

華琳「それは今から行くところよ。そうねえ……ちょうど良いわ、刹那もついてきなさい。」「

刹那「え？俺もか？」「

華琳「ええ、なにか天の知識で役に立ちそうなことがあるかもしれないからよ。」「

刹那「……まあ俺は非番だからいいぞ。」「

季衣「わーい 兄ちゃんも一緒だ！」「

華琳「なら行きましょう。」「

移動途中

く街の大通りく

「あ！御使いのお姉ちゃんだー！！」

「お姉ちゃーん！またお歌歌ってー」

「お姉ちゃーん あそぼー」

刹那「だー！ー！！だから俺はお・に・い・ちゃ・ん・Da！！  
お姉ちゃん言うーな！！！！」

「「「お姉ちゃーん！！！！」」」

刹那「こんちくしょおおおお！！！！」

このガキども・・・どんだけ教えても俺をお姉ちゃんなんていいや  
がる！！ちくせう・・・

華琳「・・・すごい人気ね・・・」

刹那「ああ・・・たまーに街で紅葉たちと歌ったりこいつらと遊ん  
だりしてたらいつの間にな・・・」

華琳「そうなの？そう言えばその二人は？」

刹那「あいつらか？あつちだ・・・」

俺が指さす方向には・・・

紅葉「ほらほらー オー二さんこっちらー手のなるほーうえー」

「待て待てー」

青藍「貴方は右から攻めなさい、その貴方はあそこで待ち伏せして・・・」

「了解しました！隊長！！」

紅葉「子供たちが軍兵みたいになってる！？青藍！策を使うのは原則なんだよ～～！！」

青藍「うふふ・・・紅葉？戦いとは非情な物ですよ・・・」

紅葉「うにゃ～～～～！！？！！？」

刹那「あんな感じで遊んでおります・・・」

華琳「・・・青藍は策も立てられるの？」

刹那「たまーに俺の所有している戦略の本やら蔵にある孫子とか読み漁ってたらいつの間にな・・・言っておくがまだ使えもんにはならんぞ？」

華琳「そう・・・（チツ）」

この子舌打ちしましたよ！？華琳・・・恐ろしい子！！

季衣「ふえ〜〜兄ちゃんたちってやつばすごいんだな。」

刹那「！？季衣！今何て言った！？」

季衣「え！？兄ちゃんたちはすごいって。」

こ、この子ったら《ぶあっ》

刹那「うおおおー！ー！ー！ー！季衣！ー！俺をお兄ちゃんって言うてくれてありがとー！ー！ー！ー！ー！《がばー！ー！ー！》」

季衣「わああっ！ー？兄ちゃんどうしたの！？」

刹那「俺を男だと判別してくれた歡喜余ってつい・・・」

華琳「（イラッ）そこで遊んでないでさっさと行くわよ！ー！」

季衣「あっ、は、はいっ！ー！」

刹那「お、おう。」

華琳「（あれ？なんでわたしこんなにいらついでるのかしら？）」

刹那と季衣がじゃれあってたら何かムカムカしてきて・・・

刹那「？華琳どうした？」

華琳「なんでもないわ。」

まあいいわ、早くいきましょう。

到着　　↳開墾予定地↳

華琳「ここがそうよ。」

刹那「ここか・・・範囲はどのくらいなんだ？」

華琳「ここから見える範囲全部よ。」

刹那「へえ、結構広いな。」

ふむ・・・荒れ果てているが土の素質は良いし山から水路を引けば水不足になる心配もそうそうないだろうな・・・

刹那「このくらいならそうだな・・・二百件くらいは堅いと思うぞ。」

季衣「僕も大体そのくらいだと思うよ兄ちゃん。」

刹那「ん？季衣もわかるのか？」

季衣「うん、僕の村では農業もしていたからね。」

刹那「そっか、それでか。まあ大体わかったことだし後は帰ってー、ん？」

華琳「どうしたの？」

刹那「なあ、こういった岩とかどうすんだ？」

俺が見つけたのは俺の身長のおよそ2、3倍くらいある大きな岩だった。こんな岩があればここを開墾するのにとても邪魔になるだろう。

華琳「そうね・・・刹那何かいい案はある？」

刹那「そうだなあ・・・これだけ大きな岩を動かすとなると一苦労だなあ・・・」

これだけ大きいとなるとそうだなあ

刹那「爆破、あるいは城壁の材料にする、って言うのはどうだ？」

華琳「爆破は無理よ、火薬はあるけれど、こんな岩壊すのにどれだけ予算を使うつもり？それと城壁の材料にしてもこれだけ岩肌がごつごつしているものをどうするつもり？」

まあ普通はそうだな、城壁に使うにしても今のままじゃ使えないわなあ。

刹那「そこら辺は任せな、季衣、手伝ってくれるか？」

季衣「いいけど、どうするの？」

刹那「ああ、ちょっと・・・な。」

俺は岩の上に乗る、投影の能力でいくつかの釘（大体俺の膝くらいある）だして・・・



刹那「季衣、この釘をお前の岩打武反魔いわだむはんまで打ち込んでくれるか？」

季衣「うん、わかったー。」

俺は季衣にくぎを打ち込んでもらい、打ち込んだ釘の上にまた同じ釘を打ち込む、すると・・・

ピシッ！・・・バカン！！

岩が真つ二つに割れたのであった。

刹那「これでよし、季衣ありがとな。」

季衣「えへへー どういたしまして。」

刹那「あとはゆっくり削ったりして行けば使えるだろ？華琳？」

華琳「ええ、確かにそうね。じゃあほかにもあったからそつちもお願いな。」

刹那「りょーかい。」

その後には似たようなことを繰り返した。大きすぎる奴なら二回、三回に分けてやればすぐに割れるので問題ない、だが最後に見つかった奴は・・・

華琳「これはできるかしら？刹那。」

刹那「・・・さすがに大きすぎて無理だろ。」

最後に見つかった岩は小山くらいの大きさはあった。さすがにこれはな……

刹那「さすがにここまで大きいとなると無理だろ……これは壊すしかないな……」

俺は大槌を出して岩の前に立つ。

刹那「季衣、岩打武反魔<sup>いわだむはんま</sup>で反対側から叩いてくれるか？」

季衣「いいよ。」

そう言つて季衣は反対側に立つ。これで準備完了。

刹那「季衣！せーのでいくぞ……」

季衣「うん……」

刹那・季衣「せーの……！！うおおおおりゃあああああ……！！！！！！」

ドカアアアアアアアアアアアアアアアア……！！！！

俺と季衣の渾身の一撃は岩を見事粉碎した……

刹那「ふ……これでもうないな？」

華琳「ええ、二人ともよくやったわ、さすがね。古の猛将、樊カイにも劣らないわ。」

刹那「そりゃあどうも。季衣助かったぜ。」

季衣「えへへー」

華琳「なら、頑張った貴方達にはご褒美を上げないとね。」

季衣「ほんとですか？やったあ！」

刹那「いい！？」

まさか・・・桂花や春蘭たちに行っているようなことか！？

華琳「そうね。今日はここに泊まりだから夜に私の部屋に来るといわ。」

季衣「はい。」

元気良く返事をする季衣・・・まずい！！俺は即座に華琳に近づく

刹那「なあ華琳、いったいどんなご褒美をするつもりなんだ？（ボソボソツツ）」

華琳「あら、貴方は期待でもしているのかしら？（ボソボソツツ）」

刹那「か、からかわないでくれ、でどうなんだ？（ボソボソツツ）」

華琳「安心しなさい、ただ料理を振舞うだけよ。（ボソボソツツ）」

刹那「そっか。」

ふー、ほつとした。そうだな、いくら華琳でもそこまで節操のない真似はしないよな。

華琳「何か失礼なこと考えなかった？」ジャキッ

絶を俺の首に当てる華琳。どっから出しやがた!?

刹那「イエイエ、キットオモイスゴシナンデスヨー」

怖ええよ!!なんでわかつたんだ!?

華琳「だつたらいいわ。」スッ

ふー・・・思っただけで一苦労だな・・・今日は良いため息をつく日だ。

華琳「季衣のこの時は、まだ蕾にもなる前の・・・千金でも賄えないほどに貴重な時間よ。それを無理に開花させようだなんて、無粋の極みよ。」

刹那「・・・確かにそうだな、すまん。おれの思慮が足りなかった。」

華琳「わかればよろしい。」

季衣「華琳様ー！兄ちゃん！早く行きましょー!!」

華琳「ほら、早く行くわよ刹那。」

刹那「ああ。」

その後、夜部屋で華琳の料理おいしく頂いた。・・・マジでうまかったよ・・・華琳の料理。

第二十四話 俺と季衣は役に立ったぞ!! (後書き)

刹那「今回はあまり問題ごとなかったな。」

笑い猫「オオアリや・・・」

刹那「な、どこかまずかったか?」

笑い猫「呉での話が短すぎた・・・失敗したわ。」

刹那「それは貴様に文才がないせいだ!!!!」

笑い猫「(ドグザアアアアアア)ぐっはああああああ!!!!」

第二十五話 見よ！これが風の**新必殺技**！！ 三羽鳥と褒美の為に！！（前書き）

笑い猫「ふははははははははは！！！！今回は風の**新・必殺技**編だ！！」

刹那「まともなもんだったらいいが・・・」

笑い猫「安心しなさい・・・心配せずともパクリだから」

刹那「うおおおおおい！！！！」

笑い猫「あ、それと風の**新必殺技**は五つ中二つはオリジナルだから」

刹那「・・・風が改造されていく。」

ああ・・・なぜだろ・・・どこかで風が「隊長おおおおお！！！！」と俺に助けを呼ぶ声がするよ・・・

第二十五話 見よ！これが凧の新必殺技！！ 三羽鳥と褒美の為に！！

刹那「ふあああ〜・・・平和だなあ・・・」

凧「気を抜きすぎですよ隊長。」

刹那「良いじゃないか、それだけ街が平和ってことだろ？なあに、いざと言う時は気を引き締めるさ。」

俺と凧は警備で西側を巡回していた。前々からいろいろな案を出していたおかげで犯罪件数は減り、物の流通が良くなったおかげで街は活気が出ておりとても過ごしやすいようになっていた。

刹那「しっかしこう言う時つくづく感じるな、平和が一番ってことをよお・・・」

凧「そうですね・・・これも隊長のおかげですね。」

刹那「俺か？いやいや、この平和を維持していられるのは警備隊みんなのおかげさ、俺はただ提案しただけにしかすぎんよ。」

凧「しかしそれがあつたおかげで街は過ごしやすいになりました。これはまぎれもなく隊長のおかげですよ。」

刹那「そうかい、だがこの目の前の平和を維持することこそが難しいと思っっているよ。この平和を維持するのはまぎれもない警備隊のみんなですることさ、この平和を維持できているのは皆のおかげさ。」

「



そうである。街を守ろうとすれば一人では守ることはできない、だが、みんなでやれば守ることができるのである。

刹那「華琳が国の先を切り開くのであれば・・・今の俺たちは華琳の膝元を守ることだ、そうだろ凧？」（ニカッ）

凧「（ぼー）は、はい！！／／／」

フツ良い返事だ・・・しかし何で顔が赤いのかねえ？

刹那「さーて、警備の続きだ。」

凧「わかりました。」

そう言つて次の区へ移動するため角を曲がると・・・

刹那「・・・」

凧「？隊長、どうかしました・・・か・・・」

凧もそれを見て言葉を失う、そこには・・・

沙和「・・・あ、阿蘇阿蘇で新しい服が載つてあるの。ねえねえ、真桜ちゃんは買ってみないのー？」

真桜「・・・うち今月は、夏侯惇將軍の為にお金おいとかなあかんからなあ・・・残念やけど諦めるわ」

沙和「真桜ちゃん・・・その言い方だと世間にあらぬ誤解を生むからやめておいた方がよいのー。」

テーブルでお茶を飲んでくつろいでいる二人を見つけた。

刹那「……ふたりとも、何してるのかな？」

沙和「あ、隊長お疲れなのー。」

真桜「おっー。」

刹那「お疲れさん、で？今の時間帯だと東地区の担当のはずだったと思うが？」

沙和「そっちはもう終わったのー。」

刹那「時間までやらないと意味がないと思うが？それに下の者にも示しがないだろ？」

沙和「大丈夫なのー。沙和たちはちゃんと模範になるようなことはちゃんとしてるのー。」

そうかそうか……ちゃんと模範になるか……ふー……

ブチンッ

うん、予想どおりだ……後ろで何か切れるような音がした……

刹那「風、遠慮はいらん……やれ……」

風「……了解しました隊長。」

沙和「どうしたの凧ちゃん……ん。」

真桜「んー？凧がどないかした……ん。」

思わず二人は言葉が止まったなげなら

凧「私の子の手が真っ赤に燃える！！お前らの頭を砕けと轟き叫ぶ  
！！！！」

沙和「ま、待つてなの凧ちゃん！！その技は！！」

真桜「せ、せやで凧！！そんな使ったらうちの夏候惇将軍がああ  
あ！！！！」

凧「ばああああくねっ！！ゴッド！！フィンガーアアアアアアア  
アアアアアア！！！！！！！！」

沙和・真桜「のぎゃあああああああああああああああああああ  
ああああ！！！！！！！！！！」

氣のこもった手でおもいつつきり二人の頭をつかむ……

凧「ヒイヒイヒイヒイト！！エンド！！！！」

ドオオオオオオオオオオオン！！！！！！！！！！

そして爆発した……（あ、真桜が作製中のカラクリ夏候惇人形も  
巻き込まれた。）

刹那「うむ、見事だったぞ凧。見事俺が教えた技を使いこなしてい

るな。」

凧「はい！ありがとうございます！！」

俺はこの技を教えたのはいちいち氣弾を飛ばしてしまえば周りに被害が出てしまうからだ。だがこれなら周りに被害は出ない。そのかわり食らった奴は大ダメージを負うがな・・・

（凧・・・俺は感動しているぞ！！あの必殺技をじかに見れる時が来るなんて！！！！）

刹那「他の技ももう少しでできるようになるな・・・精進するよつに。」

凧「はい！！」

そんでもって食らった二人は・・・

沙和「・・・う、うう・・・ひ、ひど・・・い・・・の・・・」

真桜「・・・う・・・うち・・・の・・・夏侯・・・惇・・・将・・・軍・・・」

真桜よ・・・まだ言うか・・・恐るべき執念だ・・・

ハア・・・今日も平和だな。

沙和・真桜「どこがなの（やねん）！！！！」

刹那「復活すんの早いな、おい！！！！」

その後、さらに少くくしOHNASI しました

刹那「いいね？仕事はさぼるなよ？さぼったら・・・わかるね？）  
ニツコリ」

沙和・真桜「サ、サーイエッサー！！（ガクガクブルブル）」

まあこれでさぼらないだろう・・・しかし飴とムチの内ムチだけつて言うのは可哀そうかねえ・・・

刹那「まあ真面目にちゃんとしているようならご褒美も考えてやるよ・・・」

三羽鳥「「ご褒美？」」

刹那「そうだな・・・まず沙和、お前には天の国であつた服や首飾りとかをやるよ・・・すごい可愛い奴を、な・・・」

沙和「え！？本当なの！？やったー！！」

刹那「ああ。次、真桜にはカラクリの技術に関して書かれた本と部品、工具もろもろをくれてやる。」

真桜「ホンマでつか！？いよっしゃー！！」

刹那「うむ、そして最後に呷、お前には天の国であつた拳法に関わつた本（中国拳法とか徒手空拳とかなど）をやるよ、それを参考にするれば鍛錬もやりやすくなるだろう、それと激辛料理をくれてやる。」

凧「……ありがとうございます隊長……！」

刹那「ああ、ただし！ちゃんとしていたらの話な？」

三羽鳥「……わかりました（なの）（でー）……！」

これでちゃんとしてくれたらバンバンザイなんだがねえ……

数日後……それは警備のとき……

真桜「うるああああああ……！待たんかあああああああ  
あい……！」

泥棒「ひいひいひいひいひいひい……！いやだあああああああ  
……！」

店に置いてあったものを持ち去ろうとした泥棒を真桜が追いかける  
……

沙和「ここから先には行かせないの……！さつさと泥棒を捕まえるた  
めに動かないかへニヤチン共……！とつととしろ……！貴様らのア  
レを切り落としてケツの穴に突っ込まれたいか……！」

警備隊「……サ、サーイエツサー……！」

泥棒「こ、こつちにも……？捕まってたまるかあああああ……！  
……！」

待ち伏せした沙和が警備隊に激を飛ばすがそれでも逃げようする泥  
棒……

凧「逃がしてたまるか!!!はああああああ!!!」  
(どかああああ!!!)

泥棒「ぐはあああああ!?!?!?!?!」

だが逃げた先にはさらに凧がいて、凧の右側頭部回し蹴りで沈黙する。

凧「隊長、コソ泥を捕まえました!」

刹那「あ、ああ・・・よくやったよ。」

沙和「えへへ〜がんばったのー。」

真桜「まあ当然やな!」

凧「ありがとうございます。」

ああ・・・本当によくやってるよ・・・ただ、やりすぎ・・・じゃないよな?

泥棒を働いたやつの方を見てみると頭がへこんでるように見えるし、なぜか「あれは鬼や、あれは鬼や・・・」とぶつぶつ呟いている・・・そんなに怖かったのか・・・それと真桜に沙和・・・

真桜「(うへへ・・・カラクリ夏候惇人形・・・新しい部品・・・  
工具・・・)」

沙和「(むふふ・・・かわいい服・・・かわいい首飾り・・・)」

あかん・・・顔が緩みまくってるせいか考えとることが手に取るように分かる・・・

刹那「この調子で頑張るように・・・」

三羽鳥「「はい!!!!」「」「」

これ以降、犯罪件数はさらに減った事はいいことだが・・・大丈夫か？



第二十五話 見よ！これが風の新必殺技！！ 三羽鳥と褒美の為に！！（後書き

真桜・沙和「作者ああああああ！！！！」（怒）

笑い猫「おや？どうしたかなお二人さん（笑）」

真桜「何やねんこれ！！」

沙和「沙和たちはこんなに欲張りじゃないの！！！！」

笑い猫「え？じゃあいらないの？」

真桜・沙和「欲しいです！！」

刹那「・・・欲張りじゃねえか・・・」

第二十六話 道案内 するんじゃなかった・・・(泣)(前書き)

笑い猫「うう・・・勉強とか忙しくてなかなか投稿Ga・・・」

刹那「このごろホント忙しいようなので勘弁してやってください。」

笑い猫「うう・・・ありがとな・・・お礼に女装編だしてやるよ・・・(ガクッ)」

刹那「ありがとな、ってうおおい!!そんなお礼いらねえよ!!」

笑い猫「しゅん」 返事がない・・・ただの屍のようだ・・・

刹那「起きやがれえええええええ!!!!!!」

どしど

第二十六話 道案内 するんじゃなかった・・・(泣)

刹那「・・・んでこの道をまっすぐ行ったところがそうだ。」

「そっかい、ありがとねえ。」

刹那「いや、気にするな、これも仕事だ。気を付けて行きなよ、お婆さん。」

「あいよ。」

警備中、道に迷った婆さんを案内していた。

「御使いのお姉ちゃんーん!!あそぼーん!!」

刹那「だから俺はお兄ちゃんと・・・ハア、もういい・・・」

こいつら何度言っても治らないからもういい・・・諦めよう・・・  
(泣)

刹那「まだ仕事中だ、後で遊んでやるよ。」

「わかったー」  
「タッタッタッタッー・・・」

まだ聞きわけが良いから可愛い方が・・・

春蘭「おお、刹那ではないか。」

振り返ってみるとそこには春蘭がいた。

刹那「ああ、春蘭街中で会うなんて珍しいな。」

春蘭「うむ、確かに珍しいな、お前は何をしていたのだ？」

刹那「警備中だよ。さっきお婆さんの道案内をしていたところだ。」

春蘭「おお、そうか。」

刹那「そう言う春蘭はどうしたんだ？」

春蘭「それは・・・そうだ刹那、お前に頼みがあるんだが。」

刹那「・・・鍛錬か？それともお菓子か何かか？」

春蘭「違う、お前に道案内を頼みたい。」

刹那「道案内？」

春蘭「実は華琳様と秋蘭といっしょに下着を買いに行く予定だったのだが、待ち合わせの時間に遅れてしまった。店を周って探していたのだが見つからないのだ。」

刹那「そうか、別にかまわないが・・・遅れちゃだめだろ・・・」

春蘭「ぐ、しかたないだろ！それより早く案内しろ！！」

誤魔化したか・・・

刹那「ああ、わかったよ、ふくく・・・」

春蘭「笑うなーーーー！！！！」

叫ぶ春蘭を横目に案内することにした・・・

### 一軒目

刹那「いたか？」

春蘭「いや、ここにはいなかった」

### 二件目

刹那「どうだ？」

春蘭「ここも違う」

### 三件目

刹那「ここもか？」

春蘭「ああ・・・肉達磨にくたまるまがいただけだった・・・」

刹那「そうか、肉達磨か・・・肉達磨!？」

肉達磨「つてなんだよ!?ま、まあいいか何か知らない方が幸せそう  
だ・・・なんかあの店から「ぬふううん!」とか聞こえるし  
なんか背筋に寒気が!？・・・うん・・・

刹那「なあ春蘭、華琳たちは何か店の特徴とか話してなかったか？  
たとえば新しくできた店に行くとか・・・」

春蘭「・・・おお!!そう言えば新しくできた店に行くと言ってい  
たぞ!」

刹那「先にそれを言えよ!」

春蘭「忘れておったわ!!【ドーン!】」

おい・・・

刹那「はあ・・・だったら行く・・・確か新しくできた所なら  
東の大道りにあるから・・・」

春蘭「そうか!なら早く行くぞ!」

刹那「やれやれ・・・」

そんなこんなで・・・

春蘭「刹那！華琳様と秋蘭を見つけたぞ！！」

刹那「そうか、よかったな」

春蘭の後ろから二人がゆっくりやって来た。

秋蘭「すまなかつたな刹那、姉者が迷惑をかけて」

刹那「いや、案内も仕事だからな」

華琳「春蘭から話は聞いたわ、春蘭・・・刹那にお礼を言いなさい」

春蘭「は、はい・・・恩に着るぞ刹那」

刹那「どういたしまして、次からは時間には気をつけるといい、それじゃあ俺はこれで「待ちなさい刹那」ん？」

さて、仕事にもどるか、そう思い踵を返そうとすると華琳に引き止められた。

刹那「どうした？まだ何か用があるのか？」

華琳「ええ、護衛の仕事よ」

刹那「護衛？誰の？」

華琳「無論、私の護衛に決まっているでしょ。」

おい……

刹那「……春蘭と秋蘭がいるじゃないか」

華琳「聞こえなかったかしら？私はあ・な・た・に命じているのよ  
(ニッコリ)」

……何これ怖い……この霸王様の後ろに効果音でゴゴゴゴゴゴ  
ツって言っていていいほどの覇気が……断ったらどうなるんだろ  
う？明日の朝日が拝めなくなりそうなのがするよ……(ガクガク  
ブルブル)

震えそうになる体を必死に抑えながら……

刹那「ワ、ワカリマシタカリンサマ、シジニシタガイマス。」

華琳「よろしい」

ああ……よかった……さっきの覇気止まって……だが、

刹那「なあ華琳、俺男だからかなりいずらいのだが……」

華琳「それなら大丈夫よ、髪を解けば……ね(にやり)」

おい……それってまさか！



刹那「・・・まじか？」

華琳「ええ」

刹那「それしたら完全に俺変態さんになっちゃっよ!?」

たださえ桂花に罵られてんのにさらにそこから落ちることになる  
なんて勘弁してー!! 心の魂の声

華琳「安心なさい、情報統制してあげるから」

刹那「そんなくだらないことに権力なんか使うんじゃねえよ!!」

このままじゃまずい!! 貞操の危機だ!! (暴走中)

刹那「やばい!逃げ」春蘭「はっ!」(どかつ!)(っが!?!しま・  
・・・た(がく)」

華琳「ふふふ・・・うんつと可愛く仕立ててあげるわ刹那」

その後、街の瓦版でこう書いてあった・・・「絶世の美女、現る」  
つと・・・

第二十六話 道案内 するんじゃなかった・・・（泣）（後書き）

笑い猫「今回はこんな感じですよ」

刹那「グスン・・・もうやだ・・・」

笑い猫「あゝあ、酒飲んでいじけちゃってるよ・・・誰だこんなに  
なるまでいじめたのは!!」

魏のメンバー「お前だろうが!!!」

笑い猫「あつれ〜？でもこんな刹那も見れて良かったですでしょう？  
にんまり」

魏のメンバー「うっ／＼／」

刹那「うっ・・・みんなの馬鹿〜!!」 酔っぱらって幼児化

魏のメンバー「・・・可愛い／＼／」

笑い猫「（ふふふっ計画通り!!!）（「ゴシヤアアアアン」



## 二十七話 出会い それは赤い鬼神と蒼眼の死神

兵「ほ、報告します！黄巾党が東北東の関に現れました！数はおよそ一万！！」

華琳「なんですか！？

くっ……まずいわねえ、今春蘭たちの方に兵割いているから対応が難しいわ……」

この時、春蘭たちは南南東の方に現れた黄巾党の討伐に行っていて、数もかなりいたためそれ相応の兵を連れて行っていたのだった。

華琳「秋蘭！いまだせる兵はどれほどいる！！」

秋蘭「はっ！数は三千……街の警備隊です。」

華琳「そう……でも放つてはおけないわ、すぐに出発しよ」その必要はないぞ華琳」刹那、どういゆうこと？」

刹那「俺が一人で殲滅してきてやるよ。」

華琳「何を言ってるの！いくらなんでもそれは「無茶じゃないぜ？大体俺一人で五千の敵をねじ伏せたこともあるしな」！？」

刹那「ちよつとばかりし時間はかかるけど問題はねえよ、それに警備隊の奴らはまだ来て間もない奴らが多い上戦いの気構えすらなつちやいない……そんな奴らに『戦って死ね』なんて言えねーよ。」

兵が増えたといっても入ったばかりの奴らばかりで行かせたとし

ても無駄死にさせることぐらい華琳にだってわかっているだろう。それに今回は防衛戦じゃなくて殲滅戦、戦いのなっちゃんいない奴らばかり揃えたところで俺にとって動きにくくなっちまう……

華琳「……必ず帰ってきなさいよね、

死ぬことはこの曹孟徳が許さないわ！

「！

刹那「フツ……俺を誰だと思っている……必ず帰るぞ華琳。」

そんなこんなで接触まであと少しの所まで来たわけだが……

刹那「さて、今回は殲滅戦だぜ冬月。」

冬月「……」

刹那「あり？どうした？」

冬月「ブルルッ（このごろ出番が少なかったから忘れられているものだと思ってたですぞ旦那。）」

刹那「ほっとかれてすねてんのか？すまんすまん、次から気をつけるよ。」

注：馬の言葉がわかってんのかよ！！（ズビシッ）

作者仕様です

・・・なんか電波で誰かとやり取りが聞こえたような気がしたけど  
気にしない気にしない・・・ん？

刹那「・・・俺の見間違いか？すでに戦いが始まっているように見えるのだが？」

冬月「ブルルツ（見間違えじゃないですけど旦那、しかも戦っているのは一人みたいでなぜ？  
それでそいつは赤い髪の女だ。）」

刹那「・・・まじか？」

おいおい、人のこと言えたわけじゃねえが一人で戦ってんのかよ！  
？しかも一万つて言ったよな！？  
絶対それ以上は入るぞ！？

刹那「とりあえず加勢するぞ！急いで行ってくれ冬月！！」

冬月「ヒヒーン！！ あいよ旦那！！」

s i e d     ????

「女一人に何手間取ってやがる！！困んでやっちなまえ！」

少女に勝てないことに苛ついた賊達が、少女に向かって一斉に攻撃を仕掛ける。

しかし、

????「……五月蠅い。」

武器は彼女に届くことはなく、一振りで十の命が散った。

「く……この化け物め！」

賊の一人が少女を罵る。

????「……それでもいい。……月と、家族の為なら。」

罵声をものともせず、手に握られた戟を担ぐと、短く名乗りを上げた。

呂布「……呂布。……行く！」

呂布と名乗った少女は、一振りで何人もの命を散らし、目の前の賊達を紙切れのように斬り伏せていく。

それはまさに鬼神と呼ぶに相応しかった。

しかし、彼女も人の子。自分の斬った賊達のせいで、徐々に足の踏み場は無くなり、自由に動ける範囲が狭まっていく。

呂布「……っ……邪魔っ！」

遂に足場は埋まり、賊の亡骸で、体勢を崩してしまう。







「「ヒッ!」「」

鋭い目つきで賊を睨みつける・・・  
彼女からはすさまじいといえる怒気と殺気がにじみ出ている・・・  
賊は顔を真っ青にして震えあがっていた・・・

そんな彼女は賊たちから視線を外し、

夜から朝に変わるように、

体制の崩した私に向かって微笑みながら・・・

???「無事か?（ニカッ）」

そう私に声をかけた・・・

その蒼い空のような目は、とても優しい目をしていた・・・

s i e d

刹那

ふー・・・ギリギリセーフだな、冬月には下がらせるように言ってるから大丈夫だろう・・・

氣で足を強化して冬月から跳びあがり、空中から双剣の炎竜を投擲、さらに大剣に高密度の氣を込めてブン投げてやった・・・  
そのおかげで奴らはまだ混乱している。

刹那「まったく・・・くだらねことをしやがって・・・他人の大切

な物を簡単に奪ってきたんだ、

それがいつか自分に返ってくるくらいわかってるだろ？覚悟は・・・いいな？」（ギロリ）

「「ヒッ！！」「」

ちっ・・・恐がるくらいならこんなことしてんじゃねえっての、んなことより・・・

刹那「無事か？（ニカッ）」

無事でよかったぜ、っておいおい、賊どもの返り血でドロドロになってるな・・・

こんなになるまで戦っていたのかよ・・・

???「・・・（こくり）／／／」

刹那「そうかい、それで名前は？」 血まみれになっていて顔が赤くなっていることに気づいていない

恋「呂布奉先・・・真名は恋。」

刹那「ん？いいのか？」

恋「いい、あなたは助けてくれたから。」

刹那「そうかい・・・俺は歌実奏曲、真名は刹那、真名預けてくれたんだ、俺も真名を預けるよ。」

恋「・・・ん。」

刹那「さて、自己紹介も終わったことだし……」

そう言いながら槍・夜影を構え……

刹那「殲滅戦の開始と行きますか……」

恋「わかった……」

ダッ！！

そして俺と恋は突っ込んだ、

圧倒的ともいえるほどの賊の大群に、

だが負ける気はしなかった、

なぜなら俺と恋は、

とてつもなく強いから……

s i e d      賊頭

なんだよ！？なんだってんだよ！！

もう少しで化け物見てえに強い女を殺せるところだったのに!!

なのに・・・

蒼眼の女「はああああああ!!!!!!!!!!」

赤毛の女「・・・フッ!!!!」

途中から乱入してきた蒼眼をした女?のせいで赤毛の女は殺せず、  
今も暴れまわっている・・・

蒼眼の女の槍は神速の速さで突き殺し、赤毛の女は戟は一振りで数  
人の味方の命が散る・・・

だがその光景はなぜか美しく見え、さながら妖精でも舞っているよ  
うに見えた・・・

「ゆ、弓だ!!弓を射ろ!!弓だったらあいつらの攻撃はとどかね  
え!!!!」

俺の命令で五十人くらいが弓を構える・・・

「今だ!!殺せええええええ!!!!」

俺の命令で五十人分の矢が奴らに降り注ぐ!!

殺った!!!(ニヤリッ)

そう思っていた・・・

蒼眼の女「何笑ってやがる、馬鹿が・・・」ドガツドガツ!!

蒼眼の女は自分の切り捨てた俺たちの仲間を槍を使って宙に浮かばせると・・・

ドスッ!ドスッ!ドシュッ!!ドスッ!グザアッ!!

「な、なんて女だ!!自分の斬ったやつ死体を盾にしやがった!!」

だが間違いだった・・・その行動に目を離したことを後悔する・・・死体がすべて落ちると・・・

「はっ!?!やつはどこだ!?!」

いないのだ、死体を盾にした瞬間奴がどこにもいなかった、いるのは赤毛の女だけだったのだが・・・

蒼眼の女? 「消し飛びやがれ馬鹿野郎ども・・・」

そう聞こえた瞬間、俺たちは流星に飲まれた・・・

s i e d 刹那

俺は今空中にいる・・・



その光景は阿鼻叫喚の光景だったともいえる・・・

刹那「ああそうだな、化け物で結構・・・だが俺から言わせれば貴様らこそ化け物だ。」

俺は怒気を込めながら辺りの奴らを睨み、

刹那「てめえらは他人が齒を食いしばって、明日を望み、

汗水たらして生きてきた奴らの命を、

てめえらの傲慢な欲望によって奪い、食い殺した・・・

その行いは、最も愚かな行いだ！！

てめえらは明日を生きるため者達の明日を奪った化け物だ！！！」

「て、てめえにいつたい俺たちの何が分かるんだよ！！！何もかも奪われたとき、朝廷や馬鹿の太守どもはなにもしてくれなかった、こつするしか生きていけなかったんだ！！！」

刹那「それでも！泥をかぶってでも生きている奴らはいるんだよ！例えそうだとしても誰かの大切な者を奪っていい理由にはならねえ！お前らこそ奪うこと逃げた、化け物だ！！！」

「うるせえ・・・うるせえんだよ糞尼ああああああああ！！！！！！」

そう言っただ奴らは一斉に切りかかってくる・・・

俺は今度は刀・夢幻を構え・・・

刹那「・・・そう、お前らは化け物だ、だからこそ俺も化け物にな



る。

奪う者達（化け物）からその命を奪う化け物……、死神、になー！！！」

『ムゲン　ゲンエイザン　シンギマイサツ  
夢幻・幻影斬・神技舞殺』

ザンツ！ザンツ！ドシュツ！グザアツ！ドシュツ！ドスツ！ザンツ  
！！！！

残像を残しつつただ切り裂く、

その行いは踊り、舞を踊っているようにしか見えず、切りかかってきたものを切り終え、

チャキンツ、と腰に刀を戻すと……

ブシュウウウウウウウ！！！！！！

鮮血が噴出した……

刹那「次生まれ変わった時は、汝らに幸福のあらんことを……」

糞つたれ……いやな世の中だ……さっさと平和にしねえといけねえな……

そんなことを思っていると……

ギユツ

刹那「え？つと……恋？」

恋「……大丈夫？」

おっと、いけえねえな・・・心配させちまったかねえ・・・

刹那「ああ、大丈夫だ・・・ありがとな、恋。」

恋「・・・刹那は化け物じゃない。」

刹那「え？」

恋「刹那・・・切っている時・・・悲しそうだった・・・だから化け物じゃない・・・」

刹那「・・・優しい・・・」

俺の目を覗いてくる恋、

実際、切っている時、悲しかった・・・

あいつらだってやりたくてやってんじやない、

それが分かっているからこそやりきれない思いを抱えていた、  
慰めようと必死になっている眼であった・・・

刹那「そうか・・・ありがとな恋、少し元気が出たよ。」

恋「・・・ん」

フツッと笑う恋の仕草にドキツとしたのは秘密だ・・・

後に、刹那の二つ名に『ソウガン蒼眼シニガミの死神』の名が加わった・・・

二十七話 出合い それは赤い鬼神と蒼眼の死神（後書き）

笑い猫「ふっふっふ・・・さすが男女・・・言うことが違うねえ W  
」

刹那「畜生！なんて逃げ脚だ！！おとなしく殺される！！」

笑い猫「ふははははははははははははははははははははははは W W 早々簡単に捕まるものか  
アラホラサッサー」

刹那「そのネタヤメエエエエエエエエエエ！！」

鬼ごっこはまだ続く！！

チャンチャン

第二十八話 再会の約束 春蘭の突進力 理不尽だ（ガクッ）（前書き）

笑い猫「今回少し短くなったじゃないか刹那！」

刹那「なんで俺に言うんだよ!？」

笑い猫「貴様が追いかけてまわしたせいであまり書けなかったからだ  
!!」

【ドーン】

刹那「いい訳すんなあああああ!!!!」

第二十八話 再会の約束 春蘭の突進力 理不尽だ(ガクッ)

あれから後、髪を縛って俺は男だと言ったら少しだけ驚かれた、まあましな方か・・・

刹那「しかしお互い血でどろどろになっちまったなあ。」

恋「・・・ん」

改めて自分ら体を見してみると上から下まで真っ赤に染まっ  
ている、

このまま帰ったらかなり気持ち悪い・・・

刹那「なあ恋、この近くに川とかあるか？あるんだったらそこに  
って血を洗い流そう。」

恋「・・・大丈夫。」

刹那「へ？どう言うことだ？」

恋「・・・あっち。」

恋が指を指す、その方向を見てみると・・・砂塵？

刹那「・・・いや、旗が見えるな、旗は呂つてことは恋の所の、」

恋「・・・ん(コクリ)」

・・・あ、そういうことか。私の所で血を拭って行けってことか。

「????」「……ん殿……」

刹那「ん?なんだ?」

なんか一人すげー速度で近づいて、っておい!

「????」「ちんきゅーうきーーック!」「シャッ

刹那「うおっ!?なんだ!?!」バツ

鋭い良い蹴りだ……っじゃなくって!!

「????」「恋殿に近づく不届き者め!!この陳宮が成敗してやるのです!!!」

恋「……っめ……」

陳宮「恋殿……!?!」

刹那「……なあ恋、この「ちんきゅーうきーーック!?!」「うおっ!?!」

陳宮「お前のような馬の骨が恋殿の真名を呼ぶとは何事ですか!!!ねねが懲らしめて」「……めっ!」「恋殿……!?!」

恋「……恋が許した。……ねねも言っ……」

陳宮「し、しかし恋殿!」「……ねね……」「……分かりました……」

すると、敵意剥き出しにしながらも名を名乗った……そこまで嫌われるようなことしたかねえ？

陳宮「ねねの名は張宮と言つてです！

仕方なく名乗つたんですから、そっちも名乗るがいいです！」

ほほう、はっきりと言つねえ……ならば、

刹那「そうかい、俺は歌実だ。よろしくな嬢ちゃん。」

そう言つて頭を撫でる

陳宮「ななな！？子供扱いするななのですー！！！」

刹那「断るー！！【ドーンー！！】」

陳宮「なんですとー！！！！！！？」

そんなこんなで陳宮をからかいまくつた後にさっきの戦闘でのことを説明した、

陳宮「……そうだったのですか！！恋殿を救っていただき感謝しますぞー！！」

刹那「別にいいさ、それに恋みたいな娘が生きててくれて俺としてもうれしいからな。」

恋「・・・／＼／」

うん？恋の顔が赤いような？気のせいかな？

陳宮「ありがとうございます！恋殿を救ってくれたお礼に、ねねの真名を授けるのです！ねねの真名は音々音と言つです。ねねと呼んでいいのです！」

刹那「そうかい、だったら俺も刹那でいいぜ（ニカッ）」

ねね「お、おお！ありがとうございます！！／＼／」

ありゃ？今度はねねの顔が赤いような？まあいいか、

刹那「とりあえずそつちのここに行つていいか？体の血を洗い流したいのだが、」

恋「（コクリ）・・・ねね・・・」

ねね「わかりましたぞ恋殿！こつちですぞ！！」

その後、体の返り血を拭つているとなぜか二人とも顔を赤くした・・・  
・・・なんでかねえ？

そして拭い終わり・・・

刹那「さてそろそろ戻らねえと、「グイッ」「ん？」

恋「・・・いつちゃうの？・・・（めじめじ）」



俺の服をつかんで少しうるんだ目で俺を見る恋・・・

何この可愛い小動物は？この子ホントにあの飛將軍なのか？  
すげー可愛いんですけど！？

・・・は！？いかんいかん！！頭が一瞬トリップしちゃったぜ・・・

刹那「ごめんな恋、でもこれが一生の別れとかじゃないぜ？」

そう言っただけ俺は恋の頭をなでてやると気持ちよさそうに目を細める・・・

刹那「またどこかで会おう・・・約束だ。」

恋「・・・ん。」

刹那「おう、じゃあな！またどこかで会おう！！！」

そう言っただけ俺は華琳の元に戻って行った・・・

だが、次に再会した時、

二人は戦うことになることになるのであった・・・

ちなみに小動物モードの恋を見たねは、  
鼻血を出して悶えていたことを二人は知らなかった・・・

そして・・・

刹那「華琳、今帰ったぞ。」

華琳「刹那！無事で何よりだわ。」

刹那「ああ、ただいまマスター！！！！」（ガバツ）うわつと  
！？」

紅葉「心配したんだよ！！！！」

刹那「心配掛けて悪かったな、でもいきなり飛び着くのは危ないからやめような？」

青藍「それほど心配なさっていたのですよ、  
そのくらい黙って受け入れてあげてくださいマスター。」

刹那「青藍・・・わかったよ。ところでそっちの方はどうだった？」

春蘭「ふん！！あの程度の賊、一瞬にして叩き斬ってくれたわ！！」

凧「・・・すごい突進力だった・・・」

沙和「・・・いつもの数倍だったの・・・」

真桜「……すごいすぎや……」

刹那「いつたい何があった!?!」

すげーボロボロじゃねえか!?!何をどうすりゃそこまでになるんだ!?!

秋蘭「……刹那……」

刹那「……いつたい何があつたんだ秋蘭……」

秋蘭「……次からは絶対戦闘中に姉者に歌は聞かせないでくれ……」

刹那「……了解した……」

つまりはこういうことか……

春蘭のいつもの突進力+歌!!さらに倍増……つまり!!???

みたいな感じか?どんなふうになったかは想像したくない……

春蘭「青藍!紅葉!お前らが歌を聞いていたら気分良く戦えたぞ!  
!次も頼むぞ!!!」

青藍・紅葉「わ、わかりました……」

……いかな……絶対阻止しよう……

くおまけく

紅葉「……ん？（くんくん）……」

刹那「ん？どうした紅葉？」

紅葉「マスター……マスターから別の女の人の匂いがするんだよ  
くしかも二人……」

刹那「……へ？」

華琳「……刹那？」（チャキツ）

刹那「エ！？イ、イヤーカリンサン、ナンデゼツヲカマエテルンデ  
セウ？」

華琳「正直に言いなさい、女の人と会ってたのかしら？」

刹那「エ！？いや！？」

戦場で共闘したただけだk「真名を交換したんじゃないやありません？マス  
ター？」

！？なぜおまえがそれを知って、……あ。」

青藍「いえ？ただカマにかけてみただけですよマスター？」

刹那「な！？謀つたな青藍！！」

青藍「いえいえ、しゃべったのマスターですから」ニッコリ

・・・素敵な悪魔スマイルありがとう・・・

華琳「・・・刹那？」

刹那「ハインデゴザイマシヨウカ？」

華琳「少しO H A N A S H I I しましょ」ニッコリ

刹那「り、理不尽だあああああああああああー・・・」

第二十八話 再会の約束 春蘭の突進力 理不尽だ(ガクッ) (後書き)

笑い猫「お、おーい刹那・・・」

刹那「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

笑い猫「だ、だめだ・・・完全に壊れとる・・・」

華琳「少しやりすぎちゃったみたいね」

笑い猫「そんなすつきりした顔で言っても・・・華琳、恐ろしい子  
!!!」

第二十九話 刹那、心で思う怒り（前書き）

笑い猫「お〜い刹那、お話楽しかったかな？」

刹那「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………」

笑い猫「……………ねえ華琳さん……………いつたいなにやったの？」

華琳「聞きたいかしら？」

笑い猫「……………遠慮しておきます……………」

華琳「そう、残念ね。」

笑い猫「なにが!？」

## 第二十九話 刹那、心で思う怒り

刹那「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

華琳「いい加減戻りなさい!!」ゴスツ!!

刹那「あいたつて、はっ!!お、おれは一体!?!」

あれから何が!?!...ああそうか、華琳からO H A N A S  
HIされて俺は...  
いかん、思い出すな!!

華琳「刹那、次同じようなことがあったら...わかるわね?」  
ツコリ」

刹那「サ、サーイエツサー!!」

やべえよ、やべえつすよ!!まじでやべえ!!次あったら命なくなるかもしれないよ...

あれ?なんで華琳こんなに怒ってたんだ?

華琳「さて、凧?先ほどの情報収集で黄巾党の集合場所の地図を手に入れたという話だけ?」

凧「ハイッ!これです。」



おっと、思い耽ってしまつたな、ん？黄巾党の集合場所の地図？

刹那「え？凧、それ本当なのか？」

凧「あ、はい、先ほどの出撃で捕縛した敵が持つておりまして。」

刹那「大手柄じゃないか、なあ華琳。」

華琳「ええ、その通りね。良くやったわ凧。」

凧「ありがとうございます！！」

上機嫌で凧を褒める華琳。あの巻物は、早速軍議で採り上げられた。

秋蘭「先ほど戻つた偵察部隊から報告がありました。

それと照らし合わせて検証してみました。どうやら敵の本隊に間違いありません。」

刹那「……ということとはつまり、」

秋蘭「ああ、首謀者の張三姉妹が揃っているとの報告もあつた。」

華琳「それは間違いないのね？」

秋蘭「ええ、ですが……」

刹那「どうしたんだ？」

秋蘭「ああ、実は報告では、三人の歌を全員が聞いていて、異様な雰囲気を漂わせていたということになっているらしい・・・」

刹那「・・・俺と同じ・・・つまりライブか・・・」

秋蘭「らいぶ？」

刹那「俺や青藍、紅葉が歌を歌うと体が軽くなったとか、体の調子が良くなったとかあるだろ？」

それと同じで奴らの場合、歌を聴くことで黄巾党を操っているのだろっ・・・」

華琳「なるほど・・・確かにそれなら納得が良くわ。」

それにしても、それが本当なら・・・チツ、胸糞悪いな・・・

華琳「どうしたの刹那？険しい顔をして、」

刹那「・・・いや、なんでもない。」

顔に出たか、今は考えないようにしよう・・・

華琳「そう？ならいいわ・・・とにかく、凧のお陰で一氣にカタがつきそうね。」

これで終わらせる・・・みんな、決戦よ！・・・」

全員『はいっ！・・・！』

刹那「ああ・・・」

玉座の間に、全員の声が響き渡った・・・

人を不幸にするために歌っているなんて・・・

そんなのあつてはだめだ・・・

俺は静かに心に思っていた・・・

s i e d

黄巾党

????「人和ちゃ~~~~ん！お腹空いたよ~~~~！」

黄巾党・大天幕・・・その中で、三姉妹の長女、天和の能天気な声が響く。

それに続き、次女である地和の不満声も聞こえてきた。

地和「人和。私もう限界よ。ご飯も少ないし、お風呂もロクに入れない。

それに何より、ず~~~~っと天幕の中で息が詰まりそう！」

人和「言われなくても分かっている。でも仕方が無いでしょ。

曹操って奴に、糧食庫が丸ごと焼かれちゃったんだから、」

地和「仕方ないわよ！別の所に行けば良いじゃない。  
今までだって、煩くなったら他の所にサッサと移動してたじゃないの！」

地和の発言に、人和が頭を抱えた。

人和「・・・私達の活動が朝廷に眼を付けられたらしいの。  
大陸中に黄巾党討伐の命が下っているわ、」

地和「は、はあ？何よそれ！？」

私達、討伐されるような事は一切してないわよ！？」

人和「確かに私達は何もしていないわ。ただし、周りの連中がね・・・」

地和「ど、どう言う事よ！？」

人和「連中が付いてくると、絶対に大きな動きになる。

彼等連れて国境は越えられないのよ、」

天和「え〜っ？　じゃあ今までみたいに、色々な国は回れなくなっちゃうの？」

地和「天和姉さんはもう黙っててよ！連中が付いてくるなら、こっそり置いていけば・・・」

人和「出来るならとっくにやってるわ。何度か試したけど、その度に別の誰かが寄って来るのよ、」

だから無駄だと思って諦めた。人和は地和にそう告げた。

天和「全くもう！何でこんな事になったの〜！」

能天気な様子で言い出した天和を地和が攻める。

どうやら2人は歌を歌っている最中に兵達に言ってしまったらしい。

天和曰く「大陸の皆に愛されたい」・・・とか。

地和曰く「（歌で）天下を獲りたい」・・・とかなんとか。

それを本気にした周りの人間が乱を起こしているというわけだ。騒がしい二人を余所に、人和が溜息をついたその時

「張角様！張宝様！張梁様！」

天幕の外から、三人を呼ぶ兵の声が聞こえた。

人和「入りなさい、」

「失礼します！」

天和「どうしたんですか？」

「はっ。軍により追われた新たな者達が、我々に合流したいと言ってきているのですが……」

天和「それって、私達の歌を好きって言ってくれてる人達なんですよね？」

「その通りです。」

兵の言葉に天和が笑みを浮かべる。

天「じゃあ良いんじゃないですか？」

地「そうね。応援してくれる子は大切にしないとね！」

人「……と言う事です。後はそちらにお任せします、」

「では、早速食料と装備の支給を行います。」

そう言って、兵は天幕を後にした。

人「何？食料も装備も持たずに合流したいって……たかりに来てるだけじゃない……」

地「もう！馬鹿馬鹿馬鹿！！何で姉さんあんな事を言つの！？」

天「え〜！だってちーちゃんだって、応援してくれる子は大切にしようって・・・」

地「だ、だって、あんな事言われたら、ああ答えるしかないでしょ！！！」

天「私だってそうだもん！！」

人「全く・・・今の食料の状況を見れば、これ以上の受け入れが無茶だってわかるはずなのに・・・」

地「じゃあ人和我が言ってくればよかったじゃない！！」

人「建前つてものがあるでしょ？」

天「あ〜〜ん！！お腹空いたよ〜〜！！」

その後、また別の兵が受け入れの報告をし、三人はそれに許可を出すのだった・・・

第二十九話 刹那、心で思う怒り（後書き）

笑い猫「うははははははwwwやっとな黄巾党の乱が最終局面だぜw  
」

刹那「それでどうすんだ？」

笑い猫「さてどうしよう?。」

刹那「何も考えてないのかよ!？」

笑い猫「その通りじゃ!!まあどうするかはその時の気分で決めよ  
うかねえww」

刹那「・・・大丈夫かよこの小説・・・」



第三十話 黄巾党の最後 何度も言うが俺は男だ!! (前書き)

笑い猫「実習えらいよ〜」(泣  
なかなか書けない・・・」

刹那「まあ、そのなんだ、がんばれ。」

笑い猫「うにゃあああああああ!!!!!!」(怒

刹那「荒れてやがる・・・」

### 第三十話 黄巾党の最後 何度も言うが俺は男だ！！

刹那「へえ、さすが本体・・・結構いるな、数はどのくらいいるんだ？」

華琳「ざっと数は200000はいるわ、それに比べこっちは40000・・・  
数は圧倒的私たちが負けているわ。」

まあたしかに数では圧倒的にこっち負けているな、でも、

刹那「敵が実際に戦えるのは何人なんだ？」

華琳「察しが良いわね。それでも実際に戦えるのは80000・・・でもこのぐらいの兵力差ならどうとにもなるわ。  
貴方のおかげね刹那。」

あれ？原作と数が違うような・・・？ああ、そうか、俺がいるせいで修正でも働いたなだろうな・・・

まあそれはおいといて華琳のいう通りこの程度なら問題ないな、  
『大盾』と『連弩<sup>れんと</sup>』、さらに今回『弩弓<sup>パリスタ</sup>』を発案、  
武器の設計図を提供、軍備の強化を図った。

そのおかげで長長距離に向けての攻撃も可能になり、  
相手は元農民・・・兵力差があってもまず負けることはないだろう・・・

刹那「どういたしまして・・・華琳の狙いはうまくいったな・・・」

華琳には計画があった・・・

暴徒とは、デモのように張角にも制御出来なくなると面倒だということ、

だがそれは各地にバラバラに分散していたらの話だ。

一か所にまとまってしまえば、制御出来ない以上は烏合の衆に過ぎない。

さらに厄介な流動性も殺せる。

そのために戦闘力を奪った連中を本拠地にまとめてわざと戦えない頭数だけを大きくする。

刹那「・・・火を見るより明らかだねえ、あの状況は、」

桂花「ええ、受け入れる本拠地がないのだから陣内に取り込むしかないのよ。

その結果は見ればわかるでしょ？」

凧「神出鬼没の小熊も太り過ぎればただの的、という事ですね。」

刹那「・・・その例えはどうかと思うぞ凧。」

その例えに一部の女性陣は嫌そうな顔をした。

・・・まあ、女性なら仕方ない反応だろう。

秋蘭「それでは始める。皆は予定通りの配置で、各個攪乱を開始し

る。

ただし、張三姉妹にだけは手を出すなよ。以上、解散！」

刹那「・・・」

華琳は張三姉妹の人を引き付ける魅力に注目しているため、生け捕りを命じている。

刹那「（これに関してはありがたいな・・・）」

俺もそいつらには聞きたいことがある、

どんな思いを『歌』に込めているのかってことを、な・・・

s i e d

張三姉妹

黄巾党・大天幕。指揮系統が機能していない黄巾党は、更なる混乱に陥っていた

「敵の奇襲です！各所から火の手が上がっています！」

兵からその事を聞かされた人和は、顔を青ざめ頭を抱えた。

人数が増え過ぎている為、誰に指示をして良いのか分からないのだ。

次々と大天幕に混乱した大量の兵が押し寄せ、首領である張三姉妹に指示を仰いだ。

人和「ともかく敵の攻撃があるだろうから、皆に警戒するように伝えて！」

地和「火事も手の回る者が消せば良いでしょ！ サッサとやっちゃって！」

人和と地和の指示を聞き、兵達は天幕を出て行った。

人和「（もうこれ以上は限界だ。ここには居られない）」

弱々しい声を出す2人の姉を見つめながら、人和は奥から荷物を取り出した。

地和「何？その大荷物？」

人和「逃げる支度よ。3人分あるから、みんなでもう1度、初めからやり直しましょう」

人和の提案に一瞬躊躇いの表情を浮かべる二人だったが。

地和「・・・仕方ないか。でも2人が居るなら大丈夫かな？」

天和「そうだね。ちーちゃんと人和ちゃんが居るなら、何度だってやり直せるよ。」

人和「そう言う事。そうだ、これも持って」

人和は机の上に置いていた、1冊の古い本を手にとった。以前ある男から無理矢理貰い受けた『太平要術の書』である。

地和「太平・・・何とかだっけ？」

人和「そうよ。これを使って、またみんなで・・・」

人和の言葉を遮るように、天和が太平要術の書を取り上げた。そしてそれを乱暴に置いた後、用意していた荷物を手に持つ。

人和「ね、姉さん!？」

天和「2人が居ればどうでも良いから早く逃げようよ!！」

二人の手を引いて、天和は天幕を飛び出した・・・

俺、凧、沙和、真桜は先発隊として奇襲を開始、  
弓矢を用いて火矢を放ち、黄巾党は突然の奇襲に混乱する。

指揮系統ができていないため、情報は錯綜、混乱は深まっていく。  
いくら兵がいようと、その大軍をまとめる器がなければ意味がない。

刹那「うまくいったな。」

沙和「隊長ー！味方の部隊が到着したのー！」

刹那「よし、凧！沙和！真桜！ここに部隊を突撃させる！殲滅させるぞー！」

三人「了解！！！」

展開で言うと南から華琳の本体が南から30000、北側から俺たちが10000、

敵は今混乱の極みに達している、そんな状態で俺たちと戦うのは無力に等しい……

刹那「これより俺たちは本体の後方から突撃を仕掛け敵をせん滅する！」

人々の多くの者を奪い、恐怖と悲しみを与え続けた人の皮をかぶった獣どもを……

今こそ断罪させる！全軍、突撃イイイイイイイ！！！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「！！！！！！」

兵達も、雄叫びと共に剣を天に向ける。

戦闘中……

刹那「そう言えば『蒼眼の死神』、お前らは俺をそう呼ぶのだったな。」

「だったらそれらしい戦い方をしてやるよ!!」

『ムゲン　ゲンエイジン　キリクモ  
夢幻・幻影刃・霧雲』

体に全体に氣をまとい、淡い光がこぼれている、その状態で敵陣に突っ込み、敵を切り裂いていく……

「死ねエエエエエエエエエエエエエエ!!!!」

ドスウツ!!

そんな中、敵の一人が俺に向かい、剣を深々と刺すが……

「へへ、やってやつて誰をやったって?」へ?」

斬ッ!!

「ぐはっ……!!」

刺されたと思われた俺は後ろから敵を切り裂く、敵が突き刺した「俺」は霧のように消えてしまった……



「な、なんだ！？消えた！？」

「こ、殺されたはずじゃっ！！」

「ゆ、幽霊だ・・・人間じゃねえ！逃げるオオオオオ！！」

刹那「失敬な、俺は人間だよ。」

簡単に説明すると霧のように消えたわけはその場に氣を残留させただけで、

刺される寸前に『1秒を10秒に変える力を発動』、  
即座に回り込んで切り裂いただけなのである。

そのため残像が残り、あたかもそこにいるように見せかけたというわけである。

刹那「（おまけに氣の残留がそこにあるから切った感触もあるから  
まず勘違いするだろうな、

まあ切った相手が霧のように消えるから幽霊に見えなくはないな・・・  
」

死神のつもりだったんだがなあ、と思っていると

凧「はあああああああ！！！！」

ドカアアアアアアン！！！！

おっと、近くでは暴れてるのは・・・凧か！

凧は氣の爆発により高々と空を跳ぶ！

凧「駆ける・・・雷よりも速く！」

さらに空中で気を爆発させ、猛烈な速さで敵陣に突っ込む！！

凧「ライジング・フォー・・・ール！！」

ズドオオオオオオオオオオオン！！

刹那「・・・完璧にモノにしてるな、思いつきでスパロボネタを教えただけなのだが・・・」

マジですげえなおい、凧が突っ込んだ所が死屍累々ってな感じになつてやがる・・・

今度のスパロボのヤオバル ネタでも教えてみようかねえ？

そんな感じで数刻後、戦局は圧倒的に魏に傾いていた。

最初の内は我武者羅にこちらに向かって来ていた黄巾党だったが、不利だと悟ったのか、次々と武器を捨てて離脱して行った。

それでも向かって来る者もいたが、

士氣の高い魏兵によってあつという間に討ち取られていった。

刹那「大体片付いたな・・・」

「歌実様っ！ご報告します！」

そう思っていると兵の1人が声をかけてきた、

刹那「どうした!」

「実は……のようです。」

刹那「……確かなのか?」

「何度も確認しましたが、間違いありません。」

刹那「そうか……なら今すぐにいくぞ、凧!俺についてきてくれ!」

さて見つけた……歌に何を込めたのか聞かせてもらおうか、

張三姉妹……

張三姉妹SIDE

地和「この辺りまで来れば……平気かな?」

天和「もう声もだいぶ小さくなってるしね。でもみんなには悪い事しなかったかな?」

人和「難しいけど、正直こんな騒ぎになるとは思ってもいなかったわ。潮時でしょう」

大天幕からひっそりと抜け出した天和達は、戦場からだいぶ離れた所まで逃げていた。しかし置いて来た事に罪悪感を覚えているのか、人和は時々後ろを振り向いている。張三姉妹不安げな顔をしていた。

地和「け、けどさ！これで私達も自由の身よね！お風呂も入り放題よ」

人和「・・・手持ちのお金は一切無いけどね」

地和「う・・・」

天和「お金はまた稼げば良いよ。初めからやり直すんだから」

地和「そ、そうよ！3人でまた旅をして、楽しく歌って過ごしましょうー！」

人和「そして、大陸で一番の「行かせるわけにはいかねえよ。」え！？」

????「張三姉妹だな、おとなしく捕まってもらおう・・・」

話が盛り上がる三人の前に二人の女が立ち塞がった。

一人は蒼眼の髪が長い美しい容姿をしている女。

もう一人は眼光鋭い傷だらけの女。

共通しているのはこちらを襲う凄まじい威圧感。

だが、なぜか片方の蒼眼の女は怒気をはらんだような表情を浮かべていた・・・

蒼眼の女「手荒なまねしないただおとなしく捕まってくれ・・・」

天和「（ねーねー地和ちゃん何である人怒った顔してるのかなあ？）

地和「（知らないわよ！そんなのこつちがききたいわ！）」

人和「（二人とも黙って！！）・・・断れば？」

蒼眼の女「その時は・・・」

傷だらけの女「私には無手の心得があるからな。

あなた達を無傷で捕まえる事は可能だ。心配せずとも手加減はする。

女が拳を握りしめ、笑顔で告げる。そんな彼女に三姉妹は恐怖を感じた。

「待てテメエ等！俺達の張宝ちゃんに何をしようとしてやがんだ！」

その時、慌てて駆け付けてきた数人の人影があった。

「張角様！ここは俺達に任せて、早く逃げて下さい！！」

「張梁ちゃんの可愛い顔には、指一本たりとも触れさせはしねえぞ！！」

剣を構えた黄巾党の兵が、天和達を守るように立ち塞がった。

天「み、みんな……」

地「どうして……」

人「私達……あなた達を見捨てて……」

「俺達は張宝ちゃん達の歌に救われたんだ!!」

「だから今度は、俺達が張角様達をお守りします!!」

「さあ来やがれ!張梁ちゃん達を守るためならこの命、惜しくはねえ!!」

啞然とする天和達に笑いながら答える兵達。

蒼眼の女「……少し安心したよ。」

怒気をはらんでいた蒼眼の女はつぶやいた、

その時にはもう表情には怒気をはらんではいなかった。

傷だらけの女「え?隊長?」

蒼眼の女「きつと、最初はこの人達みたい、  
純粹に歌に惹かれた人達の集まりだったんだろうな……」

天和「（そうだ、最初はただ歌を聞いてくれるだけで嬉しかった）」  
地和「（いつからだろう・・・勝手に略奪を繰り返す集団になったのは・・・）」

人和「（いつからだろう・・・あの時の気持ちを忘れてしまったのは・・・）」

蒼眼の女「慕われているな、俺としては『歌が人を不幸にするために歌われた物じゃない』  
に歌われた物じゃない』  
それだけで十分だな。」

「歌が人を不幸にするために歌われた物じゃない』  
なぜかその言葉が私たちに重たくのしかかったような気がした・・・

蒼眼の女「呷。」

傷だらけの女「ええ、わかっております隊長。」

蒼眼の女「貴方がたのその覚悟に敬意を表して、本気でやらせてもらおう。」

蒼眼の女は刀を、傷だらけの女は拳をそれぞれ構え、

二人「ハアアアアッ！！」

蒼眼の女が刀を振り、傷だらけの女の手から何かが放たれた。一瞬で地に伏せる兵達。

「「「「「・・・ウウツ」「」」」」」

呻き声をあげる兵達。どうやら死んではいけないようだ。

蒼眼の女「殺すには惜しい人達だからな・・・」

蒼眼の女が呟く。

地和「な、何よあれ！いきなり光って、何か吹っ飛んだわよ！？意味判んない!？」

天和「あのお姉さんも早すぎて何も見えなかったよ。」

人和「・・・諦めましょう、姉さん。あんなの喰らったら、絶対に無事じゃ済まないわ・・・」

怯える天和と地和の前に人和が進み出た。

人和「・・・いきなり殺さないでしょうね・・・」

身体がガタガタと震えている。

人和も本当は怖いのだ。そんな彼女に手を突き出す蒼眼の女。



人和「ッ……!!!!」

何かされるのではないかと思い、目を閉じる人和。

人和「（クシヤッ）ふえ？」

蒼眼の女「怖がるな、って言うのは無理だろうが、安心しろ。悪いようにはしねえよ。」

急に頭を乱暴になでられ戸惑いながらも恐る恐る瞼を開ける人和。瞼を開くと、そこには青空のように蒼い透き通った優しい目があった。

人和「（……なんてきれいな眼なんだろう）／＼／」

蒼眼の女「ん？いやだったか？」

人和「あっ……／＼／」

そう言ってなでていた手を引っ込める。

人和「（何で同性相手に赤くなっているのよ私は!!）／＼／」

蒼眼の女「それでどうする？」

人和「と、投降します。」

蒼眼の女「そうかい、ありがとよ（ニカッ）」

人和「（カアアアアアッ）／＼／」

頭をなでられたことにより赤くなっていた顔がさらに赤くなる。

蒼眼の女「どうしたんだ？顔が赤いけど？」

人和「い、いえ！何でもありません！！／＼／」

蒼眼の女「ならいいけど。それじゃ凧、三人を縛ってくれ」

凧「……」

蒼眼の女「凧？」

凧「は、はい！！何ですか隊長！？」

羨ましそうに人和を見ていた傷だらけの女だったが、蒼眼の女の言葉に慌てて正気を取り戻す。

蒼眼の女「いや、三人を縛ってくれないか？」

傷だらけの女「わ、わかりました」

地和「ちょ、ちょっと！縛るってどういう事！？」

地和が声をあげる。

蒼眼の女「一応君達は捕虜として扱われるからな。流石に自由にしておくわけにはいかないだろう？形だけでも捕縛したようにしないといけないだろう？」

地和「だからって！」

人和「落ち着いて姉さん。この人の言う通りよ」

納得いかない様子の姉を抑える人和。

地和「何よ！そう言うあんただって、ちょっと優しくされたからって気を許し過ぎよ！！」

人和「わ、私は別に・・・」

地和「頭なでられて顔を真っ赤にした癖によく言うわよ。」

人和「う・・・」

地和「ね？天和姉さんもそう思うでしょ！？」

地和が天和に同意を求めるが

天和「ねえねえお姉さん。私もなでて欲しいな〜」

まるで友達に話しかけるように蒼眼の女に声をかける姉の姿を見て肩を落とす。

地和「ちよつと！姉さんまで何やってんのよ!？」

天和「だって、人和ちゃんが羨ましいんだもん。お姉さんカッコいいし、仲良くしたいな〜」と思って・・・

地和「も〜〜!!何なのよ〜!!」

蒼眼の女「・・・お前ら一つ言っておくぞ・・・」

そう言いながら髪を結び始めた。

結び終わると顔立ちが整った男に見えていた。

蒼眼の男? 「俺はお・と・こだ!!!」

張三姉妹「「「「「」」」」」

しばらくの沈黙・・・そして、



第三十話 黄巾党の最後 何度も言うが俺は男だ!! (後書き)

笑い猫「やっと投降できた・・・遅れてごめんね(テヘツ)」

刹那「・・・なんかむかつく」

笑い猫「怒るな怒るな、それとまた少し投稿スピードが落ちるッす」

刹那「テメエまた遅らせる気かよ!?!」

笑い猫「大体二週間くらいかねえごめんねえいww(HAHHAHA  
HHAHA)」

刹那「テメエのその怠慢をぶち殺す!!」

第三十一話 涙 歌に何を込める？（前書き）

笑い猫「やっと実習が終わったぞー！ー！ー！ー！ー！」

刹那「やっとか・・・これで話は進められるんだろうな？」

笑い猫「少しだけ更新スピードが上がるぞ、だけどネタが・・・」

刹那「・・・まあ・・・頑張れ・・・」

笑い猫「と、とにかくとりあえずどうぞー！ー！」

### 第三十一話 涙 歌に何を込める？

華琳「・・・で、貴方達が張三姉妹？」

張宝「そうよ！何か悪いの！！」

華琳「・・・季衣、間違い無いかしら？」

季衣「はい、僕が見たのと同じ人達です。」

俺が男だということに三姉妹はかなり混乱した後、華琳の本陣に連れて来ていた、

現在、張三姉妹に対して尋問してる所であり、前に季衣が張三姉妹の歌を聞いたことがあったため、確認をとっていた。

張角「私達の歌、聞いてくれたんだ！！どうだった？」

季衣「うん！すっごく上手だったよ！」

出会ってまだ間も無いと言うのに、季衣と張角は意気投合していた・・・仲いいな・・・

刹那「それで？どうして旅芸人のあんたらがこんなことになったんだ？」



張梁「それは・・・色々あって・・・」

色々・・・ね。

刹那「・・・あんたらの行動で多くの者が傷つき、大切な者を失った者もたくさんいる・・・それはわかるよな？」

張宝「それはみんなが勝手に・・・！」

刹那「たとしても、だ。お前らの歌が発端となり、たくさんの方が不幸な目になっちまった、

多くの人たちが悲しむことになっちまった・・・これは変わらない現実なんだ・・・」

地和「う・・・」

刹那「死んでいった奴らはお前らの歌に惚れこんできた奴らなんだぞ？

それなのに・・・お前らは皆が勝手にやって、勝手に死んだ、なんて言うのかよ・・・

そいつらが死は・・・いつたい・・・なんだったんだよ・・・」

張三姉妹「コッッ！！」「」

目の前にいた張三姉妹は驚いた、なぜなら、

刹那の眼の奥から悲しみを帯びた雫が流れ落ちてきたからである。

今の刹那を見た者はこう思い浮かべるだろう・・・

一人ぼっちの世界でただ声を上げずに泣いている子供と・・・

天和「（なんだかこっちまで悲しくなってくる・・・）」

地和「（何なのよ・・・の気持ちは・・・）」

人和「（見てるだけで辛くなってくる・・・）」

華琳「刹那？貴方・・・」

そんな刹那に華琳は声をかける。

刹那「・・・ああ、・・・すまん、

華琳、先に休ませてもらえるか？」

華琳「・・・いいわよ。今回の貴方はとても頑張ってくれたもの、  
ゆっくり休みなさい。」

刹那「そうさせてもらっよ・・・」

刹那が去ったその場には、華琳たち、うつむく三人の張三姉妹、  
どうしようもない空気漂っていただけであった・・・

その夜・・・

張三姉妹は華琳の徴兵に協力することになり、  
城に帰る道のりの途中、補給地点でテントを張って泊まることにな  
った。

俺はその時、近くの川に来ており、そこには蛍が飛んでいて、  
蛍から発する淡い光を眺めていた・・・

刹那「・・・」

彼女たちの場合仕方がないいやあ仕方ないんだろうが・・・

刹那「・・・たくさん人が死んだ意味は・・・何だったんだろうな・  
・・・」

たくさん人が死んだ。

それを勝手にやって勝手に死んだなんて・・・  
死んでいった人たちが死んだのは何だったんだと思うと無性に悲し  
くなっていたのだった。

それに・・・

刹那「歌が原因になってたか・・・悲しいよな・・・」

俺にとって歌は、誰かが前に進むことができるよう、

誰かが幸せをつかむための勇気を持つことができることを願って歌

に込めている。

だが今回のことは歌が原因で不幸になっていたこと、それは俺にとつて悲しかった・・・

刹那「はあゝ・・・」

ため息をついていたその時・・・

刹那「ッ！！（ハッ！？殺気ッ！！）」バツ！！

紅葉「そこですかさず紅葉ハンマー！！！！！！」  
ズドオオオオオオオオン！！！！

刹那「うおっ！？」

紅葉が自分の大きさの100倍はあろうハンマーで攻撃してきた！！

あつぶね！？つて、紅葉！？何！？その小さな体にそぐわないハンマー！？

どっからだしたんだよ！？そしてクレーターができてっぞ！どんなパワーを持つてんだ！？！？

刹那「紅葉！？いきなり何しやがる！？」

紅葉「・・・だよ。」

刹那「え？」

紅葉「一つはこの頃まともな出番が少ないんだよ……」「ゴゴゴゴ  
ゴツ……」

……なんだ？この威圧は……

紅葉は大きく振りながらハンマーを構える……

紅葉「もうひとつはこの頃暇なんだよおお！！！！」「ドカアアアアア  
アアツ！！！！」

刹那「思いつきりやつあたりじゃねえかつ！！！！」

確かにあまり出ていませんでしたね      by 笑い猫

刹那「何だ今の電波！？」

紅葉「知ったことじゃないんだよおおおお！！！！」

刹那「のぎやああああああ！？誰か助けてえ工工ええええええ  
えええええええええええええええええええええええええええええ  
ええええええ！！！！」

つーか不良！？不良口調になれてますが紅葉さあああああん！！

あの頃の優しい紅葉さんに戻ってええ！！

それから数分後・・・

刹那「ハア、ハア、ハア・・・」

紅葉「ああ、すっきりしたんだよ」（キラッ）」

ああ・・・なに？そのいい汗かきました！ツて表情・・・  
なんか理不尽だ、俺ってこんなのばっかかよ・・・

青藍「憂さ晴らしにはなつたようですね。」

刹那「・・・青藍、何時からいたの？」

青藍「初めからですけどそれがなにか？（にっこり）」

だったら止めるよ。

ああ・・・何と幸せそうな表情してやがる・・・完璧Sだな・・・  
（泣）

青藍「・・・しみつたれて抱え込んでいた不満の表情は抜けました  
ね・・・」

刹那「え？」

青藍「マスター・・・人が歌う理由なんて様々にあります。」

彼女たちのように自分の為に歌う者もいればマスターのように人の為に歌う者、

はたまた気分で歌う者、理由は様々です。」

確かにその通りだ・・・歌に何を込めようが人の勝手だ・・・歌は誰のものでもない、当たり前のことなんだ・・・

青藍「マスターは、貴方は貴方だけの歌を歌えばいい、その時の感情に任せて貴方は貴方だけの歌を歌えばいい、他の人がどんな歌を歌おうと貴方は貴方の歌を歌えばいい・・・

『貴方が貴方らしくあるが為に』」

ツ!!・・・そうだったな、

刹那「そうだったなよな・・・自分で決めたことだったな、やれやれ俺もまだまだなようだな・・・」

紅葉「そのために私達がいるんだよ」

青藍「個としての能力がいかに高かろうと完璧な人間などどこにもいない。

これは当たり前なことですよ?」

刹那「クフフ・・・アツハツハツハッハ！！そらあそつだ。」

これからあいつらがどんな歌を歌うかなんてあいつらの勝手、俺は俺の歌を歌えばいいだけだったのに何勝手に決めようとしてんだか・・・

刹那「あゝあ・・・青藍、紅葉。」

青藍・紅葉「はい。」

俺は今ある感情を・・・

歌に乗せよう・・・

確かに悲しいかもしれない・・・

・  
だけどその歌がずっと同じことを繰り返さないものだと思おう・・・

歌で、また悲しむことがないと信じよう・・・

その願いを歌に込めよう・・・

刹那「歌を歌おう。」

青藍・紅葉「はい(だよ)！マスター！」



【へミソフィア】

【それでも

いたいこの僕に

何ができるって言うんだ

窮屈な

箱庭の現実を

変えるために

何ができるの

・・・】

歌を歌うと周りにいた蛸はそれにあやかる様にホタルが舞っていた・

s i e d

張三姉妹

あの刹那とか言われる男女が出て行った後、私たちは曹操の徴兵をするために協力することが決まった。  
当然私たちは嬉しかったが・・・

地和「助かったのは嬉しいけれど・・・」

天和「・・・泣いてたね・・・あの兄さん・・・」

人和「・・・ええ・・・」

張三姉妹「・・・はあく・・・」「」

悲しみを帯びた滴をこぼした刹那、  
その顔を思い出すたび胸を痛めるような感覚……

天和「ねえ地和ちゃん……何で胸が痛いのかなあ？」

地和「そんなの……知らないわよ……」

人和「死んでいった人たちは一体何だった、か……」

私たちはたくさんの人に歌を聴いてもらいたかったただそれだけだ  
った、なのに……

人和「……どうして……こうなっちゃったんだろう……」

天和・地和「……」

ポツリとつぶやいた、だが答えは返ってくるのがなく、静寂だけ  
がその時間を包み込んでいく……  
だがその時……

【 …… 】

天和「……？ねえーねえー地和ちゃん、人和ちゃん、どこからか  
歌が聞こえない？」

地和「……あ！ほんとだわ、どこで歌ってるかわからないけど……」

」

人和「きれい・・・」

私たちが歌っている歌と同じなくらいうまいが、私達とはなにか重みのある歌であり、ただ、心に残響が響くような歌であった・・・

天和「あつち方から聞こえてくるよ？行ってみようよ」

地和「って天和姉さん！待ちなさいよ！！」

人和「あ！勝手にっ！置いていかないで姉さん！！」

そうやって三人が来た場所は川だった・・・茂みから覗くとそこには・・・

刹那【遠い昔 何処から来たの

遠い未来に何処へ行くの

知らないまま投げ出され

気づく前に時は終わるの

始まりの荒野を独り

もう歩き出してるらしい

僕は灰になるまで

僕で在り続けたい

】

蛍の光が舞うその中心で歌っている刹那と言われる人と小さな女の

子が二人飛んでいた・・・

その光景は何とも幻想的で美しい光景だった・・・

張三姉妹「……」「」

思わず言葉を失った・・・彼女たちのその瞳には、  
曲を奏で歌を歌いつつゆらり、ゆらりと歌にその身を任せ、  
踊っている幻想的な光景から目を外すことはできず、  
ただ、その光景を見入っており、歌にその身を預けることしかでき  
なかつた・・・

刹那【僕は僕のことがよく知れた　い　】

張三姉妹「……ハッ！！」「」

その光景に見入り、歌っていた歌にその身を預けていた歌が終わる  
と、  
まるで夢から覚めたように二人は気がついた。

天和「（すごくきれーだったね地和ちゃん！／＼／）」

地和「（わ、私たちだって頑張ればこのくらい！って言うかほんと  
に男！？」

女にしか見えないわよ！！／＼／）」

人和「（……／＼／）」ぽっ

歌が終わってすぐ天和と地和は小声で話し始めていて、  
人和はに至ってはまだ夢の中にいるようだ。

三人に共通していることは、顔が朱色に染めていることだった。

刹那「……ご静聴ありがとう、そこのお三方？」

そうこうしているうちに先ほどまで歌っていた刹那と言われる人が  
話し掛けてきた。

seid 刹那

刹那「……ご静聴ありがとう、そこのお三方？」

歌い終わり、後ろの茂みに声をかけると、おずおずと張三姉妹が出  
てきた。

天和「えへへ、すごくきれいだったよお兄さん / / /」

地和「ふんっ！まあまあね！ / / /」

人和「…… / / /」

刹那「そうかい、ありがとな・・・」

褒められるのは嬉しいが何で三人とも顔が赤いんだ？まあそれよりも・・・

刹那「昼間は悪かったな・・・あんな言い方して・・・」

張三姉妹「「「え？」「」」

刹那「あんた等だつて好きでこんなことになつたわけでもないのに、あんた等を攻めるようなことを言つちまつて・・・

元を考えてみたら漢王朝が腐敗したせいでもあるんだ。

それなのに・・・はあく、俺もまだまだだな。」

自分が用いる歌に対する思いを相手に押し付けるなんて未熟者の極みだな・・・

そう自己嫌悪していると、三人は近ずいて来て・・・

張三姉妹「「「ごめんなさい！！」「」」

頭を下げて謝ってきた。

刹那「え？」

人和「無自覚だったけど貴方の言う通り、私たちの行動で・・・たくさんの人を傷つけてしまった。」

天和「昼に流した貴方の涙・・・貴方はとても悲しんでいるを見て  
私たちは考えたの。」

地和「ちい達だつて悪かつたんだからこれからは、  
私たちの歌で今生きている人たちを幸せにするために頑張るつて。」

張三姉妹「だから、許してとは言わないけど、あなたにわかっ  
てほしい!!!」

真つ直ぐに俺の瞳を見て、言ってくる。

自分等の行動を思い帰り覚悟をしたのだな・・・それなら、

刹那「・・・まだ自己紹介してなかったな、性は歌、名は実、字は  
奏曲。」

真名は刹那だ。」

張三姉妹「え!?!」

刹那「お前らはそう覚悟し、反省したんだろ? だつたら俺はあなた  
らを信じるよ。」

真名はその信頼の証した・・・あんた等の歌でたくさんの人を幸せ  
にしてやってくれ(ニカッ)。」

晴れやかな笑顔を見せると、

張三姉妹「ツツツ! (ボンツ!) / / / / /」

三人は顔を真っ赤に染めた・・・なぜ？  
すると急にひそひそと話し始めた。

天和「・・・刹那さんすごくかつこいい／＼／＼」

地和「（な、なによ姉さん、こんなのがいいの？／＼／＼）」

人和「（地和姉さん、顔真っ赤／＼／＼）」

地和「（そういう人和だって、真っ赤じゃない！／＼／＼）」

人和「（こ、これは・・・その・・・／＼／＼）《チラツ》」

刹那「???」

こうして張三姉妹との和解はしたのであった、それにしても急にど  
うしたんだろう？

くおまけく

刹那「そう言えば紅葉、そのハンマーどこで？」

紅葉「これは神様が送ってきたんだよ」



あのロリ神か・・・

刹那「何でそんなもん送ってきたんだ？」

青藍「何でも、リリなの見てたら思いついたとか。」

グラーア ゼン！？グラーア ゼンなのかあれ！？

確かあれの威力確か！！・・・ああやばい・・・

この日、こいつらのことをもつとかまってやるうと刹那は誓った。

くおまけその二

華琳「ねえ刹那？昨日あの子たちとどこで何をやっていたのかしら？（ニッコリ）」  
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

刹那「イエ、ナニモアリマセンヨ？」

現在、華琳は顔中に青筋がいつてザ マスクザメロンになってます、俺が一体何をした！？

華琳「そう話す気はないようね・・・だったら・・・」

すると、華琳はどっかの管理局の白い悪魔が杖を構えるように『絶』  
を構え・・・

華琳「O H A N A S H I しましょか (ニツコオオオ!  
!!)」

刹那「イ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
.....」

この日、刹那の木霊が空を貫いた・・・

第三十一話 涙 歌に何を込める？（後書き）

笑い猫「まあこんかいはこのくらいだ、って……刹那？」

刹那「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

笑い猫「……華琳さん」

華琳「うるさいわね！！刹那が悪いんでしょ！！」

笑い猫「だけどこれは……ま、まあこれは置いといて……  
50万アクセス突破！！ユニーク数ももう少しで5万になります！  
！！！！」

刹那「マジか!?!」

笑い猫「おおう!?!復活したか刹那、マジだ、開いてみたらびつくりだ……」

刹那「……次のちゃんと書けてっか？」

笑い猫「……」

刹那「……」

笑い猫「どうしよっか？（泣）」

刹那「何でもいい……書け。」

笑い猫「・・・頑張ります。」

第三十二話 別れ、それは悪夢でもある・・・やるんじゃなかった(前書き)

笑い猫「やつちまったぜ・・・」

刹那「ん？なにをだ？」

笑い猫「んあゝ・・・イヤーなんていうか・・・」

刹那「何だよ、はつきり言えよ。」

笑い猫「じゃあ、はつきり言うぞ？  
女装編以上の物作っちゃった」

刹那「はあ!？」

笑い猫「というわけでどうぞ!..!」

刹那「おいちよつとまて・・・」

第三十二話 別れ、それは悪夢でもある・・・やるんじゃないかった

華琳「・・・『数え役萬 姉妹』？」

刹那「そう、それでいいだろ？」

華琳「しすたーずって何？」

刹那「シスターズって言うのはなあ・・・」

帰ってからすぐO H A N A S H I・・・だめだ！今は思い出すな！深呼吸だ深呼吸！！

ヒツヒツフー・・・落ち着いた。よし、現状確認を・・・

帰ってすぐやることになったのは張三姉妹の名前を決めることになり、

『数え役萬 姉妹』に決定。現在名前の意味を説明中である。

刹那「・・・って言うことだ。」

華琳「ふ〜ん・・・まあいいわ。名前はそれでいいとして・・・まずはみんな御苦労様。あなた達のおかげで黄巾党を壊滅させる事ができたわ。」

全員『はっ！』

華琳「今日やるべきだった仕事や軍議は後日に回します。今日は宴



刹那「どうって・・・最初に言ってたろっ？やらなきゃいけないことがあるって、」

春蘭「しかし！」

華琳「やめなさい春蘭。」

春蘭「華琳様。」

華琳「約束を違える様な恥知らずな真似は出来ない。それに、刹那は元々客将。私の部下じゃないわ。」

春蘭「・・・」

あちゃ〜・・・落ち込んでんな、春蘭。他の奴らもおんなじか・・・

華琳「いつここを立つの？」

刹那「五日後ぐらいだ。あ、そうだ！それとここにいる全員にちよつとした贈り物だ。」ゴソゴソ

俺は懐に手を入れ、ある物を渡す。

華琳「『何でも言うこと聞きます券』？」

刹那「そう、いきなり立つのは何だし、皆に一つずつ私用に付き合



おうと思っとな

あ！でもここに残れとか空を飛んで見せるとか無茶急茶なこと話なしだぜ？」

華琳「プツ・・・わかったわ。ありがたくもらっておくわみんなもいいわね。」

全員『はい！！（キラキラ）』

おいおい・・・やるべきじゃなかったか？何人が眼をキラッキラッさせながら

「阿蘇阿蘇に合った服・・・」とか「カラクリ夏侯惇將軍・・・」とか言ってるぞ？

・・・俺はみんなのパンドラの箱でも開けてしまったかもしれん・・・嫌な予感もするが・・・まあ気のせいだと信じよう・・・

刹那「そ、それじゃあ宴だったな、後でなー」

この嫌な予感は見事的中することになる・・・

一日目・・・公平にするためクチ引きで決めることになり、最初は春蘭・秋蘭・・・

春蘭「おい！早く来い刹那！！！」

刹那「まだ回る気かよ!? もう15件目だぞ!!」

秋蘭「ふむ・・・半分は過ぎたか。」

刹那「うおおおい!! 半分って・・・!! どんだけ回る気だお前ら!!」

春蘭「?だからあと15件だろ刹那?」

刹那「!!・・・春蘭がまともに答えているだと!?!」

春蘭「どう言う意味だ!!」

華琳の服の買い物に来ているわけだが・・・どんだけ買う気だこいつら!?!

こいつらのことを甘く見ていたかもしれない・・・

秋蘭「なんでもいいから姉者、さっさと次に行こう。じゃないと日が暮れてしまっぞ?」

春蘭「おお! そうだな秋蘭! さっさと行くぞ刹那!!」

刹那「ああ・・・わかったよ。」

こうして丸々一日かけて買い物を終了、そのまま華琳のもとに直行するかと思いきや、

自分たちの部屋について1/1スケールの華琳様人形に着せ替えを行うことに……

この日驚いたことは2つ、いや、3つ。

1つは今日だけで服を50着以上買ったこと、

もう1つは華琳様人形1/1スケールあまりにも似すぎていたこと、最後はこの人形は春蘭が作ったということだった。

二日目……この日は季衣……

季衣「兄ちゃん！！おかわり！！」

刹那「あーはいはい、っと、」

季衣「ガツガツモグモグ！」

刹那「うまいかー季衣？」

季衣「すぶおくおいひいよーおいしいひゃん（すごくおいしいよ兄ちゃん！）！」

刹那「……口の中をなくしてから言おうなー、後それと聞き間違えたらおじいちゃんに聞こえるぞー。」

季衣「んぐんぐ（じっくん！）ぷはあ、うんー！！」

季衣のお願いは『いっぱいご飯を食べさせて』、俺が所有している食料から作って季衣が食べているわけだが……

この日だけで所有している食料の1/100（大体70人前くらい）を平らげるとは、  
予想だにしていなかった……

三日目……この日は凧・真桜・沙和の魏の三羽鳥……

この日は午前中に真桜と沙和、午後に凧という風になった。

午前中は沙和、真桜と新しく売り始めたカラクリの部品と服を買うことに……

これで俺の財布はかなり軽くなった。（泣

この時の沙和と真桜はかなり嬉れしそうな顔をしていた……

沙和「えへへ……」

真桜「ぐへへ……」

……訂正、かなり気持ち悪いくらい笑顔だったが抜けていた。

午後になると凧の所に……凧の願いは……

凧「……隊長……」

刹那「……凧……」

見つめ合う二人・・・ゆっくりと近づいて行き、そして・・・

凧「はあああああああ！！！」ドカアアア！！

刹那「まだまだ甘いぞ、凧！！！」

凧「はい！隊長！！！」

凧の願いは『手合わせ』でしたよハイ・・・

こんな感じで午後はずっと凧と汗を流した後、

沙和、真桜と合流して夕食はおいしい料理を振って今日は終了ですよハイ・・・

四日目・・・この日が一番やばいかも桂花・・・

桂花「ふふふ・・・さて、あなたに何をさせましょうか？ふふふ・・・

「・

やばい・・・冷や汗が止まらない！！こいついったい俺に何をさせようってんだ！？

俺は無事でいられるだろうか！？いや、無事でいられるはずではない！！！！

くっ・・・仕方がないこれは奥の手しか・・・

桂花「じゃあまず「お待ちを桂花様！！！」何よこれからってっ時に・

・・・」

刹那「まずはこれを見てくれ。」

桂花「な！？そ、それは！？」

刹那はとあるものを見せる・・・それは・・・

華琳がハンモックで寝ている時の写真（内緒で撮っている）であった。

刹那「これを譲ってやってもいい、だがその代り・・・言わなくてもおわかりでございましょう？」

桂花「・・・いいわよ。」

刹那「交渉成立ですな。（フフフツ計画通りッ！！）」「ゴシヤーンッ！！！」

桂花「・・・あんだ、交渉に乗る私もだけど、かなりの悪ね・・・」

刹那「いえいえ、お代官様ほどではございません」

桂花「だれがお代官様よ！！」

この日は桂花を買収して事なきを得た・・・

五日目・・・最後は華琳であった・・・なぜだろう桂花以上に嫌な予感がする

華琳「では刹那、私からだけどまずこれを飲みなさい。」

そう言っ出てされたのは1杯の水と2錠の錠剤・・・

刹那「なあ、これ何の薬だ？」

華琳「飲んでみればわかるわ」

刹那「ものすごく不安なんだが・・・」

華琳「飲みなさい？」

刹那「でも」もう一度言うわ、飲みなさい。(ニッコリ。「サ、サ  
ーイエッサー!!」)

そのニッコリはやめてくれ!!ものすごく恐怖心が!!  
ともあれ、俺はその薬を飲むと・・・

刹那「ウグアアッ!?!?」

なっ!?!か、体が熱い!?!?

刹那「か、華琳!?! いったい何の薬を!?!」

華琳「しばらくすれば落ち着くわ、安心しなさい。」

安心できねえよ!?! 何の薬なんだ!?!?

混乱しつつも数分過ぎればその間隔はなくなった・・・

刹那「ふう、やっとおさまった・・・ いったい何の薬だったんだ?

華琳「

華琳「それについては自分の股を触ってみればわかるわ。」

え? 何で股を(さわっ)・・・へ?(さわさわさわっ!!)・・・  
・・・  
アツレエエエエエエエエエ!?!?!?

刹那「・・・俺の男の象徴がねえええええええええええ!?!?!?!」

華琳「ふふふ うまくいったようね・・・まさかほんとだったとわね。」



刹那「俺は実験台にされたのか！？それより俺にいったい何を飲ませやがった！！！！」

華琳「青藍にもらった『性転換薬』よ？効力丸1日、ちなみに青藍から、

『私は震えるマスターが大好きで面白そうだったから』だそうよ？」

刹那「青らああああああん！！！！いたいなんつうもんのおおおおおおお！！！！！！」

青藍「いえいえ どういたしまして」

刹那「褒めてねえよ！！」

何してくれちゃってるのこの駄デバイスは！？下手したら俺変態さんになっちゃうでしょうが！！

華琳「フッフ、次はこれに着替えなさい。」

華琳が次に出したのは・・・

刹那「ぶっ！？やだよ！それ女ものの服じゃねーか！！」

しかもかなりきわどいぞそれ！？そんなきわどいの着たら・・・っ  
！！

まずい！！断固拒否せねばって・・・！！

刹那「な・・・に！？か、体が勝手に！？！？」

華琳「フッフ、あなたに二錠渡したでしょ？もうひとつが、  
『強制承諾薬』って言って、

意識はあるけど飲まされた相手の言うことを聞いてしまう薬らしい  
わよ？

これも効力が丸一日よ。」

刹那「何でそんなものがあるんだよ！！」

青藍「それについてはこれを見ればわかります。」

・・・なにに？』この頃暇何で暇つぶしに送っとくでー by 神  
様』・・・

刹那「ふっつぎっけんああああああ！！！！！！」

あの糞っロリ神いいいい！！！！いつか締める！！！！！！！！！！

華琳「何でもいいから早く着替えなさい」

刹那「あつ!? いやだああ!! でも体が勝手に!?! って何見てんの!?

ストリップショーして喜ぶような手合いじゃ俺ないよ!?

華りいいいん! 見るなあああ!! 見ないでええ!!! あ

.....

着替えをねつとりと見られた後、薬の副作用で感度が上がってしまったっており、

華琳にねつとりと体を弄ばれてしまった・・・「ひゃふん!?!? そ、

そこわあ・・・っ」

と反応すると「うふふ・・・かわいいわね刹那」華琳は喜び俺は・

.....

次の朝、

「うう・・・汚されちゃった・・・グスツ（泣）」とつぶやきながら

『ウツタエテヤル』、

と地面になぞっている刹那が目撃され、

その目撃者の屍の山が出来てたそうな・・・

ちなみに青藍は・・・

青藍「フフフ・・・良いコレクションができたわ、この調子でどんどん増やせればいいけど、」

紅葉「青藍、何見てるんだよ?」

青藍「貴方が見なくてもいいモノよ紅葉? さあ、もう遅いから寝ましようか。」

紅葉「うん、わかったんだよ。」

こんなやりくりをしていたそうなの……  
まるでどっかのお母さんだね……

第三十二話 別れ、それは悪夢でもある・・・やるんじゃないかった（後書き）

刹那「ふう・・・くう・・・っ」

華琳「ほら我慢しないで刹那・・・」くちゅ・・・

刹那「ふい・・・ああ・・・くう・・・だ・・・め！華・・・琳っ」

華琳「ふふふ さすがに良い声で鳴くわね」

笑い猫「うわ／＼／＼やってんな・・・さすが、

魏の霸王にして百合の霸王・・・

2人のことはほつとこう・・・

あ、そうだった！

次はちよつとした番外編！

少し前に戻ります！！

劉備編はまだまだ先だ！！」

第三十三話 迷子を発見！仕方ない・・・一緒に歌うぜ？〈改〉（前書き）

刹那「・・・（めそめそ）」

笑い猫「いい加減泣きやめ、うつつうしい。」

刹那「原因となった諸悪の根源がお前が言うか!!!」

笑い猫「何を言ってるのかな〜ん？」

実行したのは華琳さんですけど？（にやり）」

刹那「うがあああああああ!!!!!」

笑い猫「暴れているバカはほつといてどうぞ」

第三十三話 迷子を発見！仕方ない・・・一緒に歌うぜ？〈改〉

これは雪蓮に合う前のお話でござるよ・・・

刹那「ござるって何だござるって・・・」

紅葉「マスター？誰に話しかけておるんだよ？」

青藍「紅葉、見てはいけませんよ。マスターは疲れてるから・・・ほろりっ

刹那「何気にひどいなおい！！」

現在、街や村を転々と旅を続けていて、情報収集のため街に立ち寄っている。

気がついたことがあるね・・・どこもかしこも食糧不足が多いね。

その理由として賊が多いこと、税金が高いことだね。

県令の奴ら相当腐ってる奴ら多いよ、あー胸糞悪。

そう思いながらも街を散策していると・・・

紅葉「あれ？」

刹那「ん？どうしたんだ紅葉？」

紅葉「マスター、あれどうしたんでしょうね。」

刹那「あれ？」

紅葉が指を指す方向を見てみると、子供達がいるが、  
1人の女の子が泣いていて、その子を囲むようにして、  
周りの子供達が何やら困ったようにしつつ相談をしている……

紅葉「行ってみるんだよー!!」

刹那「あ！おい、勝手に！ったくー!!」

青藍「紅葉……後でお仕置きが必要なようね……フッフ……」

刹那「青藍……恐っ!?!紅葉……かわいそうに、  
合唱ちーんって、  
何でもいいがさっさと追いかけるぞー!!」

俺は紅葉の後を追いかける……

side                    ????

????「お母あーさん!!ウウー、グスン。」

「なあ、そんなになくなよ。」



「おまえのかあちゃんきつとみつかるって、」

「でもどこにいるかわかんねーんだろー。」

「じゃあどつすんだよー。」

わたしはおかあさんたちといっしょにおかいものにきていたの！  
でもとちゅうではぐれちゃって、

さがしてただけどいつまでたつてもみつからなくて・・・

ふあんになってないっているとこのこたちがしんぱいしてきてくれ  
ているけど、

それでもふあんで・・・

?????」「つぐす、ふえ~~~~~ん!!」

おかあさんいなくてふあんでないと・・・

紅葉「どうしたんだよ〜?」

?????」「ひつく・・・え?」

てのひらくらいのおおきさのおんなのこがはなしかけてきたの！

「うおーすげー!とんでるぞー」

「わあーかわいいー」

「なんなんだーあれー」

まわりのこもびっくりしてるけど、わたしもとてもびっくりしてるの！

紅葉「ねえねえ、名前はなんていうんだよ」

璃々「わたし？わたしは璃々っていうの・・・」

紅葉「ふうん、じゃあ璃々ちゃんは どうして泣いてるんだよ？」

璃々「うん、・・・おかさんとおかいものにきていたの、  
だけどはぐれちゃって・・・ぐす」

紅葉「そうなんだ、うん」おいこら紅葉！！「あ、マスター」

するとあとからついえるようにそらのようにあおいめをしたおにいさんがきて・・・

刹那「「あ、マスター」「じゃない！勝手に動き回るな、はぐれたら大変だろうが。」

紅葉「マスターはすぐ迷子になっちゃうから？」

刹那「・・・青藍、遠慮はいらん、全力でお仕置きしてやれ。」

青藍「かしこまりました、マスター」

紅葉「うにゃ~~~~~!!ごめんなさいなんだよ~~~~~!!」

そういつてどこかにいってしまったの・・・

刹那「で?どうしたんだ、お嬢さん?」にかっ」

するとおにいさんがとてもやさしそうなあおいめをむけてきたの・・・

side

刹那

紅葉に関してはあれでよし・・・さてと、まずは・・・

刹那「どうしたんだ、お嬢さん」にかっ」

泣いていた青い髪をした女の子に話しかけてみた、

「????」うん、おかあさんがいないの。」

あゝ……なるほど迷子か……

刹那「そうかい、それじゃあ名前は？」

璃々「えっと、璃々っていうの。」

刹那「璃々か、良い名だ。俺は刹那だ……璃々、お母さんに早く会いたいか？」

璃々「うん!！」

刹那「そうか、なら……なあお前ら、ちょっと手伝ってくれるか？」

「え? いいけど、」

「なにすんだよー」

「なになにー」

聞きわけが良くて助かった……こつちから探せないなら、

あつちに見つけてもらうしかないだろ?

うかつだったわ・・・少し目を離れた際に璃々とはぐれるなんて・・・  
早く見つけないと、あの子の身に何かあったら!!

敵顔「少しは落ち着け紫苑、焦っていても見つかるものも見つかりにくくなってしまつぞ。」

魏延「そうです！それに璃々のことです。きっとどこかで無事でいるはずですよ！」

黄忠「そうね・・・ありがとう2人共。」

落ち着かないとそう思っているがなかなか落ち着くことはできなかった。

黄忠「(璃々・・・)」

我が子の名を心の中でつぶやいたその時、

びびびわ・・・がやがや・・・

黄忠「・・・?」

巖顔「・・・なんじゃ？」

魏延「なにかあったんでしょつか？」

急に人の流れが速くなってきた・・・いったい何が？

「おい、あつちで子供たちと一緒に綺麗な姉ちゃんが歌ってるぜ？」

「歌がすげーうまいぞ。」

「がき共もなかなか歌がうまいぜ！観に行ってみようぜ！！」

巖顔「子供たちじゃと・・・？はっ！！」

魏延「もしかしたらそこに璃々が！！」

黄忠「！！璃々っ！！」

そこに璃々がいるかもしれないと2人がつぶやくと同時に、歌っているとされている場所に駆けだす・・・  
着いてみるとそこには・・・

【なくす事が 拾うためなら  
別れるのは 出逢うため

「さようなら」のあとにはきつと  
「こんにちは」と出逢うんだ

緑色芝生に寝ころんでいたい  
動物も一緒にゴロゴロしたい

】

璃々を見つけることが出来た、そこでは青い眼をした女の人と一緒に歌を歌っていた・・・

巖顔「これは・・・なんと・・・」

魏延「・・・すごい・・・」

後から追ってきた2人同じことを思っただろう・・・

子供たちはとても楽しそうに歌っていて、それはあまりにも美しく、  
儂い光景・・・

税が高く、賊に襲われることが多くあり、

悲しみの多かった人々の心に温かな風が吹くような歌・・・

その歌を聴き涙を流す者もいれば、優しく微笑む者、覚悟を決めた  
ような眼をする者、

様々いた・・・

その光景、歌を言葉いい表したとしたのなら、こつ思い浮かべるだ  
ろつ・・・

『人々の希望』と・・・

side

刹那

歌い終わると・・・

「」「」「わあああああああああ！！！！！！！」「」「」

すごい声援だね。

まあ今の時期だと辛い目に会ってる人が多いから子供たちの歌は結  
構癒されると思うねえ。

俺としてもかなり嬉しいよ、うん。

璃々「あっ！おかあさんっ！！」

刹那「おっ！見つかったか！！」



うん、狙い通りだねえ。来ると思ってたぜ。

子供ってもんは集まって遊んでいることとか多いからねえ、こっちが何か子供達と他の人たちが騒ぐくらい大きなことをしていたら、

それを聞きつけて璃々の母親が来るって寸法だ。

子供集まる所に我が子あり、ってか？まあ何でもいいや。

????「璃々!!」

璃々「お母〜さーん!!」

????「勝手に言っちゃだめでしょ？心配掛けて・・・」

璃々「ごめんなさーい・・・」

無事再会できてよかった、よかった

刹那「お母さん見つかってよかったな璃々。」

璃々「うんっ！ありがとー刹那お兄ちゃん!!」

ピシッ!・・・



刹那「・・・青藍いつの間に戻ってきた？そして紅葉は？」

青藍「ついさっきです。そして紅葉はあっちです。」

指を指した先を見てみるとそこには・・・

紅葉「・・・燃え尽きたんだよ・・・真っ白に・・・」

刹那「さっきの間にいったい何があった!？」

青藍「・・・知りたいですか？(ニツコリ)」

刹那「・・・やっぱりいいです。」

本当は知りたい!!

あんなに体中真っ白になって体から生気があんまり感じられなくなるまでいったい何があった!？

只知道ってしまったら自分の中にある何かが壊れそうだ・・・(

ガタガタブルブル

青藍「・・・恐ろしい子!!」

????「あ、あの〜?」

刹那「ん？あ、ああ、すまない、騒いじまって・・・」

「???」「いえ、それよりもありがとうございました。」

刹那「璃々のことか？構わなねえよ。」

「???」「それでもです。貴方がいなかったらどうなっていたことか・  
・  
・  
それでお礼をさせて欲しいのですが・・・」

刹那「お礼？いや、別にいいよ、お礼がして欲しかったからやっ  
ことじゃねえしな。」

それにもうこの街を離れるとこだったし、まあ、璃々が無事だった  
からよし！

って言うことにしませんかねえ？」

「???」「ですが・・・」

刹那「ん〜・・・じゃあまた会うような機会があったらその時に、  
っていうのはどうですかねえ？」

黄忠「・・・わかりました。それでは、今は名前だけを名乗ってお  
きます・・・」

私は黄忠と言います。」

刹那「俺は歌実だ。ではな、また会う日があったらお礼はその時だ。  
」

璃々「お兄ちゃん、いつちゃうの？」

刹那「ああ・・・だがまた会える時が来るさ、きっと・・・」

璃々「うん・・・」

刹那「ああ、ほれほれ俯くんじやない！うん・・・あ！そうだ、俺の真名を預けてやるう。」

覚えてりやまた会う機会が来るだろう？」

そう言つて、頭を撫でてやると・・・

璃々「え！いいのー！？」（ナデナデ）

刹那「ああ、俺の真名は刹那だ。」

璃々「ありがとー 刹那お兄ちゃん」

刹那「そうそう、子供は笑顔が一番だ。」

納得してくれたか、まあ必ず会つて言う約束みたいなもんだし？  
さて行くか・・・

璃々「お兄ちゃん！！またねー！！！！」

刹那「ああ！！また会おう！！！！」（ニカッ）

俺は満天の笑みでその場を去つた。

別れ際に璃々の母親と傍にいた2人が顔を赤くしていたような？ま

あ気のせいだろう・・・

しかし気になることがあるな・・・

刹那「黄忠か・・・どっか聞いたことがあるようなないような？」

第三十三話 迷子を発見！仕方ない・・・一緒に歌うぜ？〈改〉（後書き）

笑い猫「つとまあこんな感じですよ

こんな感じのを後に2、3話くらいだします。

「ごうご期待ー！」

刹那「・・・期待も何も単なる書き忘れ編じゃねえか・・・」

笑い猫「ギクツ・・・な、なんのことやら・・・」

笑い猫「少し書き直させてもらったぜ・・・思いつきで書くもんじやねえな・・・」

刹那「この小説自体思いつきなのに何をいまさら・・・」

笑い猫「（グザツ）・・・悪かったな。」

50万件突破記念！！ 刹那の覚悟はいろいろ・・・（前書き）

笑い猫「前に書いたけど50万件突破したぜ！！  
それを祝してちよつと書いてみたぜ」

刹那「かなり短いかな・・・」

笑い猫「仕方ねえだろうがよ！？ギャグもシリアスも勉強中なんだよ！！」

刹那「お前にもつと文才があればなあ・・・」

笑い猫「・・・そーかそーか・・・指摘ありがとう・・・  
お礼に少し予言をしておいてやろう・・・」

女の嫉妬は山よりも高く、海よりも深いんだぜ？」

刹那「????どう言う意味だ？」

笑い猫「まあ楽しみにしておくといいぜえええ・・・  
げえへっへっへっへっへっへ・・・」

刹那「（ぶるるっ）・・・????」



50万件突破記念！！ 刹那の覚悟はいろいろ・・・

そこには屍の山・・・

血で汚れた大地・・・

その場で立っているのは・・・

返り血を浴び、血の海に汚れたようになってる青い目をした武人が一人立っていた・・・

刹那「あゝ気持ち悪・・・体中血でドロドロになっちまった。」

紅葉「マスター・・・仕方ないと思うけど恐いんだよ・・・」

刹那「仕方ねえだろ・・・やらなきゃこっちがやられる、死ぬわけにはいかねえし、

何よりさっきのみたいなやつらの場合生かしておいたら同じようなことをして、

不幸見る奴が増えるだけだ。

奪うことに快感を覚えてしまった者は人の皮を被った獣と同じだ、そんな奴らを生かしておくほど・・・俺は甘くねえよ・・・」

紅葉「マスター・・・」

刹那「だからこそ、俺は剣を振う、槍を振う、弓を射て・・・殺す。そして俺は両手に届く範囲の奴らだけは救って見せるさ・・・その手が届かなくて、悲しむ者がいるのなら俺は歌を歌い、

生きる覚悟を持ってもらう。精一杯・・・生きてもらうな・・・」

紅葉「・・・うん、わかったんだよマスター。でも、」

刹那「ん？」

紅葉「一人だけで抱え込んだじゃいやなんだよ」

青藍「その通りですよ、自分だけで抱えていけばいずれ壊れてしまいます・・・」

ですので忘れないでください。

私達も付いているということを、」

刹那「フッ・・・ありがとよ。」

まったく・・・最高だな、俺の相棒は・・・

刹那「さて、ここでちんたらしても意味ねえな、旅を再開するでしょうか、」

青藍「その前に体の血を落としてからにしてください、

今のマスターは『歩く美少女ゾンビ（笑）』になってますよ。」

ズコッ！・・・おい！！

刹那「何で美少女ゾンビなんだよ！？俺は男だぞ！！しかも（笑）」

ってなんだ！（笑）って！！」

紅葉「それこそ仕方ないんだよ　誰がどう言おうとマスターは女の子にしか見えませんから」

刹那「だから俺は男だつつつの！雄だ！　もちろんとついとるわ！！！！」

青藍・紅葉「……女の子に男の　がついてるですって（だよ）！？ガールズラブ……」

刹那「俺はどうあっても百合なのか！？女なのか！？男であっても女のか！？！？」

きつとあれですよ……『バカとテストと召喚獣』にあつた、性別は秀吉と同じです

刹那「何だ今さっきの！？秀吉つてだれ！？つて言うか性別秀吉！？！？」

たまに聞こえるアレは一体何なんだ！？！？！？

青藍「回答その一、『バカテスト』のキャラクターです。

回答その二、性別秀吉というものは第三の性別のことです。

回答その三、結果的にマスターは男女だということが確定しています。」

あれえ！？しゃべり口調が『とある魔術の禁書目録』のサーシャさんになってますが！？

刹那「ってやっぱり俺は男女の立ち位置にしかいられないのか！？しかも性別で男女に確定されてんのかよ！！」

青藍「続けて回答その四ですが、先ほどの、神様からのお知らせです。」

刹那「あれえ！？スルー！？！？ってロリ神だとおおお！？！？元のを作った諸悪の根源じゃねえか！！」

あの野郎・・・どっから突っ込んでいいのかわからなくなっちゃまったじゃねえか！！

紅葉「言うこと欠いて何でそこを突っ込むのは何でなんだよ・・・」

刹那「何でもええわ！！チクショウ！！絶対男女の立ち位置のフラグは確実に折るからな！！」

この日、新たに覚悟を決めた刹那であった……

刹那「変なナレーション入れんな口リ神！」

なんでわかつたんや?!?!?

刹那「普通にわかるわ糞神iiiiiiiiii

」

……

50万件突破記念！！ 刹那の覚悟はいろいろ・・・（後書き）

刹那「確実に折ってみせる！！」

笑い猫「まあ頑張んな（絶対折れないと思うけどな）」

刹那「ん？なんか言ってたか？」

笑い猫「いや、別に？それよりも

これからもがんばって書きますぜよ！！

まだまだ未熟ですがよろしくお願ひします！！！！」

第三十四話 覗かれた？ 淑女とは ここにいないぞう・・・ (前書き)

刹那「なあ、50万件突破記念とかやってたけど・・・  
内容って関係あったか？」

笑い猫「うん、なかったね。とりあえず乗りで書いたただけだから」

刹那「・・・この小説大丈夫だろうか・・・」

笑い猫「さあ？」

第三十四話 覗かれた？ 淑女とは ここにいないぞ？・・・

刹那「あゝ、良ゝい湯ゝだゝな ってか、」

紅葉「マスター、少しオヤジ臭いんだよ・・・」

青藍「紅葉、マスターももうそんな年頃なんですよ・・・  
そんなマスターを見捨てないで頑張っていきましょう。」

刹那「少し気分で言っただけ言われようだ・・・」

さっきのカオス、もといグダグダが終わった後、

さすがに返り血を浴びすぎて血の匂いでやばいと気がついたため、  
近くの川に来て、ドラム缶を出して川の水を入れお湯を沸かしてド  
ラム缶風呂を堪能していた。

なんで「天狗之隠蓑」の中にドラム缶があつたか不明だが、  
使えるものは最大限に活用させてもらう。

刹那「ふいゝ、そんじゃまあとつとと出ますか。」

紅葉「え？もう出るんだよ？」

刹那「あのなあ、ここは川だぞ？いつ誰が来るかわからねえだろ？  
しかも所々馬の足跡があるからな、誰かが頻繁にここで馬を洗っ  
てるってことだ。」

さっさとしねえと見られる可能性だっただけあるんだぜ？」



青藍「なるほど、つまり女の子でいえば『キヤーエッチ』のネタです  
ね。」

刹那「俺男の子だからね!？」

青藍「ですから女の子と言いましたよ?」(ニヤニヤッ)

グウ「どこ行っちゃって女扱いされるから反応してしまっ  
アレ?自分で言ってる違和感がなくなってきたことがとても悲しく  
なってきたや」(泣)  
「何でもいいからとっ」と出よう。

そう思い、ドラム缶風呂から出て体を拭き始めたその時・・・

刹那「はあ、

さっぱ」(ガサガサッ)さして、ついたぞ麒麟。今きれいにして  
や、へ?」え?」

刹那「・・・」

「????」

・ 俺は固まった、ポニーテイルの女の子が馬を連れて現れたからだ・

Hey! Hey! Hey! ちょっと状況を確認しようZE?

1、俺は頭から拭いていたからタオルは首に掛けている。つまり上から下まで隠すものなし、

2、相手は女、

3、(自分で言うのも嫌だが)俺の容姿は女に見える、

4、だが俺には、結構でかいマグナムがついてるZE?

5、結果【????】・・・何が起きる?

????」 × ~~~~~ つ!!? うう・・・う

うわあああああああああああつ!!!!!!!!」

とりあえず一言、せめて人に分かる言語で話そう?

叫びに叫んで数分後・・・

刹那「え、え」と・・・」

????」~~~~~ツ//」

「ごめん・・・これどうすればいいの？叫ぶだけ叫んだら顔真っ赤にして俯いたままなんですけど・・・」

刹那「・・・なあ、大丈夫か？」

「???」「っ!!!ご、ごめん!!あ、あたし誰かいると思わなくて風呂に入っていたなんて知らなくてその、あなたのあれ見ちゃって・・・っ!!!(ぐぼんっ)~~~~~//」

刹那「い、いや!事故だったし仕方なかったし、って本人の前で俺の分の何をネタ上げないでくれよ!!!」

「???」「は、始めてみたんだから仕方が・・・(カア~~~~)」

刹那「思い出すなああああ!!!むしろ記憶の中から消去しやがれえええええ!!!!!!」

話し始めてくれたと思ったらこんな会話しかできねえのかよ!?!この気まずい空気何とかしてくれる人いませんか!?!?」

そう思った瞬間・・・

「???」「どこにいるぞ~~~~~!!!!!!」

・・・誰?

刹那「え〜つと、どなた？」

馬岱「えへへ〜 蒲公英はねえ、馬岱って言うんだよ よろしくね  
」

刹那「あ、どうも。歌実です。」

馬岱「よろしくね あっちにいるのは翠お姉さまは馬超っていうんだよ。  
」

馬超「〜〜〜／／／」

まだ赤いまんまだよ・・・

馬岱「そろそろ落ち着きなよお姉さま、始めてみたのはわかるけどさ〜  
」

馬超「む、無理を言うな蒲公英！！／／／」

刹那「ちよつと待て、何でそのこと知ってやがる！？ってまさか！  
」

馬岱「えへへ〜 お兄さん綺麗なのになかなか大きかったね／／／  
（ポッ）

うおおおおおおおおいっ！？！？

刹那「お前も見てたのかよ！？ってその詳細を思い出すように顔を赤らめるなあああ！！！！」

馬岱「だって、蒲公英初めてだったんだし」

うおおおいつ！！場をさらに混沌に陥れていくだけじゃねえか！！！！ツハ！？

この小悪魔のような感じ・・・うちの青藍と一緒にだ！！！！

青藍「マスター、なにか言いましたか？（ニツコリ）」

刹那「イエイエ、ナニモ？」

だからなんで思ってることが分かるんだよ！？

そこからさらに場をひっかきまわされ、馬超は人のアレについて怒りながら怒鳴り、それを聞いた馬岱は「クツシツシツ」と笑いながらからかい、俺は俺で場が収まるまで姉妹の俺のアレの話を泣く泣く聞いているしかなかった・・・

ほんとに泣きたくなってきたよ・・・俺・・・（泣

場が収まった後、二人揃って正座しております・・・誰にとって？意外や意外、紅葉に・・・

紅葉「貴方達は嫁入り前の淑女でしょうが！

なのにかかわらず殿方の目の前でするような話ではないでしょう！そもそも女と言うのは・・・」

口調がかなり変わったな。いや、それ以上に性格がガラツと・・・まるでどっかの先生みたいだなぁ、と近くで聞いているしかできなかつた。

（別に違うんだからね！俺は断じて紅葉が怖かつたわけじゃないんだからね！？）

紅葉のお説教が終わると、二人とも精根尽き果ててぼろぼろになっていた・・・

刹那「え〜っと、その、なんだ、・・・お疲れ様？」

馬超「・・・あなたにも迷惑かけたな・・・」

馬岱「ごめんなさいい・・・」

・・・もう一度言う、この空気誰か何とかしてくれる人いませんか？・・・

馬袋「……」「……」なんでもできるのか？」「……いないぞ」「……」

うん、そうだろうね……

続く……

第三十四話 覗かれた？ 淑女とは ここにいないぞう・・・ (後書き)

刹那「・・・続くのか？」

笑い猫「ああ、ギャグとか考えてたら中途半端になったからなあ・・・

あと、馬超の話が終わったら次は趙雲の話も書くつもりだ、当初予定してたよりも長くなるな・・・必然的に劉備の話に入るのも遅れるなあ」

劉備「そ、そんなあゝ・・・」

笑い猫「だって・・・蜀つつたらかなり個性的な人多すぎて難しいんだもん！」



第三十五話 馬騰の治療 また会おう!! (前書き)

笑い猫「うだー・・・学校が始まったよー(泣)」

刹那「まあえらいわなあ。」

笑い猫「しかも更新スピードが落ちるっす・・・ベンキョウムツカ  
シイヨ。」

刹那「片言になってるぞ?」

第三十五話 馬騰の治療 また会おう！

どうしようもない空気を脱した後・・・

刹那「本当にいいのか？事故でだったから別に気にしていないんだが、」

馬超「いや、そうだとしても騒いで迷惑かけたからな・・・このくらいのお詫びはさせてくれ。」

馬岱「そうだよお兄様 遠慮する必要はないよ。」

刹那「なら良いんだが・・・」

今、俺は馬超達の城に来ている。

二人が騒いで迷惑をかけたお詫びとして城に泊まらせてもらえることになった。

????「あんたかい？娘達が迷惑をかけてしまったのは、」

刹那「え？」

後ろから声をかけてきたのは片手に杖をついた女性だった。

馬騰「私はここ西涼の頭領をやつてる馬騰だ。娘が迷惑をかけてすまなかつたねえ。」

刹那「いや、もういい・・・

俺は歌実、旅人をやっている。」

片手に杖をついているが隙がまつたくない・・・できるな、

馬騰「そうかい、だがあんたはただの旅人ではないねえ？」

刹那「っ！何でそう思う？」

馬騰「まずあなたの立ち振る舞い、

常にどこから切りかかれても対処できるような歩き方をしていること。

それと体を洗ったようだが、血の匂いがする。

かなりの人を葬らなきゃ、それだけ濃厚な血の匂いはしないだろう？」

・・・さすがは、漢の征西將軍。

ちよつと会っただけでここまで看破して見せるとはな、

おかげで傍にいた馬超達が警戒し始めてるな・・・

刹那「へえ、さすがだな。それで？俺をどうするつもりだ？」

馬超達は武器を掴んで臨戦態勢をとり、  
いつでも切りかかることができるようにしている。  
捕まるのは勘弁だな、だからと言って反撃するわけにもいかないし、  
どーすっかなー・・・

馬騰「ん？何にもする気はないよ？」

三人「「「へ？」「」「」

一瞬即発の空気だったのに馬超達と一緒に思わず間抜けな声が漏れ  
ちまったぞ？

馬騰「私を甘く見るんじゃないよ？だからといって何もする気はな  
いよ。

あんたはほかの奴らと違う芯の通ったような眼をしているからねえ、  
賊のような悪事を行っているような輩ではないくらいわかるさ。  
大方、この近隣に賊を狩ったのはお前さんであろう？  
そうであればあんたから発する血の匂いも納得するさ。」

馬超「ちよつと待つてくれ母様、さすがにそれは無理じゃないか？  
数は確か5000位だったけ？

それを一人でやるなんじゃ、違うな、正確な数は7000だったぜ？  
へ？」

刹那「森で食料を調達していたら村を襲おうとしてる連中を見つけ  
たからな、

片っぱしから殲滅しておいた。」

もっと正確に言うとは逃げられないように罾ワイヤーソーを張り巡らした後、  
数人闇討ちして「裏切り者がいる」と偽の情報を流して内乱を起こ  
させる。

仲間同士で殺し合い、

それに恐怖して逃げ出そうとしたものは罾ワイヤーソーの餌食になった。

森の中は薄暗かったので、

恐怖は伝染しやすいことを利用した心理戦をただけで何だがね。

ちなみにワイヤーソーは能力で作ったものだ。

刹那「まあそれでもうち1000人以上はぶった切ったからねえ、  
返り血でドロドロになったから体を洗つてると・・・覗き姉妹が現  
れたってことだ。」

馬超「の、覗きなんて言うなああああつ！！！」

刹那「言われても仕方ねえだろうが！」

人の目の前で俺のアレがどうの口論されて見る！

こっちは精神的にぼろぼろだったんだぞ！！！」

皆さん想像してみてください、普通から考えて美人の二人が人の  
アレについて、

「私の指じゃつかない・・・」とか「お姉様興味津津だったくせに・  
・・・」

とかで口論されたらどう思います？

ものすごい羞恥プレイだと思っんですよ私・・・

確かにその通りだが変なナレーション出てくんなあああああ！！！！

馬騰「そんなことをしてたのかあんたたちは、はあ……  
本当に迷惑かけたねえ。」

刹那「いや、本当にもういいや、  
はつきり言ったら黒歴史と同じだから思い出さないでおきたい……  
（泣）」

馬騰「……翠、蒲公英……」

馬超「……本当に悪かったって……」

馬岱「……あ、あはは……」

馬騰「それは置いておいて……歌実、あんた……いったい何者  
なんだい？」

刹那「まあ、あそこまれ看破されたなら答えるのでしょうか……」

俺は髪結びをとり……

刹那「改めて名乗ろう……性は歌、名は実、字は奏曲、  
二つ名で「天の御使い」、

「カソウノウジンキ  
歌奏風神姫と言ったらわかるか？」

三人「……」(ぼっっっ)

刹那「ん？どうした？」

馬超「な、なんでもない！！(何でこんなにドキドキしてんだよあ  
たしは！！)」／／／

馬岱「な、なんでもないよ！(お兄様男なのにすごくきれい)」／／

馬騰「気にしないでおくれ。(こ奴本当に男なのか?)」／／／

刹那「???」

気にしないでって言っても……顔赤いぞ？大丈夫か？

馬騰「しかしあれだねえ……」

噂で聞いていた御使いがおなごのような者だったとわねえ……」

刹那「言わんでくれ……自覚がある分悲しくなる……」(泣

どこ行ったって女扱いしかされんのか！

チクショウ！いつか世界なんか滅ぼしてやる！！(泣

あまりの悲しさにつなだれていると……

馬超「……ん？ちょっと待てよ……？あつ、そうだ！もしかしたら……！」  
嫌でもなあ……いや、ダメもとで……噂があてになるかどうか……」

刹那「ん？どうした馬超？なんかあったのか？」

急に騒ぎ出した馬超に怪訝に思いながら声をかけると……

馬超「なあ歌実、おまえ母様の病気治せないか？」

刹那「……急にどうした？」

馬超「いや、前に村でだけがや病を治療したとか治したとか聞いたことがあったからな、  
それでどうなんだ？」

刹那「治せるけど？」

馬超「やっぱりか、そうだよなあ……って本当か！?!？」

馬岱「ええ！？うそっ！？」

馬騰「ほ、本当なのかい？」

不死の病とか言われていてなることがないとまで言われているんだ  
よっ」



刹那「ああ、本当だぞ。どんな病でも治せるぞ。」

実際これは本当だ。ここに来る前に本の山の中に五斗米道の医術書があった。

だが、少し疑問なのが薬学しか乗っておらず、針の治療でのごとく記してある物は何故かなかった。だが他にも医療技術があったのでそれを活用し、村でだけがや病気になった者の治療を行っていた・・・

馬超「歌実！頼む！！母様を治してやってくれ！！！」

馬岱「私からもお願いお兄様！！！」

馬騰「翠・・・蒲公英・・・」

馬騰さんや・・・あんたいい娘を持ったねえ・・・ふむ、

刹那「・・・いいぜ？治療してやってもいい。」

馬超「！！じゃあ「ただし、条件があるぞ？」・・・え？」

馬騰「・・・それはなんだい？」

刹那「なあに、簡単なことだ。俺が治療するのは良い、だがその後で簡単に死ぬことは許さん。」

生きること執着すること、これが条件だ。」

馬騰「それは私に戦うな、と言っているのか？」

刹那「違う、俺が言っているのはどんな状況になっても絶対に生きる見せる、

って言っているだけだ。

俺が治療してすぐに死なれたらこちらとしても心苦しいのでな・・・  
せめて、そうだなあ・・・馬超と馬岱、二人が嫁に行つて孫ができるまで絶対死ぬな。

あんだだつて娘たちの晴れ姿や自分の孫、見てみたいだろ？」

馬騰・馬超「ブツ！！」

すると二人は急に嘔き出し、片方は大笑い、  
片方は顔を真っ赤にしてあたふたし始めた、

馬騰「あつはつはつはつは！娘の晴れ姿か！孫か！！確かに見てみたいねえ、」

馬超「な、ななな何言つてやがるんだよお前！？」

あ、あたしみたいなガサツで可愛くない女が嫁になんか行ける訳ないだろう！?!?」

刹那「おいおい、お前さんかなり美人の部類入るぞ？」

行っていることが逆だ逆。可愛いし嫁に欲しいと思えるくらいだぜ？」

馬超「　　っ！！」

刹那「だからわかる言葉で話せ。」

馬騰「ふくつくつく、だったらもらってみるかい？」

馬岱「あっ！だったら私も　　」

刹那「つぶ！！」

思わず引きだしちまったじゃねえか！！

いきなり何！？そのせいで馬超が顔真っ赤にして

「　　@　　っ！」ってばかり言ってる何言ってるのかももうわけわかんねえよ！？

刹那「いきなり何ぶっ飛んだこと言ってるんだ馬騰！？

それに馬岱もついでみたいに乗っかってんじゃねえ！！」

馬騰「私は本気だよ？あんたはそれなりに強いのもわかるし、

天の知識を有していてあんたの血をうちに入れられたら私達、馬一族は安泰だしねえ？

さらに娘の晴れ姿と孫も見られるようになるから一石三鳥って訳だよ。」

馬岱「私はお兄様のこと気が行っちゃったから　ニシシッ　　」

そんなこつたるうと思っただよ・・・

刹那「はあゝ・・・却下だ。俺には目的があるし、旅を続けなきゃなんねえ。」

それにあんただってこれから何が起きるかぐらいわかってんだろ？」

賊がいくらなんでも多いすぎるし、これから黄巾党が活発になってくる時期だ。

馬騰はわかっているだろう・・・

馬騰「ふむ確かにねえ、あんたに目的があるなら残念だねえ・・・」

刹那「さらに言わせてもらつと、それじゃあ馬超の気持ちを無視してるじゃねえか。」

俺はそんなに嫁にもらうんだつたら俺は嫌だ。

添い遂げるのだったらちゃんと好き合つてじゃねえと俺は気に入らない性質だからな、

好かれてねえのに一緒になつて子供作るだけの関係なんて俺は死んでもごめんだ。」

馬超「歌実・・・」

当然だろ？そんなんで子供なんて作つたら一番迷惑をかけるのはその子供だぜ？

不幸な奴を見んのはごめんだ、

刹那「さて、この話は終わりだ終わり！それでどうする馬騰？条件飲むか？」

馬騰「ふむ、飲ませてもらおう。まだ死ぬわけにはいかない理由ができたからねえ。」

刹那「きまりだ。じゃあさっそく薬を作らせてもらおう。」

馬騰「ああ、わかった。それじゃあ部屋を用意するよ。」

そう言つて、馬騰は近くにいた侍女を呼び、俺は部屋に案内された。さうして、さっさと作りますか。

s i e d

馬騰

優しいねえ……目的もあるんだろうが断つた一番の理由は翠のためだろうねえ……あれだけの男、探してもなかなかいやしないだろうねえ。何としても捕まえておければ……

馬騰「翠、蒲公英、何としてもあの男をモノにしちまいな。」

馬超「ぶっ！？な、ななな何言つてんだよ！？私は嫌だつて言つてるだろ！」

急に結婚なんてわかんねえって！！」

馬岱「叔母様、わかったー」

馬騰「蒲公英はいいとして、翠？あれだけのいい男探してもなかなかいないもんだよ？」

あんただって嫌いじゃないだろ？」

馬超「で、でも今日会ったばかりで何も知らないし・・・」

馬騰「じゃあこれから知って行けばいいだろ？そのうえでモノにしちまえばいいだろ？」

それで気に入ったら夜這いでも仕掛けちまいな。」

馬超「っ！」

やれやれこのくらいで動揺なんてしてんじゃないよ、まったく。

覚悟しておきなよ歌実、必ず翠と蒲公英の婿になってもらおうからね。  
(ニヤリッ)

s i e d

刹那

刹那「(ゾクリ)おおっ!？」

なんだ、今さっきの寒気？誰かに目を付けられた様な感覚だ・・・  
嫌な予感が、

刹那「気のせいだといいたが・・・」

そんなことより薬の調合だ。しかし・・・

刹那「これで本当に効くのか怪しいな・・・」

青藍「どうしたのですかマスター？まさか薬が効かないとか・・・」

刹那「ん？いやあな、材料でこれでは効くんだろうが・・・かなり不安な所があつてな。」

紅葉「どう言うことなんだよー？」

刹那「材料がこれなんだが・・・読んでみる。」

青藍「はい、えーっと、冬虫夏草、蓬萊の玉の枝、火鼠の衣、燕の子安貝、

孔雀の羽根

紅葉「蓮華の花、泰山の岩塩、一角馬の角、黄河の水、人食  
い虎の肝臓・・・」

紅葉・青藍「・・・」

言葉を失ったか・・・当然の反応だな。

何せ魔獣・幻獣の材料だから仕方ないか・・・

刹那「さらに驚きなことにそれらの材料が、  
テングノカクレミノ  
『天狗之隠蓑』の中に全部あったことだ。」

紅葉・青藍「何でそんなものがあるんですか（だよ）!？」

刹那「さあ?」

知らねえからどうすることもできねえよ・・・

と、とにかく調合するか・・・

ゴリゴリゴリ・・・

この後、薬を完成させ、馬騰に飲ませて治療は完了、  
最低でも一年以上の訓練が必要であることを伝えると、

「戦場に復帰できる・・・いまからでも血が騒ぐねえ・・・」と、  
黒い笑みを浮かべていた・・・

それを見た馬超達は震えながら

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ・・・」とか、

「無理、無理、無理、無理、崖の上からなんて・・・」とか、つぶ  
やいていた・・・



トラウマでも蘇ったか？

お礼に三人から真名を交換することと、三日間滞在することになり、滞在中は翠と蒲公英と手合わせしたり、料理を振舞ったり、歌を歌ったりした。

だが歌を歌った時や鍛錬が終わった時なんか妙に視線が熱かったよ  
うな？

そんな疑問を持ちながらもあっという間に三日が立ち・・・

翠「・・・本当に行くのか？」

刹那「ああ、俺には目的があるしな。」

蒲公英「グスツ、刹那お兄様・・・」

刹那「おいおい、泣くなよ二人とも・・・これが一生の別れじゃね  
えんだから・・・

縁があつたらまた会えるさ。」

蒲公英「・・・また会える？」

刹那「ああ、また会えるさ・・・だからさよならなんて言わない・・・

また会おう!!」

蒲公英「うん!また会いましょ!刹那お兄様!!」

翠「じゃあな刹那!また会おう!!」

こうして、俺は旅を再開した。

第三十五話 馬騰の治療 また会おう!! (後書き)

笑い猫「緊急アンケート! 馬騰とついでに華雄の真名が決まってる  
せんでした!」

刹那「お前バカだろ!!」

笑い猫「仕方ねえだろ! 決めなかったんだから!  
とにかく二人の真名のアイディアください!!  
よろしく願います!!」

第三十六話 口は災いのもと (前書き)

笑い猫「久しぶりの投稿!!皆様やっと復活したぞおオオ!!」

刹那「あれ?だれだっけ?」

笑い猫「忘れられてらっしやるの!?!ひでえ!?!」

刹那「自業自得だバカめ、なかなか投降しなかった貴様が悪い。」

笑い猫「すみましえん・・・」

## 第三十六話 口は災いのもと

旅の途中、冬月を仲間にして間もなく、  
あちらこちらでちらほら頭に黄巾を付けた賊が確認され始めていた。  
・  
・

刹那「（そろそろだな・・・）」

黄巾党が活発になって来ていることを感じ取っていたため、  
どこかの諸侯に協力しようか、と考えていた頃の話・・・

〈荒野〉

俺は客将になるべく、とりあえず建業を目指していた。

どうして建業かって？近かったからさww（笑）

そう言えば俺は気になったことがあった・・・

刹那「うゝん・・・」

青藍「どうかしましたかマスター？難しそうな顔をして唸ったりな

んかして？」

刹那「ああ、ちょっと疑問に思うことがあってな、」

紅葉「疑問に思うこと？」

刹那「この頃忘れっぽくてな？」

この世界のこととどんな出来事が起こるのかとか、恋姫のゲームやってたのにどんな奴が出てくるとか、少ししか思い出せなくなっちまったんだ。」

紅葉「ああ、それはこの世界に精神が定着し始めてるからだよ。」

刹那「？どう言うことだ？」

青藍「本来、転生といった類は前世の記憶を失ってしまうことが当たり前です。」

ですがマスター場合は神様の暇つぶしによるもの、それゆえに少しだけ覚えていられるようです。」

刹那「覚えていないのが当たり前、ってことか？」

紅葉「そう言うことだよ、」

今覚えていられるのは神様サービスみたいなものなんだよ。」

・なるほど・・・原作のキャラを覚えていないのはそう言うことか・・・

・・・あれ？

刹那「なあ？俺、現世の記憶は残しておいてほしいって言わなかったっけ？」

紅葉「・・・あゝそれはきつと・・・」

刹那「きつと？」

青藍「きつと神様の『うっかり』何だろうと思いますよ？」

・・・おい・・・

刹那「『うっかり』ってなんだよ、『うっかり』って・・・」

紅葉「仕方ないんだよ・・・神様ああ見えて結構年往ってるし・・・」

へえ、そうなんだ？

ゾクリッ

紅葉「フヒイイッ！?!?!い、今声がつ!?!な、なにかとてつもなく寒気が!?!?」

どこからともなくこう言う言葉が響いてきた・・・  
まるで地獄の蓋が空き、中から何かがゆっくりと這い出てくるよう  
な冷たい声で・・・

誰が結構年が往ってるのかなあああん？紅葉ちゃあああああ  
ん？

紅葉「な、何これっ!?!?ノピヤアアアアアアアアアアア  
・・・」

影から手のようなモノが伸びてきて紅葉は呑み込まれてしまった・・・

刹那「く、口は災いの元ってことか・・・？」ガクガクブルブル・・・

やばい・・・口にはマジで気をつけよう・・・

青藍「マスター、今どれほどのことを覚えてらっしゃいますか？」

刹那「あれえ!?!?目の前であんなことがあったのにスルーっ!?!?  
冷静すぎるのもどっかと思うぞ俺っ!?!?!?」



青藍「きつと大丈夫ですよ、神様は寛大ですから・・・」

信じていいんだよなそれ！？なんかかなり遠い目になってるぞ！？

刹那「本当に大丈夫かよ・・・いや、もうこの際置いておこう・・・  
どれほど覚えているかだったな？ほとんど忘れちゃったからなあ？  
え〜つと、孫策の暗殺、赤壁の戦い、そして蜀ルートの最後とかな  
ら覚えてるぞ。」

青藍「それだったら最後まで覚えてられるはずだと思いますよ。」

刹那「そうか、それは良かった・・・」

俺がここに来た目的の意味を失うんじゃないかとひやひやしたぞ。」

俺の求めているのは納得のいく終わり方、  
覚えてなかったら目的を失うとこだった・・・  
忘れてしまったものもあるが今覚えていられるもんがあればなんと  
かなるか・・・

刹那「まあ今のを覚えてられるのならいいか、  
あーよかった、疑問に思ってることがなくなったからすっきりした  
ぞ。」

青藍「そうですね、それはそうとマスター。」

刹那「ん〜？なんだ〜？」

青藍「ここから少し行った先で賊の集団が三人の旅人を襲っているようですよ?」

刹那「そうか……って何い!？」

青藍が指す方向を見てみると、槍でかなりの数の賊と戦っている女性、

その女の仲間と思われる女性が二人ほど見えた。

刹那「槍で戦っている女はかなり強いが……そう長く持ちそうにないな……あつ」

青藍「今そのうちの二人が人質にとられてしまったようですが……どうします?」

刹那「(ざつと500ほど位は入るな)はあ……決まってるだろ?」シユル……

そうこう言っている間に槍で戦っていた女は気絶させられ、さらに人質を取った二人も気絶させられた所だった……

『急がなきゃまずいな』と思いつつ、

髪結びを解き、俺は『波月』に四本の矢を一気に番え、弓を引いていき……

刹那「助太刀するにきまつてるだろ？」

ヒュヒュヒュヒュンツ！！

矢を放ち、『炎竜、氷竜』に持ち替え、冬月に走らせる・・・

刹那「冬月、俺が飛び上がって奇襲をかける・・・お前は突っ込め  
！」

冬月「ブルルツ！（わかりやしたぜ旦那！）」

刹那「（あれ？そっぴやなんで冬月と話せんのだろっ？）」

場違いな疑問が浮かんだがまあいいかと浮かんだ疑問を振り払い、  
賊の集団に突っ込むのであった・・・

side 三人称

????「ハアアアアアアッ！！！」

ドスッ！ドスッ！ドスッ！ドシュツ！！ドスッ！ズシュツ！！！！

「があああっ！！」「グハアッ！」「ばか・・・なっ・・・」

賊の眼にもとまらぬ速さで突き、切り裂き、葬り去る!!

「なんて女だ・・・だが仲間はまだまだいるぜ!!  
さっさとその女を殺っちまえ!!」

???「はあ・・・はあ・・・はあ・・・くそっ・・・キリがつ・・・  
ないっ!!」ザクンツ!!

神速の速さで賊を次々と葬っていく。繰り返される戦いの中、  
疲労の蓄積は確実に彼女の体の反応速度を鈍らせていく・・・  
打ち倒された賊は100を超えていたが賊はまだまだ減ることを知  
らない。

だが、肩を大きく上下させるほど疲労は蓄積大きくなっていたが、  
彼女は諦めることなく槍を振り、敵を打ち倒していた。しかし・・・

???「きゃああああーっ!!!!」

???「はっ!?風っ!稟っ!!」

???「星ちゃん・・・すいませんなのですよ・・・」

「がははははははっ!!」

おい姉ちゃん、この二人の命が惜しかったらおとなしくしゃがれ!

「!!」

彼女が共に旅をしていた仲間の二人が三人の男に人質に取られてしまった・・・

「???」「いけません星!

私達のことなど気にしては「うるせえっ、だまってる!」「っ!!」「  
チャキッ

「ったく、さーて・・・どうする?」

「???」「くっ!・・・卑怯者め・・・」からんっ

彼女は大切な仲間を失うわけには行かず、槍を地面に落とした・・・

「へっ、何とでもいいやがねっ、野郎ども!まずはその姉ちゃんに  
は眠らせる、

また暴れられても困るからなぐ・・・クッククックッ」

「へい、わかりやしたぜ!オラッ!!」「ドスッ!!」

「???」「ぐっ!!」「ドサッ・・・

「???」「星(ちゃん)!!」「」

長い時間戦っていたが、仲間を人質に取られ、抵抗することもかなわず、

腹に拳を受け虚しくも気絶してしまつ・・・

「クツハツハツハツ！！ザマア見やがれ！さうて、その二人にも  
暴れられても面倒だ。

お前らも寝てな！！」

ドスッ！ドスッ！「あ・・・」「グッ！」

ドサツ・・・

そして人質に取られた二人も同じく腹に拳を受け、気絶させられて  
しまった・・・

「クツクツクツ、うまくいったぜ・・・さうて、これで上物の女が  
手に入ったわけだ。

後は着いてからのお楽しみと言つわけだな・・・ふっはっはっ  
は！！！！」

「げっへっへ・・・」

「ぐっぶっぶ・・・」

賊はこれから後、捕まえた女をどうのようにして可愛がってやるのかと思考を巡らせており、彼女たちを担ぎ運ぼうとしたその時、

ヒュヒュヒュンッ！ ドスッ！ドスッ！ ドッドスッ！！

「ギャッ！」 「ぐあぁっ！」 「ゴフッ！」 「ゲヒッ！」

『なっ！？』

突如、飛来した矢は彼女たちを連れて行くこととした4人に突き刺さる！！

「なっ・・・につ！？矢だとっ！！？どこから飛んでっ」「ひひーんっ！！！」

え？（ドカアアアッ！！）げばあぁっ！！？！？？」

突然の事態に混乱していたその瞬間、その隙を突くように白い馬は現れ、

命令していた賊を蹴り倒すとその二人を守るかのように前に立ち、賊を威嚇し始めた。

????「ブルルッ！！！」

「な、なんだあの馬！？邪魔しやがっ」「ザクンッ！！」「があっ！？」「  
「なっ！？」「ザクンッ！」「ぎゃあああっ！！！！」

ドスッ！ドスッ！ギユパアアアッ！！

「グアアアアアアッ！！！！」「グウウウアアアアアッ！！！！」

さらに、後ろにいた賊の仲間から次々と絶叫が響き渡る・・・  
その声に反応し、その方向に目を向けるとそこにいた誰もが驚愕し、  
誰もが見惚れた。

「？？？」「やれやれ、最低だな・・・」

初めに目に入ったのは鮮血、そして人の手足や首が舞っていたいて、  
そこはまるで嵐でも通ったではないかと言っほど散乱していた。

中心には艶のある長い黒髪、獷猛ともいえる炎を宿したかのような  
蒼い瞳、

そして全体的に見て芸術と言っていいほどの美しい女が立っていた。  
・  
・



刹那「全く、本当に世の中腐つとるなあ・・・  
こんなくだらないことしかできない下種どもが多くて頭が痛いよま  
ったくっ！」

賊を切り捨てた後、苛立ちながら冷たい視線を賊に向けつつ吐き捨  
てる。

「テ、テメエ！　いったい何もんだ！？　どっから現れやがったんだ！  
？」

賊はあわてて剣を構え、どなり声を上げるが、

刹那「そんなことはどうでもいいだろうが、聞かれても答える義理  
はねーしな。」

「じ、このアマ・・・！！　ふざけやがってー！！」

賊の一人が切りかかったことが合図になり、周りにいた賊の仲間は一  
斉に切りかかる・・・

プチンッ

刹那「この野郎・・・誰が女だ・・・」「ゴゴゴゴゴゴッ・・・

何かが切れる音が聞こえ、顔中に怒りのマークがいくつも浮き出し

てきた・・・

背中からはどす黒い殺気を出しながら両手に持った双剣を構えた途端、

『トンッ』

ブシューウウウウウツッ！！！！

まず一人目の首が飛び・・・

刹那「・・・俺は男だああああああああ！！！！！！」

『なっにいいいいいいいい！！！！？』

やっぱり誰が見ても女にしか見えねえのかよっ！？こんチクシヨ

っ！！！！！！！！

ドスッ！ザクッ！ザンッ！！ザンッ！！ザクッ！ザクッ！！ドスッ！ドスッ！ドシュッ！！

女にしか見えないと言う悲しみを背負いつつも、

同時に両手に持った双剣を振り、賊を瞬く間に切り裂いていく・・・それは踊りを踊るかのような美しい動きであり、とても戦っている

ようには見えないが、  
同時に寒いものを感じさせるものでもあった・・・

なぜなら女にしか見えないという悲しみが大きすぎて、  
怒りの形相があまりも怖すぎたからである。

刹那「俺は男だあああああああ！！！！文句あつかああああ  
あああ！！！！」(泣)

「ぎゃあああああつ！！！！阿修羅が出たぞおおおおお！！！！  
！！！！」  
「お、お母さああああああん！！！！！！！！」

賊たちは、恐怖のあまり錯乱・暴走してしまった。

今の彼女「あーん？」(ギロリッ)失礼・・・

彼に近づくことは即・殺を意味する・・・

第三十六話 口は災いのもと (後書き)

続けてもう一つ!!

第三十七話 お帰り紅葉・・・っていったい何があったああ！！

刹那「・・・そらっ！これで最後っ！！」ザクンッ！

「ぐあああ・・・っ！」

刹那「ふう　　っ・・・終わりっと。」

あれから数十分後、賊を根絶やしにして

『女三人にこんだけの数で襲おうとしたのか・・・情けねえ、それに誰が女だ・・・ぶつぶつ』と、

自分が切った賊どもに不満を垂れながら呆れた視線を向けつつ武器をマントに収めていた所・・・

青藍「マスター、お疲れ様です。」

刹那「ああ、ありがとよ。彼女たちは？」

青藍「気絶しているだけで命に別条はありませんが、

かなりの力で殴られたみたいですから夜まで起きないと思います・・・

それと早めに彼女たちを連れてここから離れた方が良さそうです。」

刹那「？どうしてだ？」

青藍「理由としては、一つ、こんな血生ぐさい所で居たいですか？目を覚ました時周りが死体だらけなんて目覚めが悪くなるじゃない

ですか。

二つ、彼女たちは夜まで起きないので野宿することが分かり切っていますから、

ここで野宿するのは最適ではないと思います。

そして最後はあれです。」

刹那「あれ？」

青藍が指を指した方向を見ると砂塵が舞っていて旗が見えていた・・・

刹那「官軍か・・・」

青藍「そう言うことです。別に悪いことはしてませんが・・・」

刹那「捕まったらめんどくさい上に信用ならない・・・か？」

青藍「そう言うことです。

このあたりの官軍は権力に物を言わせて何されるかなんて分かった物じゃありません。

それに気絶した彼女たちも何をされるか・・・」

刹那「わかった、ほんじゃこのお嬢さん方にはマントの中に入れてもらってとつとと行こう、

これで移動が楽ちゃん ってか？」

青藍「さあ、さっさと行きましょう。」

刹那「・・・なあ、冬月よ・・・この頃青藍が冷たいと思うのだが・・・」

冬月「ブルルツ（きつと気のせいですが・・・たぶん）」

そうなのか？俺が困り顔を見ると恍惚そうな笑みを浮かべてるように見えたのだが？

青藍「（ふふふ・・・紅葉がない今はマスターの困り顔でも堪能していきましょう）」

・・・気のせいだよな？

そんなことも思いながらも三人の彼女たちを回収した後、その場からさっさと離れたのだが、接触しかけていた官軍から避けるように離れたため、街行くには遠回りになってしまっていた。そんな訳で近くの森で・・・

刹那「野宿です。ちなみに今夜はメンマ丼でござる。」

青藍「マスター、いきなりですね。と言うかメンマ丼？」

刹那「・・・なんとなく？」

青藍「……ふう……早くメソマ井を完成させてくださいね……」

「何だよそのため息は」と愚痴りながらも作っていた。たまにはいいだろ？うまいんだからよお……

まあそろそろ気絶している三人も起きるだろうと思いつつ、作っていた……

刹那「しかし、その蒼髪の子かなり腕があると思うのだが……どっかの武将かねえ？それにその二人もタダものじゃないような気がする……」

青藍「それはわかりませんよ、起きたら聞いてみたらいいじゃないですか。」

刹那「それもそうだな。所で紅葉は？ソロソロ帰ってくればよいのだが……？」

まさかまだお仕置き続いているのか？」

青藍「……少し問い合わせてみます……」

おい……なんだその間は……？

心なしか目に何か哀春溢れているように見えたが……？

青藍が神様と問い合わせていた時、そんなことを思っていたがその



意味はすぐに分かった・・・

その後、すぐ横で（ポオツ）と光が発して、そこから出てきたのは紅葉だった・・・

紅葉「あははははは・・・葱が・・・縄が・・・蝋燭が・・・」

刹那・青藍「・・・・・・・・」

・・・何があつた！？！？！？

刹那「お、おい紅葉！？こつようつうつう！！？！？」

青藍「・・・紅葉・・・可哀想に・・・うつつ」（ホロリ）

刹那「そんなことやつてる場合か！

紅葉がやばいぐらいに壊れてるのは見りゃわかるが何をどうやった  
らここまでに何だよ！？」

片手に葱を持ってもう片方は縄、そして最後に火をともした蝋燭を  
前して座っていた・・・

しかも髪は真っ白になっていて眼は濁りきつていて、  
笑い方は乾いた笑い方をしていたのだった・・・

青藍「・・・それは・・・ダメです！！私の口からではとてもっ！  
・・・クウツ！！」

刹那「ほんとにどんだけのことしやがったんだ！あのクソ神いい  
いいいい！！！！！！」

やりすぎだろっ！？やりすぎだろっがよおおおっ！！  
もう少し自重しろやああああ！！！！

頭を思いっきりかきむしってやり場のない怒りに憤りを感じていた  
のだった・・・

紅葉「・・・だい・・・じょう・・・ぶ・・・です・・・よ？ます・・・た  
・・・」

刹那「っ！！？紅葉っ！！」

眼に微かに光が戻ってきて、疲れや痛いことを隠すかのように、  
俺に心配掛けまいと笑いかけてきた・・・

紅葉「もう平気・・・ですからね？・・・マスター・・・」(ニッコ  
リ)

この子・・・ええ子や・・・

なんて健気なの!!

刹那「青藍、早く治ってもらうために歌でも歌ってやろうか・・・」  
(ホロリ)

青藍「ええ、そうですねマスター・・・」(ホロリ)

今の紅葉を見てると可哀そう過ぎて涙腺が決壊しそうだ・・・早く元通りにしなくては!!

side 三人の旅の女子

???」「・・・う、うう・・・?ここは・・・?」

私は一体どうなったのだ?確か賊に気絶させられて・・・?ここは森・・・?

移動させられた様だが縄で縛られているわけではない・・・捕まったのではないのか・・・?

???」「・・・っは!風っ!稟っ!!!」

すぐ横を見ると風と稟が眠っていた・・・

「……う・星……？」

「……星・ちゃん？」

「……よかった、気がついたか。」

「……私達は一体どうなったのですか？」

貴方を気絶させた後私達も気絶させられたはずですが？」

「……それは私にもわからん、しかし縛られておらんし、服も乱れておらん……捕まったのでは」

「ほんとにどんだけのことしやがったんだ！あのクソ神いいいいいい！！！！！！」

「つ！?!?!?!」

いきなり怒鳴り声が聞こえ、その方向に身構え警戒を高めようとしたが、

その光景を見た途端……

三人『……』

私達は固まってしまった……

おかしな光景だ・・・髪の毛の長い美しい女性の方は頭をかきむしりながら錯乱し、

手のひらに乗るくらいの大きさの女子が二人・・・

片方は口元をさえホロホロと泣いていて、

もう片方は・・・なんとも説明しがたいことになっていた・・・

三人『（何なんだこの光景は・・・）』

そんな微妙な雰囲気の中、

目の前の彼女たちは私達が目を覚ましたことに気がついていないのか、

2、3言葉交わした後、彼女らは急に演奏を奏で始め、歌い始めた・・・

『もう何も怖くない、怖くはない』

『誰かが息　　をする度に

澄んだ水が　　濁っていく

この森の　　中にいると

気後れしそつだよ　　』

・・・美しかった・・・

私はここまで澄んだ歌は生まれて聞いたことがなかった・・・

風や稟も私と同じなのか歌に聞き入り、

彼女たちの姿を見つめ、ただその歌が終わる時まで聞き惚れていた・・・

歌い終わる頃には奇怪なことになっていた小さな女子はまともに戻っていた。

そして、歌い終わると私達は無意識に拍手していた・・・

s i e d

刹那

歌い終わって紅葉の方を見てみると、髪の色とか他の可笑しな感じはなくなっていた・・・  
良かった、元通りに戻ってくれたぞ!!

『あの糞神とは一度 O H A N A S I せねばなるまいな・・・』と、

黒いことを考えていた時・・・

『パチッパチッパチッパチッ・・・』

刹那「え？」

「????」「見事な歌でしたぞ、この趙子竜、感服いたしましたぞ。」

「????」「ええ、本当に見事でした。」

「????」「風もなのですよ。」

どうやら気がつかないうちに気絶していた三人は目が覚めていたようだ、

と言つか趙子竜・・・趙雲だったとはな・・・と少しびっくりしていた。

刹那「それはどうも、体の方は何ともないか？ドンピシャで割り込んだのだが？」

「????」「ええ、おかげさまで・・・貴方が助けてくれたのですか？」

刹那「ああ、そうなるな。俺は歌実、字は奏曲って言うんだ、貴女方は？」

趙雲「私は姓名を趙雲、字を子龍と申す。」

程立「風は程立、字を仲徳といいます。」

戲志才「私は戲志才と申します、助けて下さりありがとうございます。ごいませ。」

刹那「ああ、どういたしまして。」

滞りなく自己紹介終了、とりあえずわかったのは二人は偽名使ってるな、

理由は・・・なんだったつけ？やっぱり忘れとるな、

・・・まあいいや、突っ込まないでおこうと思っていた。

程立「所で風は少し聞きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

刹那「ん？別に良いがなんだ？」

程立「ぐう・・・」

戯志才・刹那「寝るな！！」

程立「おおう！？少し気を抜いたので寝てしまいましたのですよ。」

いや寝るなよ！質問しておいて急に寝る奴なんて初めて見たぞ俺！？

程立「いやいやそれほどでも。」

刹那「寝めてねえ！！って言うか心を読まれただど！？」



「この子・・・侮れん！！」

『おつおつおつ、そんなに慌てんじゃねえぜお嬢さん、女だつたらどっしりと構えて軽く流せるくらいがいい！つてもんだぜ！』

戯志才「風！・・・すみません、歌実殿・・・」

刹那「いや、別にいい・・・腹話術まで扱えんのかよ・・・」

程立「・・・本当に何事もなかったようにサラリと流すのですか。」

刹那「この際だからもうどうでもいいや・・・」

それにまた女だと思われてるらしいけど聞かなかったことにするもん・・・

この際性別に関しては触れないもん！

やべえ、自分で言つて悲しくなってきたや（泣

刹那「で？聞きたいことつてなんだ？」

程立「おお！？そうでした、その子たちはいつたい・・・？」

刹那「こいつらか？俺のデバイス・・・まあ相棒みたいなもんだよ。」



悲しくなる！自分でもわかってるから非情に悲しくなるからっ！？  
「！？」

趙雲「あっはっはっは、私の目が確かならまったく主などには見えぬ」

(グウウ~~~~~)「ん？」

紅葉「あ……うう~~~~、どうでもいいけどおなかすいたんだよ  
！！

これはご飯を速く食べるべし！！／／／」(ビシッ！！

その場の一同『……ぶふっ！！あっはっはっはっは！！！！』

紅葉「う~~~~！！！！／／／

ごまかし方が無理矢理だったのは認めるけどそんなに笑はないですよ~~~~！！！！／／／」

その後を取った食事ではメンマ丼を眼を輝かしながら食べる趙雲(目が怖ええ……)、

程立が不意に口走ったことを聞いて顔を真っ赤にして鼻血を吹く戯志才(何を言われた?)、

メンマ丼の中の材料であった葱を見てまた震えだした紅葉(トラウマになったか……)、

それを涙目で慰める青藍「大丈夫！大丈夫ですからね紅葉！！」(……何が?)、

そして俺が男であることを暴露した時、口からメンマを噴出した三人(チクシヨウ……)

こんなにぎやかな食事を取りつつも夜は更けていった……

〜次の日〜

戯志才「すいません歌実殿、食料をこんなに分けてもらって・・・」

刹那「いや別にかまわんよ、困った時はお互い様だ。」

程立「しかしですね〜おん・・・お兄さん、

ここまでされて置いてお返しが何もできないというのも風は心苦し  
いと思っっているですよ。」

趙雲「ふむ、確かに風の言う通りだが・・・」

刹那「（チクシヨウ俺男なのにまだ言い間違われかけたのかよっ！  
〜）

あ〜・・・だつたらあれだ、

次に出会ったら一緒に酒でも飲んで真名でも交換しないか？」

程立「それで良いのですか？てつきり稟ちゃんの体でも要求するの  
かと・・・」

戯志才「か、歌実殿が嫌がる私を捕らえ無理やりに外見とは不釣り  
合いな逸物を・・・ぶはっ！！」

刹那「いらんことを言うな！いらんことを！！辺り血塗れになっち  
まったるうが！！

てか戯志才！何が不釣り合いだ！！

たく・・・俺は快樂主義者何でね・・・俺は俺が面白いと思えた

ことなら何でもいいのさ、

それにお礼でなんかで誰かを抱くなんて俺は死んでも嫌だね。」

戯志才「ふがふがつ」

程立「はい稟ちゃん、トントンしましょう。」

趙雲「うむ、ならばそれとは関係なく私とする気はないかな歌実殿？」

刹那「人をからかうために言ってるなら殴るぞ、趙雲？」

趙雲「おお、怖い怖い。」

刹那「やれやれ、まあそう言うことだ、また会おう、元気だな!!」

そうして、趙雲たち一行と別れた・・・

さて、目指すは呉だ・・・行くところか!

第三十七話 お帰り紅葉・・・っていったい何があったあああ！！（後書き）

笑い猫「こんな感じっす！！」

刹那「・・・キャラ崩れてねえか心配な所だな。」

笑い猫「そこが一番怖い所っす・・・」

刹那「・・・お前がなんかキャラ崩れてねえか？」

笑い猫「・・・あれ？」



笑い猫「それではさらば~~~~~!!」

刹那「無視すんなやあつあああああああああああああああああああ  
つつつ!!!!!!」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4804p/>

---

心に歌を刻む武人

2011年8月2日11時51分発行